

仙台市文化財調査報告書第71集

# 後河原遺跡

— 平安時代以前・中世の水田跡の調査 —

1984年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第71集

# 後河原遺跡

— 平安時代以前・中世の水田跡の調査 —

1984年3月

仙台市教育委員会

## 序 文

ここ数年来、本市における埋蔵文化財包蔵地に関する発掘調査の頻度が高くなっています。とりわけ名取川沿岸に展開する沖積地に包蔵されている遺跡群の調査が多く、原始・古代人の低湿地帯に生活の場を求めつゝ挑んだ様相が少しづつ解明されてきています。沖積地は肥沃な耕土につながり、生産の場として土地利用がなされてきたことは言うまでもないですが、果して何時頃から開かれるかは考古学上の命題でもあったのです。本市のこれまでの調査では、すでに縄文時代早期から何らかの働きかけがあったことが荒川北岸の山口遺跡や下ノ内浦遺跡から出土した押型文土器（8,000～9,000年前）の証しがあります。また、縄文時代中期以降になると自然堤防上には集落も營まれるようになる（下ノ内・六反田遺跡の調査）ことも検証されています。最近は弥生時代の水田跡も発見され、東北弥生文化の開花も西日本と年代差がなく展開されて行く歴史も解明されてきています。

このような検証例は遠い縄文時代から沖積地へ挑む人間と自然との葛藤の歴史の深さを物語る例証として大変興味深いことがらであります。名取川流域にはこうした人間の葛藤の歴史の足跡が数多くパックされている所として重要な地域であります。

本書は名取川南岸下流域にある後河原遺跡の発掘調査の成果を詳細にまとめ、ここに公開するものであります。この資料刊行に際しましては多くの方々の御教示を得ましたこと、またご協力、ご助言を賜わりましたことは誠に感謝にたえません。ここに深甚なる御礼を申し上げるとともに、今後共文化財保護行政に対し広く御援助を賜りますことを切に念願し序といたします。

昭和59年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 例 言

1. 本書は宅地造成に先立って行なった後河原遺跡（仙台市文化財登録番号C-208）の発掘調査の報告書である。すでに公表された広報紙等に優先するものである。
2. 報告書作成のための整理は佐藤甲二、青沼一民が担当し、編集は佐藤甲二が行った。
3. 本文の執筆は佐藤甲二がⅠ、Ⅱ 2~5、Ⅲ（検出遺構）、V 1・2・4、青沼一民がⅡ 1、Ⅲ（出土遺物）、IV、V 3、東北大学院生鄧聰がⅢ 4（石器）を行った外、下記の方々より玉稿を賜わった。(敬称・略)

仙台：後河原遺跡における水田跡の探査	藤原宏志、杉山真二	宮崎大学農学部
	佐々木章	大分短期大学
後河原水田遺跡土壤	庄子貞雄、山田一郎	東北大学農学部
花粉分析	竹内貞子	斎藤報恩会自然史博物館
後河原遺跡Ⅲ層水田跡出土植物遺体	星川清親	東北大学農学部

4. 作図・写真撮影等については、下記のとおり分担した。
- 遺物実測・トレース：庄子敦、佐藤幸子、阿部多津子、吉田康子、金沢君代、菅原恵美子、  
鄧聰
- 遺物拓影：金沢君代、中野裕平
- 遺物写真：佐藤甲二
- 遺構トレース：熊谷信一、菊地豊
- 遺構写真：佐藤甲二、青沼一民、庄子敦
5. 発掘調査及び遺物整理において、下記の方々に御助言・御協力を賜わった。(敬称・略)  
芹沢長介（前東北大教授）、植崎彰一（名古屋大学教授）、乙益重隆（国学院大学教授）、藤沼邦彦（宮城県文化財保護課）、佐々木隆（仙台市科学館）、竹内貞子（斎藤報恩会自然史博物館）、藤原宏志（宮崎大学教授）、杉山真二（宮崎大学院生）、佐々木章（大分短期大学講師）、星川清親（東北大学教授）、庄子駒男（東北大学）、庄子貞雄（東北大学教授）、山田一郎（東北大学）  
特に、陶磁器の鑑定は芹沢長介氏、植崎彰一氏、藤沼邦彦氏、石質鑑定は佐々木隆氏に御教示をお願いした。
6. 本報告書中の土層の土色・遺物の色調については「新版標準土色表」(小林、竹原：1973)を使用した。また、陶磁器の色調については「色名小辞典」(日本色研事業：1980)を使用した。
7. 本報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。

8. 本報告書中使用の用語として

- (1) ローマ数字使用的層位名は基本層位を表し、算用数字使用的層位名は造構堆積土を表す。
- (2) 造構名の略語として溝跡—S D、井戸跡—S E、土壌—S Kを使用した。

9. 本報告書図版内の表現として

- (1) 方位は全て磁北を北としている。磁北方向は真北に対して西偏7°0'である。
- (2) 土器や陶器類で中心線が1点鎖線のものは、図上復元実測図である。

10. 造構觀察表内の計測値は、造構調査面に於ける値である。また、壁角、断面形態については、深さ10cm以下のものは省いた。

11. 遺物の登録に際し、分類略号を次のようにした。

B	弥生土器	E	須恵器	I	自然遺物	L	木製品	P	土製品
C	土師器 (非ロクロ)	F	丸瓦	J	陶磁器	N	金属製品	Q	赤焼土器
D	土師器 (ロクロ)	G	平瓦	K	石製品 (石器)	O	骨		

12. 調査時に命名した造構名を一部変更した。また、溝跡・井戸跡・土壌の欠番は、検出時命名のものが、その後の調査で造構として認定されなかったものである。変更及び認定された溝跡・井戸跡・土壌番号を下記に示す。

造構名	検出層位	備考	造構名	検出層位	備考
S D 1	1号河川跡上面		S D 31	IV層上面	
S D 2	Ⅳ層上面	1号河川跡に変更	S D 32	IV層上面	
S D 3	1号河川跡上面		S D 35	IV層上面	
S D 4	1号河川跡上面		S D 36	IV層上面	一部完掘
S D 9	1号河川跡上面		S D 37	IV層上面	
S D 10	Ⅳ層上面		S D 38	IV層上面	
S D 11	Ⅳ層上面		S D 41	V層上面	Ⅳ層水田施設
S D 12	1号河川跡上面	未掘	S D 42	V層上面	Ⅳ層水田施設
S D 13	1号河川跡上面	未掘	S D 46	S D 27底面	
S D 14	1号河川跡上面	未掘	S D 47	V層上面	Ⅳ層水田施設
S D 15	1号河川跡上面	未掘	S D 51	Vc層上面	
S D 21	Ⅳ層上面		S D 52	Vc層上面	
S D 23	Ⅲ層下面	Ⅲ層水田施設	S D 53	Vc層上面	
S D 24	V層上面	一部完掘	S D 54	Vc層上面	
S D 25	IV層上面	一部未掘	S D 55	Vc層上面	
S D 26	IV層上面	一部未掘	S E 1	V層上面	
S D 27	IV層上面	一部未掘	S E 2	V層上面	
S D 28	IV層上面	一部未掘	S K 9	IV層上面	
S D 29	IV層上面		S K 12	Ⅳ層上面	
S D 30	IV層上面				

13. 全資料は仙台市教育委員会で一括保管してあるので活用されたい。

## 本文目次

序 文	
例 言	
第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 調査の方法と概要	3
1. 調査に至る経過	3
2. 調査方法	3
3. 基本層位	4
4. 調査概要	4
5. 検出溝跡の断面形態	6
第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物	9
1. Ⅲ層上面	9
2. Ⅳ層上面・Ⅴ層上面	22
3. Ⅵ層上面	32
4. Ⅶa層上面	35
5. Ⅶc層上面・Ⅷ層上面	42
第Ⅳ章 その他の出土遺物	52
1. 基本層位Ⅰ層	52
2. 基本層位Ⅱ層	52
3. 基本層位Ⅳ～Ⅶ層	56
第Ⅴ章 考察とまとめ	57
1. 検出遺構の所属年代	57
2. 水田跡・小溝状遺構について	60
3. 出土遺物	62
4. まとめ	64
付章 諸分析	65
1. 仙台：後河原遺跡における水田址の探査	65
2. 後河原水田遺跡土壤	71
3. 花粉分析	73
4. 後河原遺跡Ⅲ層水田跡出土植物遺体	77

## 写真図版目次

写真図版1	植物遺体	78	写真図版13	弥生土器・土師器1	90
写真図版2	動植物遺体	79	写真図版14	土師器2	91
写真図版3	遺跡全景	80	写真図版15	赤焼土器・須恵器1	92
写真図版4	検出遺構1	81	写真図版16	須恵器2	93
写真図版5	検出遺構2	82	写真図版17	墨書き土器	94
写真図版6	検出遺構3	83	写真図版18	陶器	95
写真図版7	検出遺構4	84	写真図版19	陶磁器	96
写真図版8	遺物出土状況1	85	写真図版20	瓦・土製品・石器・石製品	97
写真図版9	検出遺構5	86	写真図版21	罐・金属製品	98
写真図版10	検出遺構6・遺物出土状況2	87	写真図版22	木製品1	99
写真図版11	検出遺構7	88	写真図版23	木製品2	100
写真図版12	検出遺構8・遺物出土状況3	89			

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第13図	Ⅲ層水田跡出土遺物(木製品1)	20
第2図	調査対象区位置図	3	第14図	Ⅲ層水田跡出土遺物(木製品2)	21
第3図	調査区配置図	4	第15図	Ⅳ層上面・V層上面 検出遺構全体平面図	23・24
第4図	溝跡断面形態	6	第16図	S D1・3・4・9平面図・断面図	25
第5図	調査区基本層位	7・8	第17図	S D24・25・26平面図・断面図	26
第6図	Ⅲ層上面検出遺構全体平面図	11・12	第18図	S D27・28・29平面図・断面図	27
第7図	畦・作土断面図	13・14	第19図	S D30・35、S E2平面図・断面図	28
第8図	水口平面図・断面図	13・14	第20図	Ⅳ層上面検出遺構出土遺物 (土師器・須恵器)	30
第9図	S D23平面図・断面図	13・14	第21図	Ⅳ層上面・V層上面検出遺構 出土遺物(陶磁器・石製品・木製品)	31
第10図	Ⅲ層水田跡出土遺物 (弥生土器・土師器1・赤焼土器・須恵器1)	16	第22図	Ⅵ層上面検出遺構全体平面図	33
第11図	Ⅲ層水田跡出土遺物 (土師器2・須恵器2・陶磁器・瓦)	17	第23図	小溝状遺構断面図	34
第12図	Ⅲ層水田跡出土遺物 (土製品・石製品・金属製品)	19	第24図	S D46平面図・断面図	34

第25図 VI層上面検出遺構	第36図 1号河川跡出土遺物(須恵器2)…50
出土遺物(土師器)…34	
第26図 VIIa層上面検出遺構全体平面図…37	第37図 1号河川跡出土遺物 (瓦・土製品・石製品・木製品)…51
第27図 S D41・42・47平面図・断面図…38	第38図 基本層位出土遺物
第28図 G・H-21グリッド東壁断面図、 S D21、S E1平面図・断面図…39	(土師器・須恵器・陶磁器1)…54
第29図 VII層水田跡出土遺物 (石器・石製品)…41	第39図 基本層位出土遺物(陶磁器2・ 土製品・石製品・金属製品1)…55
第30図 VIIc層上面・VI層上面 検出遺構全体平面図…43	第40図 基本層位出土遺物(金属製品2)…56
第31図 S D51平面図・断面図…44	第41図 III層水田跡+S D25平面図(I区)…59
第32図 1号河川跡平面図・断面図…45	第42図 出土瓶…63
第33図 1号河川跡出土遺物(土師器1)…47	第43図 定量分析ダイアグラム…67
第34図 1号河川跡出土遺物(土師器2)…48	第44図 イネ科植物乾物生産量1…68
第35図 1号河川跡出土遺物 (赤燒土器・須恵器1)…49	第45図 イネ科植物乾物生産量2…69
	第46図 主要花粉ダイアグラム…74

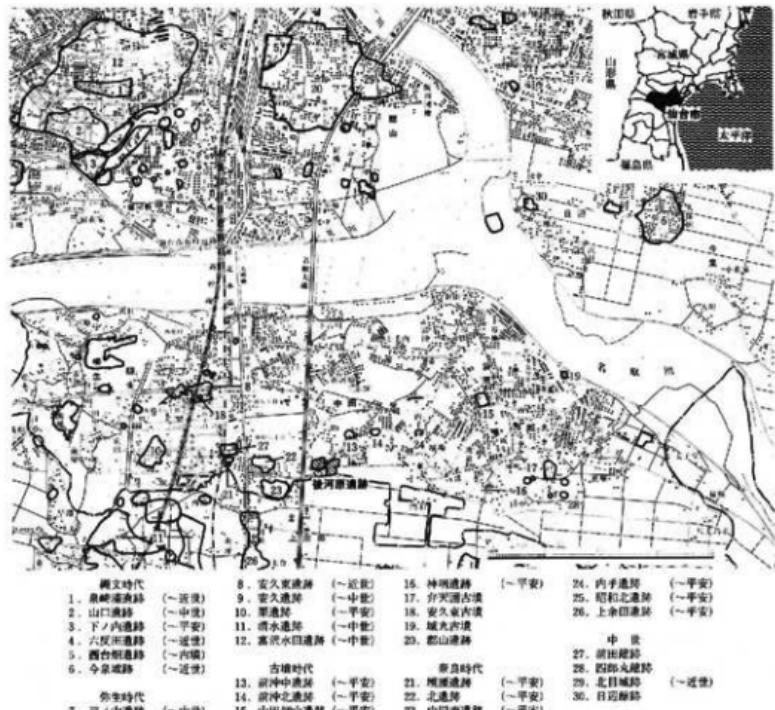
## 表 目 次

第1表 基本層位土層記表…5	第4表 VI層上面検出遺構
第2表 III層水田跡出土遺物数量表…15	出土遺物数量表…44
第3表 IV層上面・V層上面 検出遺構出土遺物数量表…29	第5表 花粉百分率表…75・76

## 第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

後河原遺跡は、仙台市城南東端の仙台市中田町字前沖他に所在する。国鉄東北本線南仙台駅より南東へ約1kmの地点で、遺跡の西約10mには仙台バイパスが南北に走る。また、遺跡南端は名取市域と接している。海岸線まで東へ約6km、北北東へ約2kmの地点には名取川と広瀬川の合流点がある。

仙台市は西側に丘陵地帯、東側には七北田川、名取川—広瀬川、阿武隈川によって形成された海岸平野が広がる。この内、仙台市の南を東流する名取川は、奥羽山系の南大東岳付近に源を発する。名取川は仙台市西部で、高館丘陵と番山・青葉山丘陵の間を開拓しながら東流する。仙台市東部では、支流広瀬川と合流し、上流からの流出物を堆積させて沖積面を形成し、太平洋へと注ぐ。両岸の沖積面上には、自然堤防、後背湿地、旧河道、浜堤等の微地形が認められ



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡(国土地理院1/25,000「仙台西南部」「仙台東南部」を複製)

る。特に旧河道が複雑に入り組んでいることが特徴的で、今までの間、幾度となくその流路を変化させたことが窺える。その結果、流路沿いの自然堤防もその都度寸断され、その背後に形成された後背湿地とともにより複雑な様相を示している。このような状況は、右岸に於いてはより顕著である。

名取川右岸沖積面に位置する後河原遺跡は、上記のように複雑に入り組む自然堤防上から後背湿地にかけて立地する。標高は約5mで、遺跡を含めた周辺は水田化が進んでいた為か、現況ではほぼ平坦面を呈する。昭和56年度、今回調査対象区の南西側隣接地が一部分調査され、平安時代の遺物とともに、土壙・ビット等が検出されている。

後河原遺跡の所在する名取川右岸の袋原・中田地区及びその周辺には、数多くの遺跡が認められている。その多くは自然堤防上に立地するが、現在までのところ縄文時代の遺跡は確認されていない。遺跡は全て弥生時代以降のもので、その内でも遺構が検出されているのは古墳時代以降の遺跡で、また遺跡数も古墳時代以降増加する。弥生時代の遺跡としては、東約2kmの戸ノ内遺跡(7)、北西約2kmの安久東遺跡(8)、西約2kmの栗遺跡(10)等がある。古墳時代になると前期の遺跡には、方形周溝墓と住居跡を検出した戸ノ内、安久東遺跡が、北東約1.5km、南西約2kmには住居跡を検出した中田畠中(9)、名取市清水遺跡(11)があり、後期の遺跡としては、大集落を検出した栗遺跡がある。その他に前沖中(13)、前沖北(14)、神明(16)等の各遺跡、弁天岡(17)、安久東(18)、城丸(19)等の各古墳がある。これらの遺跡の多くはその後の奈良・平安時代の遺跡へと続く。奈良・平安時代になると遺跡数は一段と増し、新たに壇腰(21)、北(22)、中田南(23)、内手(24)、昭和北(25)等の遺跡が加わる。中世以降になると東約2kmに四郎丸館跡(26)、西約1kmに前田館跡(27)等がある。

このように袋原・中田地区及びその周辺は、弥生時代以降人々の生活の痕跡が絶えず刻み込まれてきた地域である。しかし、今まで調査が加えられた遺跡は少なく、特に仙台バイパス以東では、当遺跡の他に中田畠中、戸ノ内遺跡が調査されたに過ぎない。これに対して対岸一名取川左岸一の沖積面は、近年調査が進み多くの成果が得られている。山口遺跡(2)では縄文時代早期の遺物が発見され、隣接六反田遺跡(4)では縄文時代中期中葉の時期に、すでに沖積面に集落が形成されていたことが判った。また、富沢水田遺跡(12)、山口遺跡では弥生時代から中世に渡る水田跡が、名取川と広瀬川の合流点に近い郡山遺跡(20)では、7世紀後半から8世紀初頭の多賀城創建前と考えられる官街跡が検出され、今泉城跡(6)の調査では、中世から近世にかけての領主層の生活に関する貴重な資料を得ている。今後、名取川右岸の沖積面の調査が進めば、袋原・中田地区の歴史も徐々に明らかにされるであろうし、その時、始めて名取川下流域の沖積面に於ける各時代の遺跡が、一つのつながりを持って歴史を物語っていくものと考える。

## 第Ⅱ章 調査の方法と概要

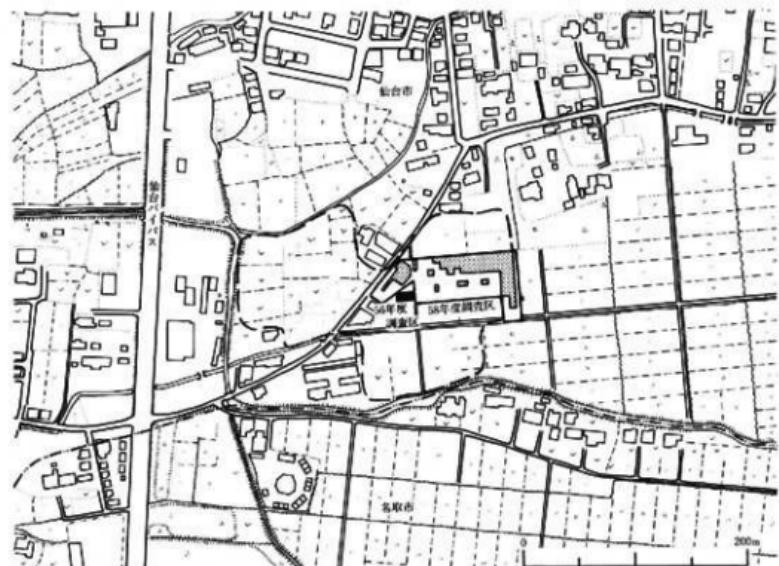
### 1. 調査に至る経過

今回の調査は、昭和57年9月3日付けで後河原遺跡内の仙台市中田町字前沖21、34-1・2、35、36、39の内にかかる地区、合計4,478m<sup>2</sup>について、宅地造成の為の開発に係る発掘届が提出された。今回の調査区の南西側で前回（昭和56年）に発掘調査が実施され、その結果、後河原遺跡は、発見造構、出土造物等から平安時代の集落跡の存在の可能性が予測された。

仙台市教育委員会では、申請者、石田清一氏、株式会社丸三土地開発、三和住宅産業株式会社との協議の結果、この地区が後河原遺跡（仙台市文化財登録番号C-208）内に位置していることから発掘調査を実施することとなった。開発予定地区は、現在、水田として営まれております、付近は、徐々に宅地化されている。本調査を実施する前に、開発予定地内の遺構の確認と、土層の観察を目的として、3月16日にトレンチ（3×3 m）を5ヶ所入れ、試掘調査した。

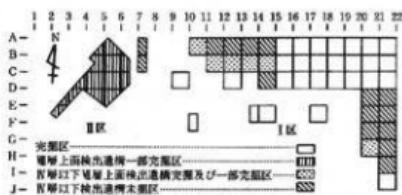
### 2. 調査方法

調査対象区の北端の東西に並ぶ境界杭を結んだ線を東西ラインとし（ほぼ現在の水田畦と同



第2図 調査対象区位置図

方向)、これと直交する南北ラインから成る、 $6 \times 6$  mのグリッドによる調査を実施した(南北ラインA～J、東西ライン1～22)。南北ライインは磁北より約5°西へ傾く。調査対象区は西側で南へ屈曲しており、この屈曲地点を境にして、7ラインより東をI区、西をII区とした。尚、II区に関しては、地形的制約より、トレンチによる調査を行った。



第3図 調査区配置図

### 3. 基本層位

基本層位は、表土I層より地山層までの大別8層から成り、これらはさらに、25層に細別される。細別層を含めた基本層位が、I層から層まで順序だって認められた地点はない。また、13ライン以西、Dライン以南では、I層あるいはIII層下に直接層、または地山層が顕を出し、I層から地山面まで30cm足らずの場所もある。これらの地区的東側、北側は、大別層が比較的順序だち堆積し、A-21グリッド北東隅では、I層から地山上面まで約110cmを測る。調査対象区内の地山は、全体的に北東に向って下り傾斜を示しており、これに従い堆積土も厚く、基本層位数は増す。VIa'・b'、VI<sub>d1</sub>・d<sub>2</sub>層は、それぞれVIa・b、VIab・c層に対応される層である。VIa'・b'層はC-16・17、E・F-10グリッドに分布し、VI<sub>d1</sub>・d<sub>2</sub>層はこの地区に加え、H・I-21グリッドにも分布する。これら各層は、VIa・b、VIab・c層に比べ水の影響下に置かれていた層とも考えられる。また、C-15-17グリッドに分布するVa<sub>a2</sub>層も、Va<sub>a3</sub>層の対応層としてとらえられる。Va<sub>a3</sub>層には、灰白色火山灰の小プロックが含まれる場合がある。

### 4. 調査概要

調査は昭和58年4月11日より開始され、9月13日までの約5ヶ月間調査を実施した。調査対象面積は4,478m<sup>2</sup>で、調査面積は1,998m<sup>2</sup>である。ただし、調査区内はIII層まで全て調査を行ったが、IV層以下は地区を限定し実施した。完掘区は調査区の約48% (972m<sup>2</sup>)、残りの調査区は造構上面プラン検出及び一部完掘段階に止めた(第3図)。

4月中は試掘を中心とする調査が進められた。これと併行し、プラント・オパール分析を行った結果、II・III・VI・層に水田跡の可能性があることが判明した(65頁参照)。これらの結果を踏えた上で、5月以降本格的な調査を実施した(I区は調査に際し、周辺の水田より水の流入が激しかった為、やむを得ず調査対象区周辺に排水用の側溝を入れた)。まずIII層上面では、I・II区とも中世の水田跡が検出された。I区のIII層より下層では、IV・V・VI各層上面で平

第1表 基本層位土層記述表

層位	土色	土質	風化度	しまり	透水性	層厚	時代	地質名	分類	人	物	備考
I-4	10 YR 5.5/6 黄褐色	砂 色	砂質	少	透水性良好	5~10cm	新	砂	冲积层	无	无	无
I-5 a	10 YR 5.5/6 黄褐色	粘土 色	粘土質	少	透水性良好	5~10cm	新	砂	冲积层	无	无	无
I-5 b	10 YR 5.5/6 黄褐色	粘 土	粘土質	少	透水性良好	3 cm前後	近	砂	冲积层	无	无	无
II-4	2.5 Y 灰褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	9 cm前後	近	砂	冲积层	无	无	无
II-5 a	7.5 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	近	砂	冲积层	无	无	无
III-4	10 YR 5.5/6 灰褐色	灰 色	砂質粘土 色	少	透水性良好	10 cm前後	近	砂	冲积层	无	无	无
III-5 b	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂質粘土 色	少	透水性良好	10 cm前後	近	砂	冲积层	无	无	无
IV-4	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	近	砂	冲积层	无	无	无
IV-5 a	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	10 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
IV-5 b	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-4	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-5 a	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-5 b	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-6	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-7 a	7.5 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-7 b	7.5 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-8 a	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂質粘土 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-8 b	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂質粘土 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-9 a	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂質粘土 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
V-9 b	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂質粘土 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
W-4	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
W-5 a	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
W-5 b'	7.5 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
W-6	10 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
W-7 a	7.5 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
W-7 b	7.5 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
W-8 a	5 Y 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
W-8 b	2.5 Y 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
W-9 c	N 5.5/6 黄褐色	灰 色	砂 色	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	A - 3 - 16, A - 8 - 16,	冲积层	冲积层
Wd-4	7.5 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	粘土質	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	C - 15 - 17, H - I - 21, E - F - 10	冲积层	冲积层
Wd-5	7.5 YR 5.5/6 黄褐色	灰 色	粘土質	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	C - 15 - 17, H - I - 21, E - F - 10	冲积层	冲积层
Wd-6	10 G 5.5/6 黄褐色	灰 色	粘土質	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	C - 15 - 17, H - I - 21, E - F - 10	冲积层	冲积层
Wd-7	10 G 5.5/6 黄褐色	灰 色	粘土質	少	透水性良好	5 cm前後	中	砂	冲积层	C - 15 - 17, H - I - 21, E - F - 10	冲积层	冲积层

安時代の溝跡群、小溝状造構等、Ⅵa層上面では平安時代以前の水田跡、そして、Ⅶc層上面あるいはⅧ層上面でも溝跡等が検出された。Ⅱ区では、Ⅲ層より下層が小河川跡の堆積土となり、Ⅰ区とは様相を異にする。小河川跡堆積土上面からは、平安時代を中心とする溝跡が数条検出された。

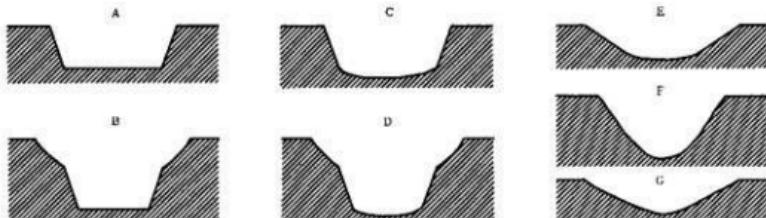
Ⅱ・Ⅶ層はプラント・オパール分析結果では、水田跡の可能性を含む層であったが、後世の削平や掘り込みが多かった為か、水田跡は検出されなかった。遺物はⅡ層、Ⅲ層水田跡、Ⅳ層上面検出遺構、小河川跡を中心として土師器、須恵器、陶磁器、石製品、木製品等（以上の大部分は破片資料）と自然遺物が出土している。しかし、調査面積に比して遺物出土量は、小平箱30箱程度と少ない。特にV層以下の基本層位、造構内からの出土遺物は、わずか10点にも満たない。出土遺物の時期は、弥生時代から近代までの多時期に渡る。

### 5. 検出溝跡の断面形態

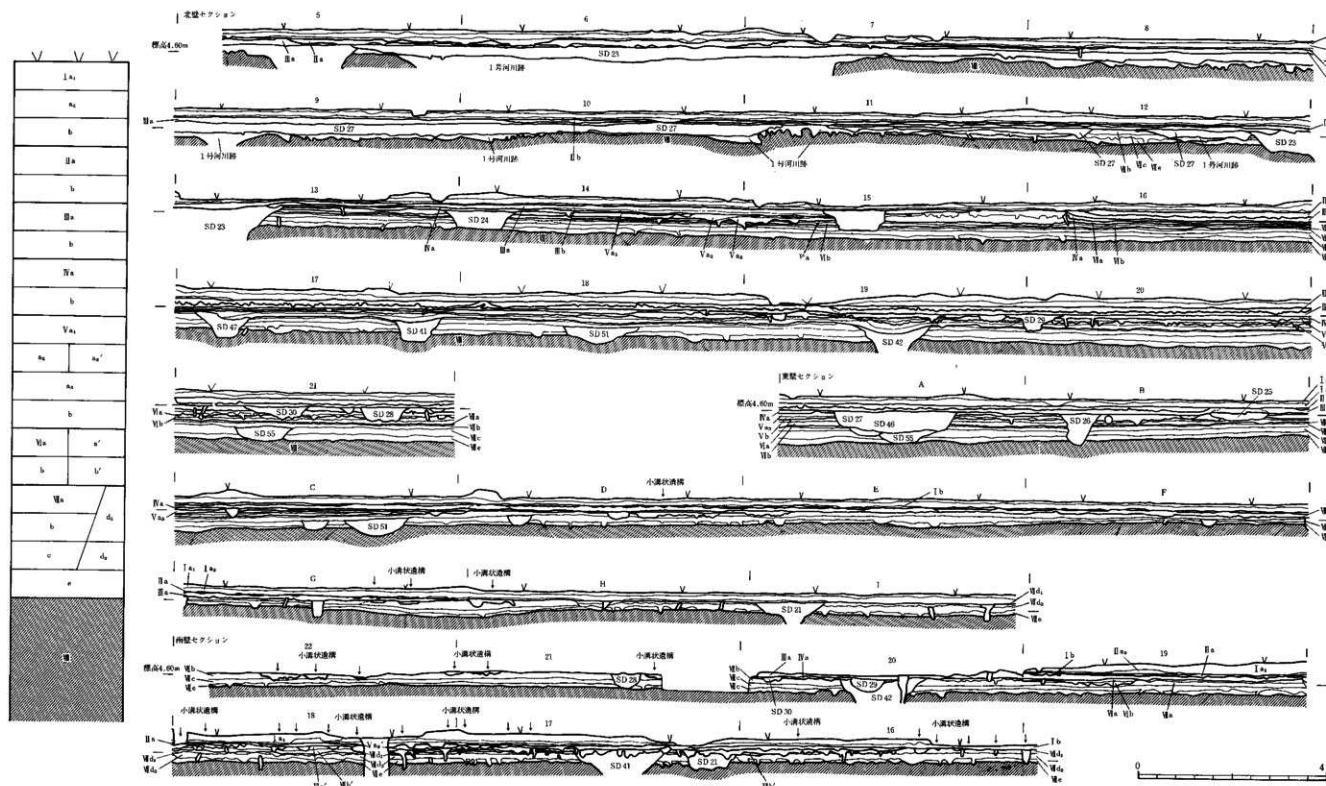
後河原遺跡では、34条の溝跡が検出された。この内、深さ10cm以上のものについては、断面形、中段の有無、下端ラインの状態、底面状態より、以下のA～Gまでの断面形態に分けられる。

- A：断面逆台形状で、下端ラインが明確なもの。底面はほぼ平坦面を呈する。
- B：中段を有する。中段以下の断面形態はAと同様。
- C：断面「U」字状で、下端ラインが明確なもの、底面がやや凹状を呈する。
- D：中段を有する。中段以下の断面形態はCと同様。
- E：断面ひらいた「U」字状で、下端ラインが明確なもの。底面がやや凹状を呈する。
- F：断面「V」字状で、下端ラインが不明確なもの。底面強い凹状を呈する。
- G：断面がひらいた「V」字状で、下端ラインが不明確なもの。底面強い凹状を呈する。

以上のように分類された、A～Gの断面形態で、溝跡観察表中の断面形態を表わした。



第4図 溝跡断面形態



第5図 調査区基本層位(北壁・東壁・南壁断面図)

## 第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

### 1. Ⅲ層上面

#### (1) 検出遺構 (第6~9図、写真図版4~8)

Ⅲ層上面では、Ⅰ・Ⅱ区より12枚以上の水田跡と作土下向からは以前この水田跡に伴ったと考えられる水路跡 (SD23) が検出された。

水田跡：Ⅰ層排土後、Ⅱ層上面より部分的に畦の上面が検出されたもの (畦D・E・G) もあったが、畦の多くはⅡ層下面で検出された。畦は基本的に作土 (基本層位Ⅲa層) と同一土壤が使用されている。この為、作土内の畦は、畦の土の若干の混濁と作土とのしまり具合の微妙な差により掘り上げたが、断面観察では畦と作土の境に明確なラインは引けなかった (第7図1~3)。従って、作土内に於ける畦の形状に関しては多少問題点が残る。しかし、畦Bのように部分的に、下層の高まりを利用し、作土内の畦が明確に区別される例 (第7図4) もある。尚、図示した水田跡平面図中の畦 (第6図) は、作土排土後の水田底面上の畦で、水田使用時の畦とは異なる。(以下の畦の計測値に関しては、水田底面上の値である。また、平面図中の畦破線部分は、調査時に平面的検出が出来なかった部分であるが、調査区段面土層観察から得られた資料をもとに復元したものである。)

〔畦の配列〕 畦の方向は、Ⅰ区の場合、ほぼ南北方向のもの (N-5°前後-W) と、これに直交する東西方向のものから成る。Ⅱ区の場合には、Ⅰ区と異なり西へ約50°傾いた、北西-南東方向のものと、これに直交する北東-南西方向のものから成る。これらの畦が交わる部分は、十字状に交差する場合と、いずれかの方向のものが一方に向かって付かず「T」字状になる場合がある。

〔畦の断面形・規模〕 畦の断面形は前述のように、作土中に於いて問題点を残すが、ほぼ台形を呈していたと思われる。作土上の盛り上りは、残存良好なもので高さ約7cmを測る。畦の幅には、広いものと狭いものが認められる。広いものには畦E・G・Fがあり、畦Gでは上端幅約120cm、下端幅約250cmを測る。狭いものには畦D・H~Lがあり、これらは上端幅50cm前後、下端幅120cm前後を測る。畦Bは西側が平面的に検出出来ず、復元ラインとなってしまったが、調査区北壁の観察では上端幅約550cmで、検出畦中では最大の規模を持つ。

〔水口〕 水口は3ヶ所検出された (水口a~c、第8図)。これらの水口は、畦が交わる部分に取り付けられており、ほぼ同様な規模・形状を呈する。平面形は中央がやや屈折し、「く」字状にちかく、横断面形は「U」字状である。幅は狭い部分 (中央付近) で、上端約40~45cm、下端約20~35cmを測る。深さは中央部で約5~10cmで、両端に行くに従い深さがやや増す。

〔水田1枚の形状と規模〕 前述の畦による区画によって12枚以上 (Ⅱ区では、畦の状況により

1枚以上の存在が考えられる)の水田が検出された。いずれも長方形を呈すると思われるが、区画全体が確認されたものではなく、水田1枚の正確な形状及び規模を把握出来たものはない。水田7は長辺と短辺のそれぞれ一方が検出されている。長辺約16m、短辺約4mで約60m<sup>2</sup>前後の水田面積が想定される。短辺の一方が確認されたものとしては、水田4(約11m)、水田5(約6m)がある。その他、一辺の規模が判るものとして水田2(約8m)、水田3(約14m)、水田8(約5m)、水田9(約16m)、水田10(約8m)が上げられる。水田6は長短辺とも不明であるが、水田面積は160m<sup>2</sup>以上で、調査区内では最大の規模を持つ。

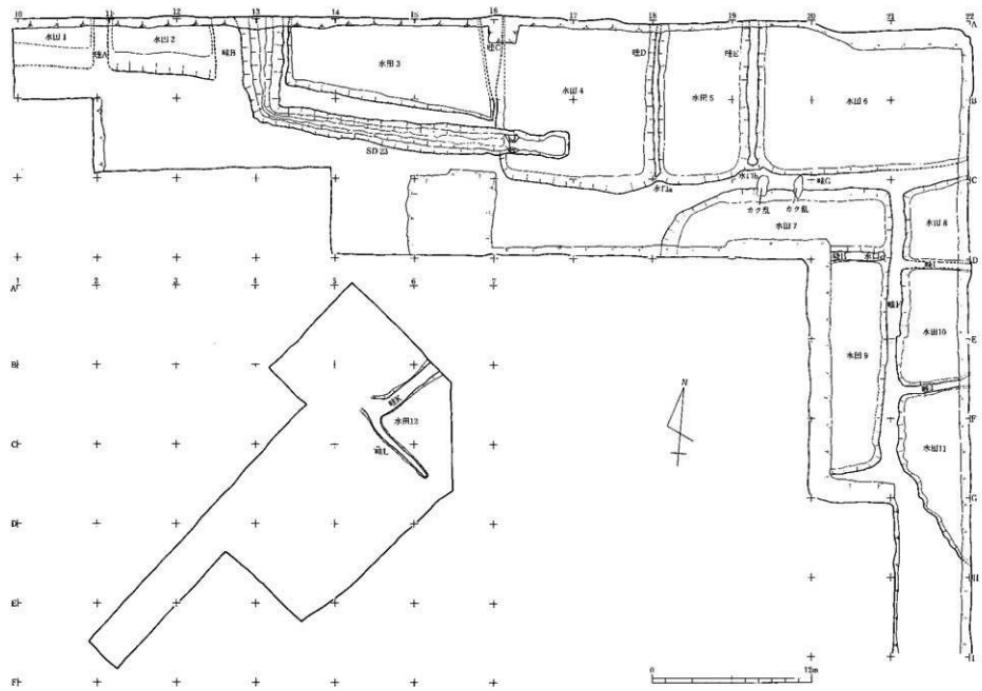
[作土] 作土(基本層位Ⅲa層)の上面は凹凸が激しかったが、底面は平坦面を呈する。作土は、厚い部分で約15cm、薄い部分で約2cmで、多くは約10cm程の厚さである。水田4~6の作土底面の下には、鉄分の集積層が認められる。水田6の北東側では最も顯著で、約4cmの厚さを測る。底面のレベルは、水田4・5・6がほぼ同じ値で、検出水田底面中最も低い。水田7・8以南の水田の底面は、水田4~6より5~6cm高い。また、水田3以西(Ⅱ区も含む)の水田の底面は、水田4~6より約8cm高くなっている。すなわち、作土底面のレベルは、畦C、畦Gを境として変化している。

[水路] S D23が1条検出された。検出面は作土底面(第9図)であるが、水田4に取り付けられた用水路と考えられる点より、この水田跡の最終段階のものではないが、水田経営期間のいずれかの時期に機能していた、一段階古い時期のものと思われる。S D23は、B-13グリッドで約90°屈折し、「L」字状となっている。これは畦の南北方向、東西方向とともに一致し、南北方向では畦B上を走行する。上端幅は北側がやや広いが平均約250cm、下端幅は約30cm、中段を有し、中段下の断面は「U」字状を呈する。深さは平均130cmであるが、水田4の直前が最も深くなってしまい、北側に比べ約30cmの底面高差を持つ。水田4内に入ると段を持って底面が浅くなり、水田4の直前の底面より約80cm上位になる。水田4内では約5mの長さをもって完結する。水田4内の水路の底面は平坦で、作土底面下約40cmの深さを呈する。水路底面の上り口の両壁には、壁を削り出した、底面より約10~15cm高い、平面形台形状のテラス状部分が設けられている。このテラス状部分の約50cmの間の底面幅は、約50cmと狭くなっている。これを過ぎると水路の底面は広がって行き、終結(先端)部分では、幅約1.5mの隅丸方形状となる。他には、この水路に伴う付属施設は検出されなかった。

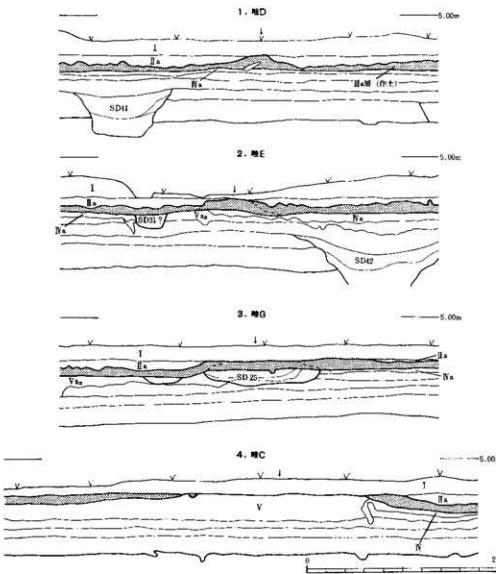
[水田範囲] Ⅰ区では、水田1~4・9・11の南側、水田7の西側には水田が延びず、水田外部分となっている(写真図版6-6)。従って、水田は18ライン以西ではBからCライン、18ライン以東ではGからHラインを南限とし、調査区の北側、東側、西側に広がっている。Ⅱ区では、1号河川跡堆積土上面検出のS D9(第15図)のほぼ南東側が水田外部分となり、S D9の北西側に水田が広がっている。



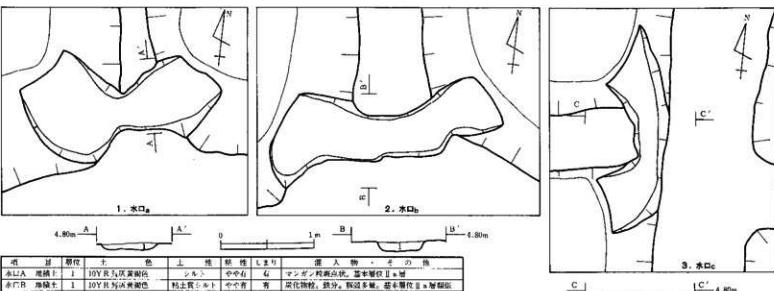
遺構配置略図



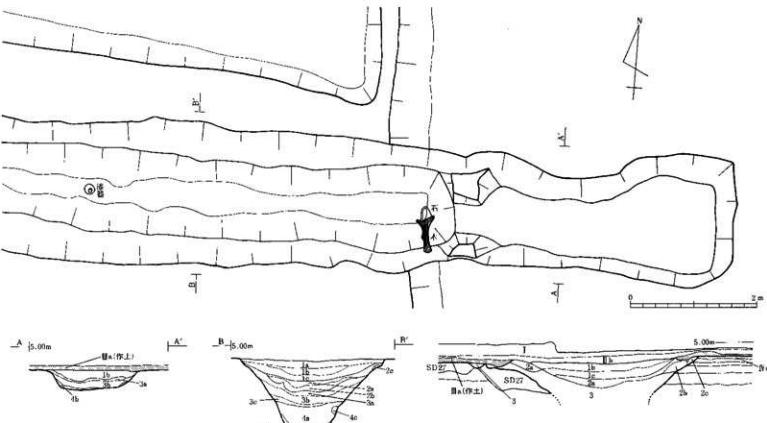
第6図 地層上面検出遺構全体平面図



第7図 哉・作土断面図(I区北壁・東壁)



第8図 水口平面図・断面図



第9図 SD23平面図(B-15・16グリッド)・断面図

## (2) 出土遺物 (第10~14図、第2表)

水田跡作土、珪・水路 (SD 23) から弥生土器、土師器、赤焼土器、須恵器、陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品、骨、自然遺物が出土した (第2表)。水田作土及び珪上面からは、稲穀、木の実、種子等が多量に出土している。また SD 23堆積土 2~4層を中心として、木の実、種子、小枝、木片、竹片、昆虫等が多量に出土している (詳細は77頁参照)。

第2表 Ⅲ層水田跡出土遺物数量表

出土地点 (層位)	弥生 上部片	J. 鋼 破片	赤焼 土部片	鐵器 破片	陶磁器片	瓦片	土製品	石 器	金屬製品	木 製品	骨	自然 遺物
作土・珪	2	23	2903	7	323	15	7	2	4	4	7	—
SD 23(1)	—	1	227	—	19	4	—	—	32	—	—	19
(2-3)	1	3	200	1	—	—	1	—	—	—	—	1
(4)	—	—	7	—	—	—	—	—	5	—	—	5 1
(5)	—	—	18	—	—	—	—	—	2	—	—	—

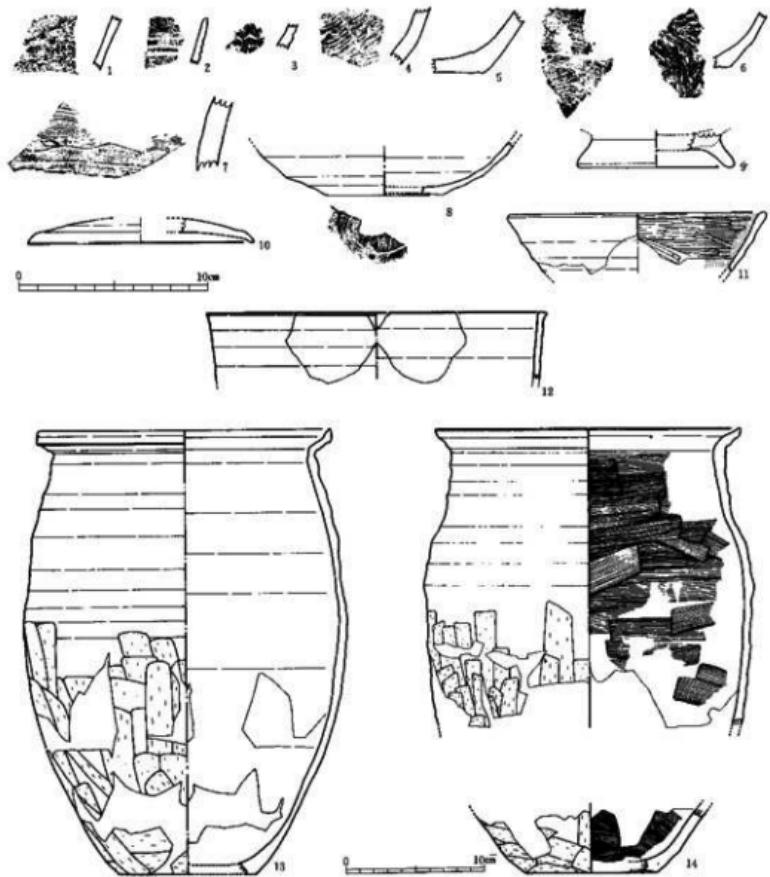
弥生土器 (第10図1~3) : いずれも小破片のため部位は不明である。1は縄文施文のみ、2・3はヘラ状の施文具による沈線文が施されている。2は三条の横位平行線文。3は横位鋸歯文と横位直線文が組み合せられている。いずれの遺物も後期天王山式に比定されるかと思われる。

土師器 (第10図4~6・9・11~14、第11図1) : 製作の際に非ロクロとロクロ使用に分けられる。4~6は非ロクロのものである。5は底部破片で内面ハケメ、外面及び底部手持ちヘラケズリである。4・6は外面ハケメ調整である。ロクロ使用は第10図9・11~14、11図1である。11は体部上半の环で口縁部にかけて直線的に外傾し、内面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。9は「ハ」字状に開く环の高台部片である。1は甕の口頸部片で、頸部で「く」字状にくびれて外傾する。口唇部は平坦である。12は、体部上半の破片で体部から口唇部までほぼ垂直に立ち上り、口縁部と体部の境は明瞭ではない。口唇部は水平である。器形が筒状であることから甕の可能性が考えられる。13・14は本遺跡出土の土師器甕片の中で、完形に近いものである。13は、最大径が体部に求められ、丸味をもった体部から頸部にかけて「く」字状にくびれ口縁部で上方に直立する。外面体部下半にヘラケズリ、内面ナデが施されている。14も最大径が体部に求められ、体部から頸部にかけてやや直立し、口縁部でくびれる。体部下半外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。

赤焼土器 (第10図10) : 合計8点出土し、ほとんどが細片である。10は推定直径が12cmの蓋で、内外面ロクロ調整で、色調はにぶい橙色を呈している。

須恵器 (第10図7・8、11図2) : 8は体部下半の环で、底部から体部にかけて外弯し、底部切り離し技法は、回転糸切りである。7は甕の頸部片で、その頸部片に18条の波状沈線文と1条の沈線を巡している。2は甕の体部破片で、外面格子目風平行叩目、内面同心円文押え目が加えられている。

陶磁器 (第11図3~5) : 作土及びSD 23から合計19点出土した。全て細片で、その内図化

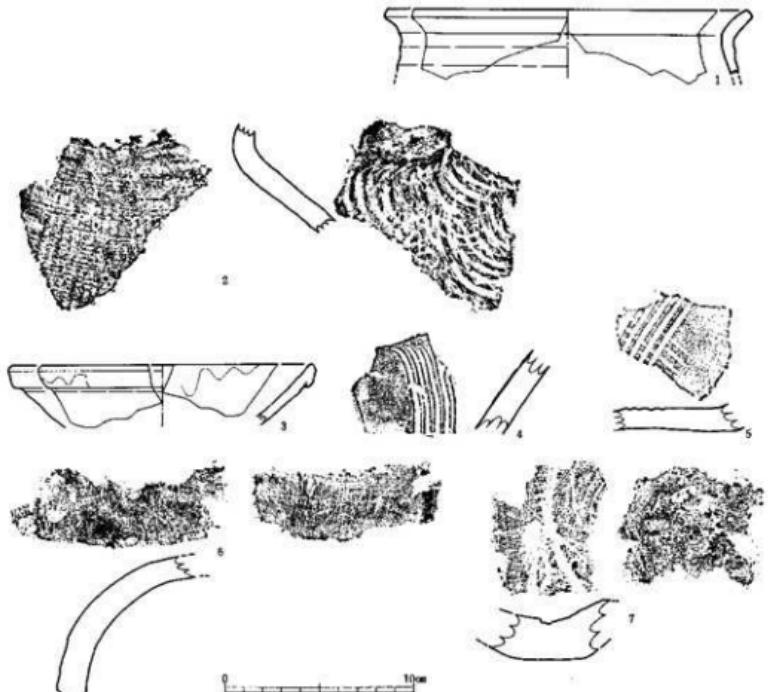


番号	グリット	遺 槽	層 位	算 錄 番 号	種 類	別		法 則 cm	写真同版
						外 表	内 面		
1	B-13	SD23	堆	3	弥 生 上 部	縄文	不明	-	13-3
2	A-14	SD23	堆	3	弥 生 土 路	沈継文	不明	-	13-1
3	B-5	水 田	堆		B-4 弥 生 七 部	沈継文	不明	-	13-2
4	B-13	SD23	堆	3	C-77 土 師 瓦	埋	ハケメ	-	-
5	B-C-5-6	水 田	堆	C-35	土 師 瓦	埋 体落ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	ハケメ、留ナダ	-	13-15
6	C-D-4-5	水 田	作 上	C-35	土 師 瓦	埋 体倒ハケメ、底部不明	ハケメ	-	-
7	B-16	SD23	堆	1	F-29 漆 瓶 器	埋 ロクロ	ロクロ	-	-
8	B-14	SD23	堆	1	E-58 国 治 瓦	环 体落ロクロ、底部凹凸半切り	ロクロ	-	(6.2)
9	A-14	水 田	作 土	D-24	土 師 瓦 土 口付盆	体落ロクロ、底部不明	不明	-	8.4
10	E-F-10	水 田	作 土 下面	Q-2	赤燒土器	置 ロクロ	ロクロ	(12.0)	-
11	D-20	水 田	作 土 下面	D-20	土 師 瓦	置 ロクロ	ミガモ-黒色処理	13.8	-
12	R-14	SD23	堆	1	D-80 土 師 瓦	置 ロクロ	ロクロ	(24.9)	-
13	D-20	水 田	作 土 下面	D-3	土 師 瓦	埋 体落ロクロ、底部ハケズリ	ナダ	21.2 32.4 10.0	14-7
14	E-20	水 田	作 土	D-19	土 師 瓦	埋 山形ロクロ、底部ハケズリ	ハラナダ	22.4	9.4 14-8

第10図 三層水田跡出土遺物(弥生土器・土師器1・赤焼土器・須恵器1)

したのはわずか3点である。3は口縁部から体部上半にかけての白磁の鉢片である。直線的に外傾し、口縁部は折り返し口縁である。内外面とも明青灰色の光沢のない釉が施釉されている。年代は12世紀後半のものと思われる。4は瓦質陶器である。擂鉢の体部片で内外面とも灰色のくすべ焼で、内面に6本以上の筋目が入っている。5は4と同じ胎土で同一個体と思われる擂鉢の底部片で筋目が縱横に入っている。これらは室町時代の在地産のものである。

瓦(第11図6・7)：6は丸瓦で凸面ナデ、凹面布目である。7は平瓦で一部ヘラ描き？が施



\* ( ) 内数値は復元数据

番号	グリット	透	構	層	作	登	種	類	調		外	内	面	法	量cm	写真	
									種	類				種	考		
1	A-15	水	田	作	土	D-23	土	師 器	便	ロクロ	ロクロ	(19.6)	—	—	—		
2	C-21	水	田	作	土	E-4	須 惠 器	便	竹子目風平行四辺	井戸口文押え目	—	—	—	—	16~6		
番号	グリット	透	構	層	作	登	種	類	器	形	部	位	高	地	年代	種	考
3	C-D-45	水	田	作	土	J-5	鉢	口縁部	中	國	底	12C	白	磁	折返し口縁、内外曲輪脚、内外面に寅人	19~1	
4	B-19	水	田	作	土	J-29	鉢	作	脚	不	明	16C	—	—	くすべ脚、瓦質陶器、内面滑目	18~16	
5	H-19	S	D-23	地	1	J-6	鉢	底	部	不	明	16C	—	—	くすべ脚、瓦質陶器、内面滑目	18~18	
番号	グリット	透	構	層	作	登	種	類	器	形	部	位	高	地	年代	種	考
6	B-16	水	田	作	土	F-1	丸	瓦	ナ	テ	布	日	—	—	—	20~3	
7	H-18	S	D-23	地	2	G-3	平	瓦	ナ	テ	布	日	—	—	出瓦ヘラ描き？	20~1	

第11図 三層水田跡出土遺物(土師器2・須恵器2・陶磁器・瓦)

されている。

**土製品**（第12図6・7）：6と7は土鏡である。6はほぼ球形で、直径3.5cm、ほぼ中央に径0.7～0.8cmの貫通孔がある。7は中央で膨み、紡錘状を呈し、長さ3.8cm、直径1.4cm、ほぼ中央に径0.3cmの貫通孔がある。

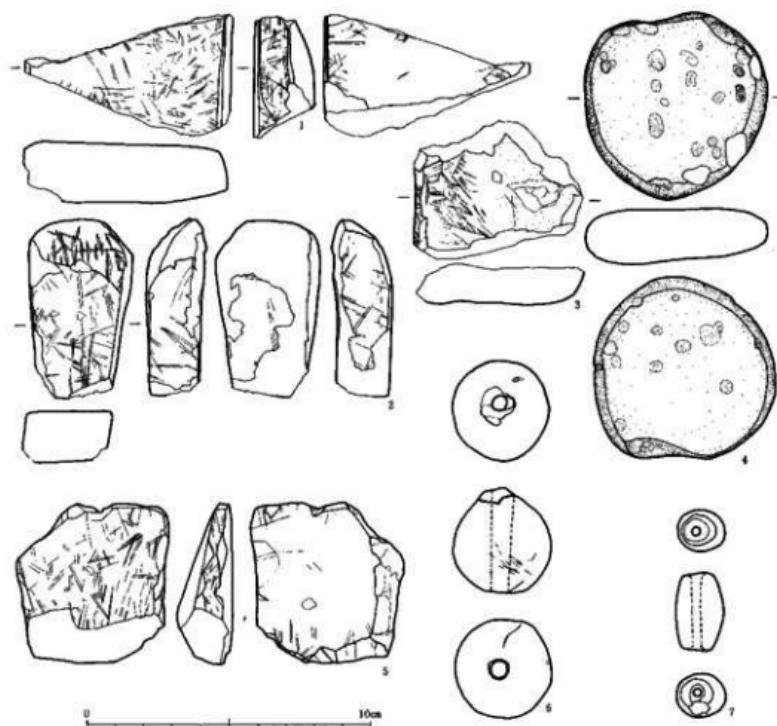
**石製品**（第12図1～5）：作土から4点の砥石を出土し、SD23からは、表面に擦痕が認められる割れた小礫（写真図版21-1～7）や扁平な小円礫(4)が62点出土している。1～3・5は砥石と思われ、いずれも細片の為全形は明らかではない。いずれも表裏両側面等に擦痕が認められる。

**金属製品**（第12図8～11）：水田作土から古銭が4点、鉄滓の細片が7点（写真図版21-7・8）出土している。8～11はいずれも北宋錢で初鑄年が10C～11Cのものである。

**木製品**（第13・14図）：SD23から27点出土し、その内の大半が堆積土3・4層からの出土である。第13図1は漆器の碗で、高台部、口縁部が欠損している。内外面とも漆の剥離が著しいが内面はうるみ色漆で、外面は黒漆の地に朱とうるみ色により文様が描かれている。底部外面（高台部内側）には朱漆で「一」の文字が描かれ、多方向のひっかき傷が認められる。第13図3は、長さ27.0cm、幅16.0cm、厚さ約0.9cmの上端の角が丸まった板で、上端から下端にかけてやや狭くなっている。上端中央部に幅2.5cm板部の残存が認められ、農具か工具の一部と思われる。第14図1～4は、下端の先端を多面及び片面を削り出している。いずれも面取りが施された杭と思われる。第14図6～11は小枝の上・下端先端に扁平な切断面があるものである。断面はほぼ円形・楕円形である。

**骨**：作土から19点、SD23から2点出土しているが、細片の為、部位等は不明であるが、ほとんど馬の骨と思われる。

出土遺物中の時期決定が可能な遺物で、最も年代が新しかったのは、室町時代に比定される陶器片であった。

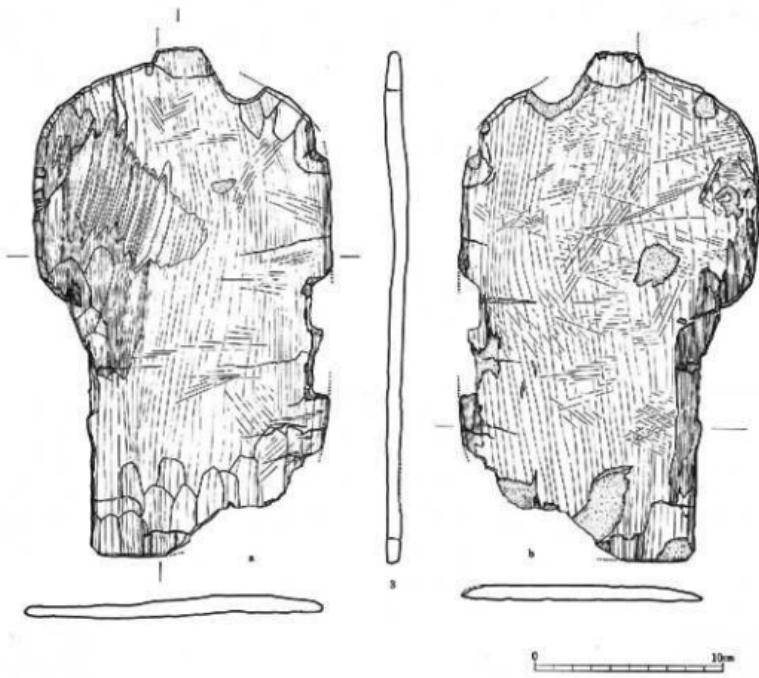
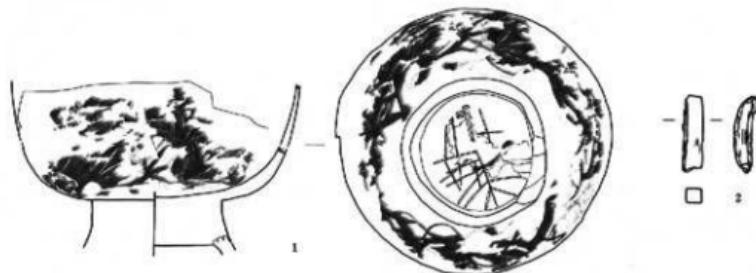


番号	グリット	透 漏	場 所	登録番号	種 類	法 量		石 材	備 考	写真図版
						幅(cm)	厚さ(cm)			
1	A-20	水	田 作土下面	K-11	砾 石?	7.3	2.1	砂	おびただしい擦痕が認められる	—
2	B-19	水	田 喙	K-15	砾 石	3.2	1.9		おびただしい擦痕が認められる	20-13
3	B-18	水	田 作 土	K-12	砾 石	5.8	1.75	硅化した颗粒砾岩	おびただしい擦痕が認められる	—
4	B-17-18	水	田 作 土	K-14	砾 平 小 内 錠	6.4	1.8	安山岩	—	—
5	A-12	水	田 作 土	K-13	砾 石	5.2	1.7	不 常	使用による擦痕あり	—
番号	グリット	底 構 造	場 所	登録番号	種 類	法 量		備 考	写真図版	
						高さ(cm)	幅(cm)			
6	B-17	水	田 作 上	P-5	土	3.7	3.4	孔径 0.75 mm	20-9	
7	R-15	水	田 作 土	P-6	土	2.8	1.7	孔径 0.5 mm	20-8	



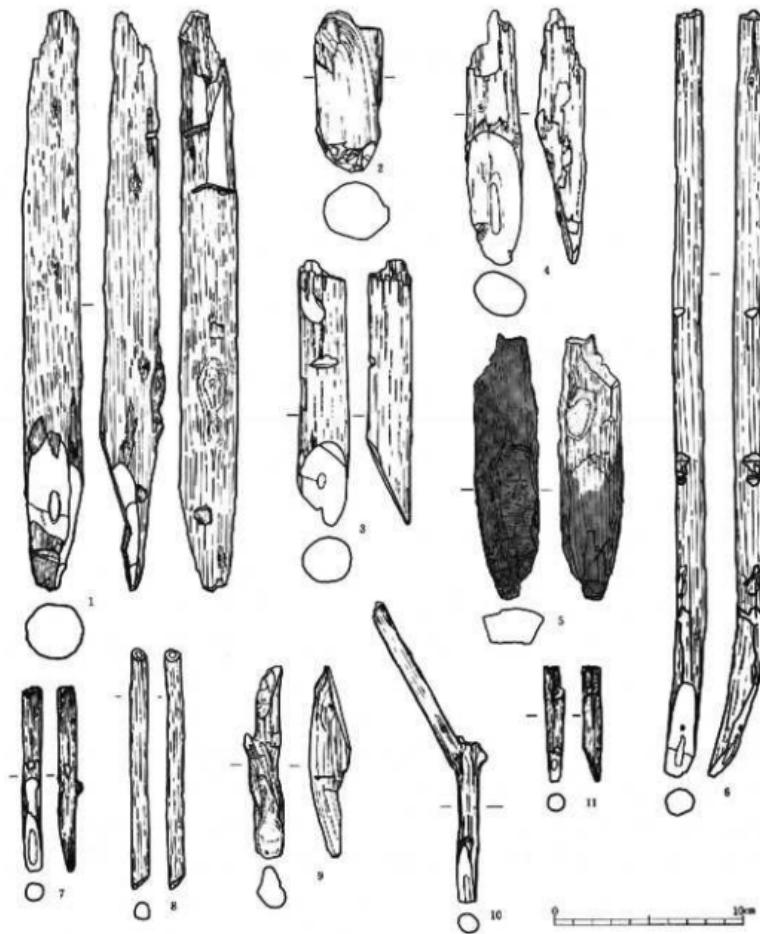
番号	グリット	透 漏	場 所	登録番号	種 類	銘 文	名	時 代	初 銄 年 (西暦)	石 材	写真図版
8	B-18	水	田 喙	N-41	古 銭	牟 道 元 寶	北 宋 乾 道 元 年 (955)	銅	—		
9	D-20	水	田 作土下面	N-42	古 銭	(乾) 宋 道 寶	北 宋 元 2 年 (1089)	銅	—		
10	A-14	水	田 作土下面	N-40	古 銭	(至) 和 元 寶	北 宋 重 和 元 年 (1064)	銅	—		
11	C-4	水	田 作土下面	N-43	古 銭	治 平 元 寶	生 宋 治 平 元 年 (1064)	銅	—		

第12図 三層水田跡出土遺物(土製品・石製品・金属製品)



番号	グリッド	遺構	層位	性質番号	種類	法寸 (cm)	備考	写真図版
1	B-15	SD23	堆4	L-2	漆器・圓	径最大15.5 高さ9.5	黒漆の他に朱とうみ色で文様が描かれている。 底部に「一」の朱漆文字がある。模本取り。	23-1
2	B-13	SD23	堆3	L-25	漆器・把手?	径9.5 厚さ0.8	黒漆仕り。断面正方形。官兵服の把手か?。	-
3	B-13	SD23	堆3	L-3	漆具?	径最大27.0 幅16.0 厚さ0.8~1.0	漆平ら板目材を使用。a面下漆加工の跡。柄部の残存がわずかに認められる。	22-1

第13図 Ⅲ層水田跡出土遺物(木製品1)



番号	グリッド	通 標	層 位	登録番号	種類	法 盤 (cm)	加工 面	備 考	写真版
1	B-16	S D23	堆 3	L- 9	続	長さ31.0、径 3.0	下端 2 面	上方欠失、中空木	23- 5
2	B-13	S D23	堆 4	L- 32	続	長さ 8.5、径 3.0	下端 4 面	上方欠失	23- 3
3	B-16	S D23	堆 3	L- 11	続	長さ13.7、径 2.4	下端 1 面	上方欠失、中空木	23- 7
4	A-B-13-14	S D23	堆 3	L- 18	続	長さ13.5、径 2.9	下端 1 面	上方欠失、中空木	23- 6
5	B-16	S D23	堆 3	L- 10	長さ15.8、径 3.2、厚さ 1.8	マチ状の断削り	上・下方欠失、無板全面	-	
6	B-13	S D23	堆 3	L- 6	長さ39.0、径 1.3	下端 1 面	上方欠失、中空木、小枝	23- 8	
7	B-16	S D23	堆 3	L- 13	長さ 9.7、径 0.9	下端 1 面	上方欠失、中空木、小枝	23- 13	
8	B-13	S D23	堆 3	L- 7	長さ12.6、径 0.8	下端 1 面	上方欠失、中空木、小枝	23- 12	
9	B-16	S D23	堆 3	L- 14	長さ10.2、径 2.2	上・下端各 1 面	小枝	23- 11	
10	B-16	S D23	堆 3	L- 12	長さ17.2、径 1.0	下端 1 面	上方欠失、中空木、小枝	23- 10	
11	B-13	S D23	堆 3	L- 8	長さ 6.2、径 0.8	下端 1 面	上方欠失、中空木、小枝	23- 9	

第14図 III層水稻跡出土物(木製品2)

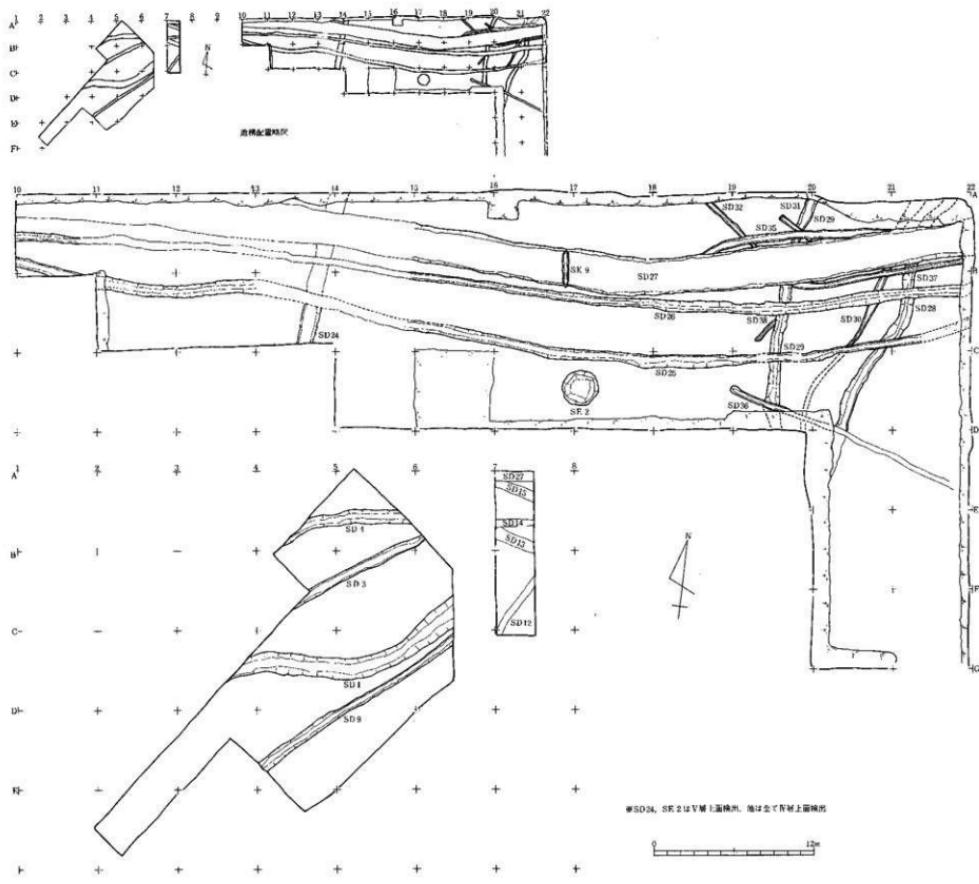
## 2. IV層上面・V層上面

### (1) 検出遺構 (第15~19図、写真図版9)

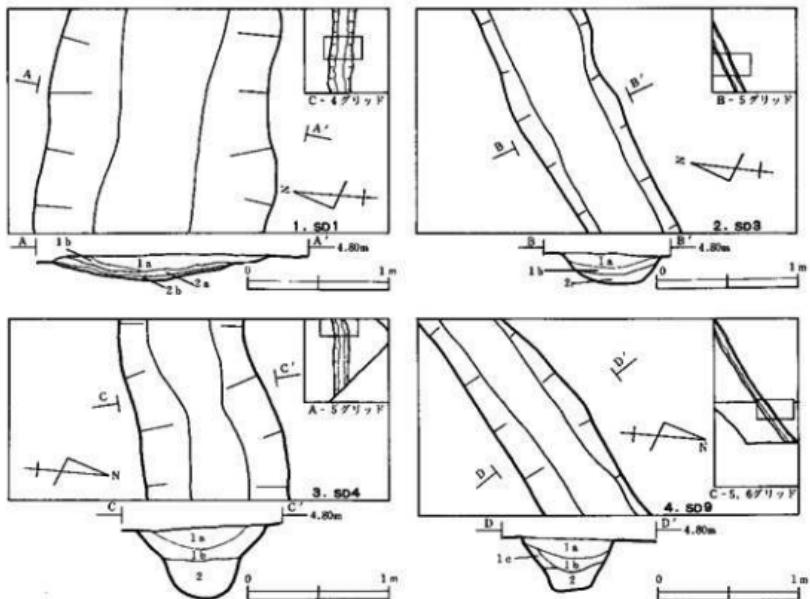
III層排土後、または、IV層排土後に検出された遺構である。12ライン以西ではIV・V層の分布が認められず、各遺構は1号河川跡堆積土上面で検出されるが、1、IV層上面検出のSD27は、12ライン以西では1号河川跡堆積土上面で検出されたこと。2、1号河川跡堆積土2層中には、灰白色火山灰を含み、V層中にも断片的に灰白色火山灰の小ブロックが含まれることにより、1号河川跡堆積土上面で検出された遺構は、IV層上面あるいは、V層上面検出遺構と対応される。

IV層上面検出のものには溝跡12条 (SD25~32・35~38)、土壙1基 (SK9)、1号河川跡堆積土上面検出のものには溝跡8条 (SD1・3・4・9・12~15)、V層上面検出のものには溝跡1条 (SD24)、井戸跡1基 (SE2) がある。ただし、I区の場合、調査区を15ライン以東、Dライン以北に限定した為、それ以外の地区は、遺構の上面検出、あるいは一部分調査を実施したのみである。

溝跡：IV層上面検出のものには、東西方向に平行に走るもの (SD25・26・27・35)、これに切られ、南北方向に走るもの (SD28~30) に大別される。東西方向のSD25・26 (第17図2・3) は、上端幅約80cmのほぼ同規模な溝であるが、SD25は19ライン以東になると、上面に削平を受けており、地点によっては全く検出出来ない場合もある。両溝跡の北側に走るSD27 (第18図1) は、上端幅250cm前後の幅広いものであるが、それに比して深さは浅い。SD25は底面の凹凸が激しく底面傾斜は不明であるが、SD26・27は西側の方が高い。SD28~30 (第18図2・3、第19図1) の内SD28・29は、上端幅が1m前後のほぼ同規模のもので、堆積土も類似性が強い。底面傾斜は、SD28・30が南から北、SD29が北から南へと低くなる。この他に不規則に走る小溝が6条認められた。しかし、SD35 (第19図2) を除く、SD31・32・36~38は、断片的で、深さも10cm未満と浅く、底面も安定性に欠け、調査区北壁・南壁面でも確認されなかつた。これらは、入為的な掘り込み以外の可能性もある。出土遺物量が最も多かったのは、SD27で約600点の土師器片を出土している。また、SD28底面よりは、ほぼ完形の須恵器の环が1点 (第20図9) 出土している。1号河川跡堆積土上面検出のものには、北東から南西方向に走るSD1・3・9 (第16図1・2・4)・12、東西方向に走るSD4 (第16図3)・14、北西から南東へ走るSD13・15がある。これらは、SD1を除けば、ほぼ上端規模が同じものである (ただし、SD12~15は上面検出のみの為、正確な規模は不明)。これらの溝跡の幾つかは、I区10ライン以東の東西に走る溝跡と同一のものと思われる。V層上面検出のものは、SD24 (第17図1) の一条のみである。南北方向に走るやや幅広の溝跡で、B-13グリッドの一部を完掘したのみである。出土遺物はない。

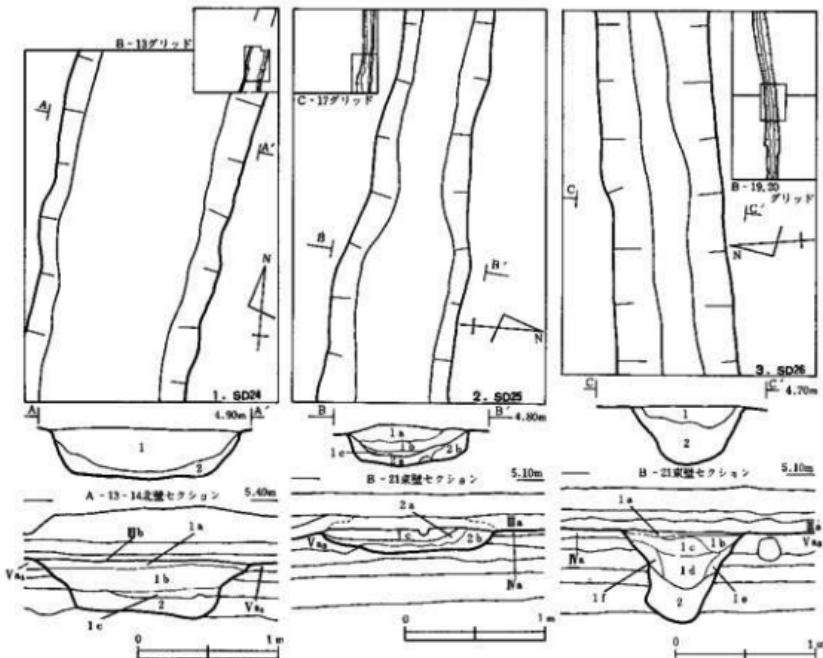


第15図 IV層上面・V層上面検出透構全体平面図



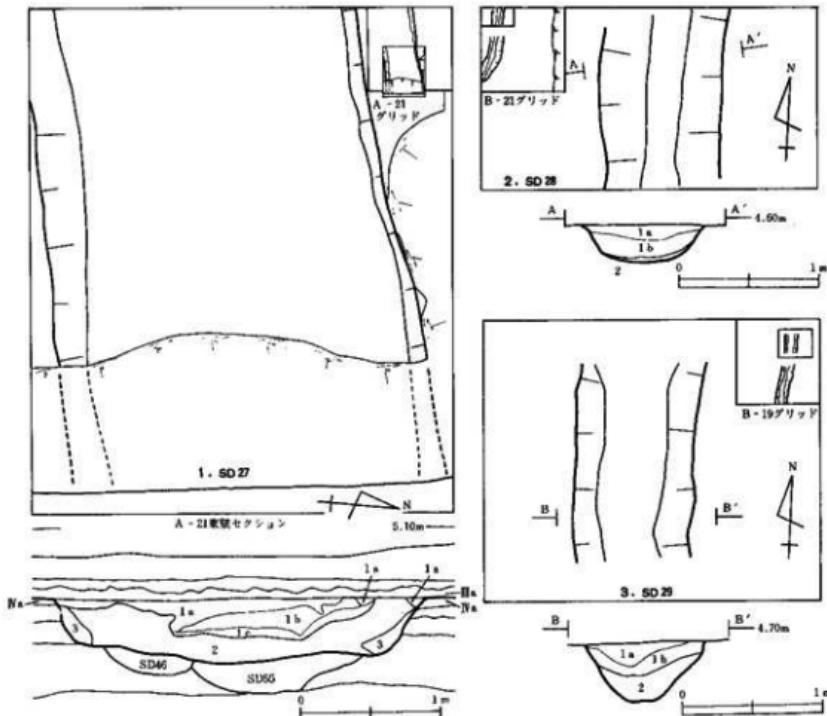
地 区 名	検出場所	方 向	形 状	上 墓 横	下 墓 横
SD1 観察点	B-5, 6, C-3~6	SD2堆積土上面	N-70° E	蛇行	約150cm 約70cm
壁 角 深 さ	底面高さ cm	新面形態	堆積層數	出土遺物層	
15°前後	約20cm	G	2	堆積土1層	
層位 土 色	土 性	粒 性	しまり	混 入 物	堆積時間
s 10YR 黄褐色	粘土質シルト	有	有	黄褐色火山と黄色シルトをブロック状。鉄分。	発達後
b 2.5YR に近い黄色	シルト	やや有	右	上部に黄褐色粘土質シルト。鉄分。	発達後
2 a 10YR 黄褐色	粘土質シルト	有	有	下部に暗赤黃色粘土質シルト。鉄分。	発達時
b 10YR 黄褐色	粘土質シルト	有	鉄分		発達時
地 区 名	検出場所	方 向	形 状	上 墓 横	下 墓 横
SD3 観察点	A-5, 6, B-4, 5	SD2堆積土上面	N-60° E	直 行	約70cm 約40cm
壁 角 深 さ	底面高さ cm	新面形態	堆積層數	出土遺物層	
45°前後	約20cm	SW-5~-NE	2	堆積土1~2層、成層	
層位 土 色	土 性	粒 性	しまり	混 入 物	堆積時間
s 1n 10YR 黄褐色	粘土質シルト	やや有	有	黑色粘土と黄褐色シルトをブロック状。鉄分。	発達後
b 10YR 黄褐色	シルト	やや有	右	灰黒褐色シルトをブロック状。鉄分。	発達後
2 n 10YR 黄褐色	粘土質シルト	やや有	有	灰黒褐色シルトをブロック状。鉄分。	発達時
地 区 名	検出場所	方 向	形 状	上 墓 横	下 墓 横
SD4 観察点	A-4, 6	SD2堆積土上面	N-80° E	やや弯曲	約100cm 約60cm
壁 角 深 さ	底面高さ cm	新面形態	堆積層數	出土遺物層	
70°前後	約20cm	W-15~-E	D	2	堆積±1層、成層
層位 土 色	土 性	粒 性	しまり	混 入 物	堆積時間
1 n 10YR 黄褐色	シルト	やや有	有	に近い黄褐色シルトをブロック状。鉄分。	発達後
b 10YR 黄褐色	シルト	やや有	右	鉄分。	発達後
2 n 10YR 黄褐色	粘土質シルト	有	有		発達時
地 区 名	検出場所	方 向	形 状	上 墓 横	下 墓 横
SD9 観察点	C-4~5, D-3~5	SD2堆積土上面	N-50° E	直 行	50~80cm 約30cm
壁 角 深 さ	底面高さ cm	新面形態	堆積層數	出土遺物層	
65°前後	約30cm	SW-15~-NE	C	2	堆積土1層
層位 土 色	土 性	粒 性	しまり	混 入 物	堆積時間
1 a 10YR 黄褐色	シルト	やや有	有	黄褐色シルトと斑点状。鉄分少量。	発達後
b 10YR 黄褐色	シルト	やや有	右	黄褐色の粘土質シルトとシルトを少量。鉄分少量。	発達後
c 10YR 黄褐色	シルト	やや有	右	に近い黄褐色シルトのブロックを多量。暗褐色シルト少量。	発達後
2 10YR 黄褐色	シルト	やや有	右	黄褐色シルトを斑点状。	堆積時

第16図 SD1・3・4・9平面図・断面図



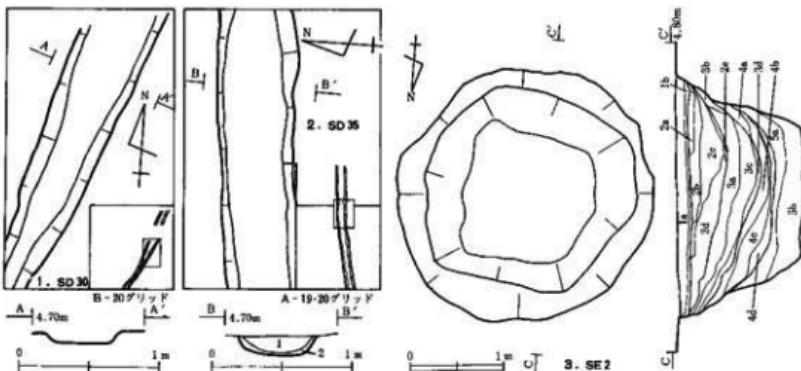
地 区 名		検出層位	方 向	形 状	上 墓 横	下 墓 横
S D24 斎摩表	A - 13 - 14, C - 13	V層上面	N - 5° E	直行	約120cm	約90cm
盤角深さ	底面高さ	底面高さ	新面形態	堆積層數	出 土 遺 物	有無
55°前後	約30cm	NW - 10° S	A	2	無	R - 13の一部のみ出現
層位	色	土 性	粘 性	しまり	人 物	堆積時期
I a	10Y R 5/4 黄褐色	シルト	やや有	有	黒褐色粘土ブロック状、鉄分網状。マンガン性多量。砂、灰化物微量。	発達後
b	2.5Y R 5/4 黄褐色	粘土質シルト	中等有	有	鉄分を網状に含量。マンガン性・砂微量。	発達後
c	2.5Y R 5/4 黄褐色	シルト	やや有	有	黒褐色粘土ブロックを横隔状。	発達後
II	2.5Y R 5/4 黄褐色	粘土	有	無	黄褐色土をブロック状、鉄分を網状に微量。	堆積
地 区 名		検出層位	方 向	形 状	上 墓 横	下 墓 横
S D25 斎摩表	A - 10, B - 11 - 12, 15 - 16 - 20 - 21, C - 16 - 20	V層上面	N - 90° W	4个等価	60 - 100cm	20 - 60cm
盤角深さ	底面高さ	底面高さ	新面形態	東 西 南 北	堆積層數	出 土 遺 物
55°前後	約10 - 40cm	凸凹し傾向性認められず。	C	S D28 - 30を切る。	2	堆積土 1 - 2 等
層位	色	土 性	粘 性	しまり	人 物	堆積時期
1 a	10Y R 5/4 黄褐色	粘土質シルト	やや有	有	鉄分を網状。マンガン性。	—
b	10Y R 5/4 黄褐色	粘土	やや無	やや有	鉄分を網状。マンガン性。	—
c	10Y R 5/4 黄褐色	粘土	無	無	鉄分を網状。マンガン性。	—
2 a	10Y R 5/4 黄褐色	粘土	無	やや有	鉄分を網状。灰化物。	堆積
b	10Y R 5/4 黄褐色	粘土	無	やや有	鉄分を網状。灰化物多量。	堆積
地 区 名		検出層位	方 向	形 状	上 墓 横	下 墓 横
S D26 斎摩表	A - 10 - 14, B - 14 - 21	V層上面	N - 90° W	やや弯曲	50 - 80cm	約100cm
盤角深さ	底面高さ	底面高さ	新面形態	東 西 南 北	堆積層數	出 土 遺 物
55°前後	30 - 50cm	W - 35 - E	C	S D28 - 30を切る。	2	堆積土 1 - 2 等、底面
層位	土 色	土 性	粘 性	しまり	人 物	堆積時期
1 a	10Y R 5/4 黄褐色	粘土	やや有	有	鉄分を網状。マンガン性・砂微量。	発達後
b	10Y R 5/4 黄褐色	粘土	やや有	有	鉄分シルト。マンガン性・砂微量。	発達後
c	2.5Y R 5/4 黄褐色	粘土質シルト	やや有	有	マンガン性多量。灰化物・砂微量。	発達後
d	10Y R 5/4 黄褐色	粘土	やや有	有	鉄分を網状。マンガン性多量。鉄粉微量。	向葉後
e	10Y R 5/4 黄褐色	シルト質粘土	やや有	有	鉄分を塊状。において青銅シルト粒子。砂微量。	向葉後
f	5Y R 5/4 リード黒色	シルト質粘土	有	有	鉄分微量。植物遺体、細胞多量。	堆積後
2	5Y R 5/4 リード黒色	粘土	有	有	鉄分微量。植物遺体、細胞多量。	堆積後

第17図 SD24・25・26平面図・断面図



地 区 名		検出層位	方 向	形 状	上 墓 鋼	下 墓 鋼	壁 角	深 度
SD27	A - 10 - 21, B - 16 - 20	直層上面	N - 90° W	直	220 - 310cm	190 - 270cm	50°前後	20 - 40cm
被覆岩	基面 高 底 cm	断面形態	直	直	間 係	堆積厚数	出土 物	層
	W - 30 - E, F	C	SUD28 - 35 - 37を切る。			3	堆積土 1 - 2層, 黄面	
SD27	層位 土 色	土 性	粘 性	しまり	乱 入	物	堆積時期	備考
	1 a 10Y R 20 黒 濃 色	シルト質粘土	有	有	粉分を微量。細砂を微量。		機械時	グライ化
堆積土	b 10Y R 20 黄褐色	粉土	無	有			機械時	—
	c 2.5 Y R 20 黄 色	粘土	有	小中存	粉分を微量。		機械時	—
	2 10Y R 20 灰 黄 色	砂	無	有	粗砂を多量。		機械時	—
	3 10Y R 20 灰 黄 色	粘土	否		黒褐色地盤上にブロック状。にじむ青褐色シルト粒子状。		機械時	塑性限土
SD28	地 区 名	検出層位	方 向	形 状	上 墓 鋼	下 墓 鋼	壁 角	深 度
被覆岩	A - 21, B - 20 - 21, C - D - 30	直層上面	N - 15° E	やや挖入	60 - 100cm	15 - 45cm	50°前後	20 - 40cm
	基面 高 底 cm	断面形態	直	直	間 係	堆積厚数	出土 物	層
	N - 20 - S	F	S D25 - 27 - 36 - 37を切れる。			2	堆積土 1層	
SD28	層位 土 色	土 性	粘 性	しまり	直 入	物	堆積時期	
堆積土	j a 10Y R 20 黑 濃 色	シルト	無	有	上面上に粉分集塊。鉄分凝結状。灰白色ブロック状。		麻糬化	
	b 10Y R 20 黄褐色	シルト	有	有	基本部を弱いブロック多量。上部に灰白色ブロック多量。鉄分凝結状。		麻糬化	
	2 10Y R 20 黄褐色	粘土	有	有	鉄分凝結化。植物遺体微量。		機械時	
SD29	地 区 名	検出層位	方 向	形 状	上 墓 鋼	下 墓 鋼	壁 角	深 度
被覆岩	A - 19 - 20, B - C - 20	直層上面	N - 5° E	やや弯曲	50 - 80cm	20 - 50cm	55°前後	20 - 40cm
	基面 高 底 cm	断面形態	直	直	間 係	堆積厚数	出土 物	層
	N - 20 - S	F	S D26を切る。S D25 - 27 - 31 - 39に切られる。			2	堆積土 1層	
SD29	層位 土 色	土 性	粘 性	しまり	直 入	物	堆積時期	
堆積土	1 a 10Y R 20 黑 濃 色	シルト質粘土	やや有	有	にじむ黄色シルトをブロック状。		麻糬化	
	b 2.5 Y R 20 黄褐色	シルト	やや有	有	鉄分凝結状。灰白色ブロックを微量。		麻糬化	
	2 10Y R 20 黄褐色	粘土	有	有	にじむ黄色シルトを粒状。鉄分多量。		機械時	

第18図 SD27・28・29平面図・断面図



地 区 名		検出部位	方 向	形 状	上 墓 横	下 墓 横	壁 角 深	さ 物
SD30		A - 21. B - 20	盲帶上面	N - 30° E	直	30~50cm	10~40cm	50° 断続 5~15cm
断続岩		底 高 底 cm	断面形態	直	開	低	堆積层数	出土地層
		N - 10° S	A				1	堆積土 1 層
SD30		土 色	上 性	粘 性	しまり	品	入	
堆積岩	单斜	10YR 5/4 黄褐色	シルト	やや有	有	上部に鉄分・マンガン粒沈着、鉄分が磁鐵状。灰白色ブロック。		
SD35		A - 18~23	盲帶上面	N - 30° E	直	約50~60cm	25~45cm	60° 断続 7~12cm
断続岩		底 高 底 cm	断面形態	直	開	低	堆積层数	出土地層
		W - 10° E	C				2	堆積土 1 層 新片的
SD35		土 色	上 性	粘 性	しまり	品	入	
堆積土	1	2.5Y 5/4 黄褐色	粘土質粘土	やや有	やや有	2層を以プロック状、鉄分を磁鐵状。炭化鉄産出。		
	2	7.5Y 5/4 オリーブ褐色	粘土	有	有	鉄分を磁鐵化、植物遺体。炭化鉄産出。		
SE2		地 区 名	検出部位	上 墓 形 状	中 段 形 状	下 墓 形 状	上 墓 横	中 段 横
断続岩		C - 16~17	V型上面	門 形 方	參	方 形	往 270cm	230 × 210cm 140 × 140cm
		壁 角 深	き	底 横	底	横		
		65~75°	140cm	ほぼ平地	5	堆積ヒー3層	上層が削損している可能性あり。	
SE2		土 色	土 性	粘 性	しまり	品	入	
堆積土	1 a	10YR 5/4 黄褐色	シルト	やや有	有	黄褐色シルトを小ブロック状。マンガン粒多量。		
	b	10YR 5/4 にい黄褐色	砂質シルト	やや有	有	鉄分を多量。		
	2 a	10YR 5/4 黄褐色	粘土質シルト	右	やや有	黄褐色粘土質シルト状。		
	b	10YR 5/4 にい黄褐色	粘土質シルト	右	やや有	黄褐色粘土質シルトを鉄状。		
	c	10YR 5/4 黄褐色	粘土	右	やや有	鉄分。		
	d	10YR 5/4 黄褐色	粘土質シルト	右	やや有	にい黄褐色シルトを粒状。		
	e	10YR 5/4 にい黄褐色	粘土	右	無	植物遺体を多量。		
	3 a	10YR 5/4 黄褐色	砂質シルト	やや有	有	にい黄褐色シルトを粒状。		
	b	10YR 5/4 にい黄褐色	粘土	右	やや有	黄褐色粘土をブロック状。		
	c	10YR 5/4 黄褐色	粘土質シルト	右	やや有	黄褐色粘土質シルトを小ブロック状。		
	d	10YR 5/4 黄褐色	粘土	右	やや有	黄褐色シルトをプロック状。		
	e	10YR 5/4 黄褐色	粘土	右	やや有	鉄分を多量。		
	f	10YR 5/4 黄褐色	粘土	右	やや有	にい黄褐色シルトを鉄状。		
	g	10YR 5/4 黄褐色	粘土	右	やや有	黄褐色シルトをプロック状。		
	4 a	10YR 5/4 黄褐色	粘土	右	やや有	鉄分を多量。		
	b	10YR 5/4 黄褐色	粘土	右	やや有	にい黄褐色シルトを鉄状。		
	c	10YR 5/4 黄褐色	粘土	右	やや有	黄褐色シルトをプロック状。		
	d	2.5Y 5/4 黄褐色	粘土	右	やや有	鉄分。		グライ化
	e	10YR 5/4 オリーブ褐色	粘土	右	やや有	鉄分。植物遺体を多量。		グライ化
	f	10YR 5/4 オリーブ褐色	粘土	右	やや有	鉄分。植物遺体を多量。		グライ化

### S D 31 - 32 - 36 - 37 - 38, S K 9 観察表

地 区 名	検出部位	方 向	形 状	上 墓 横	下 墓 横	底 面 高 底 cm	重 墓 間 隙	出土地層	深
S D 31	A - 19~20	盲帶上面	N - 50° W	直	約35cm	約20cm	約 8cm	NW - 0 - SE	S D 29 を切る。
S D 32	A - 18~19	盲帶上面	N - 50° W	直	約35cm	15cm	約 5cm	N - 5 - S	S D 31~35 に切られる。
S D 36	C - 19~20, D - 20~21	盲帶上面	N - 70° W	直	約40cm	約20cm	約 5cm	W - 5 - E	S D 28~29 を切る。
S D 37	A - 21, B - 19~20	盲帶上面	N - 75° E	弯	約40cm	約25cm	約 5cm	W - 0 - E	S D 28~30 を切る。
S D 38	B - 19	盲帶上面	N - 35° E	直	約30cm	約15cm	約 5cm	—	S D 29 に切られる。
SK 9	地 区 名	検出部位	鉄錆方向	上 下 墓 形 状	上 墓 横	下 墓 横	壁 角 深	さ 物	
	A - B - 16	盲帶上面	N - 5° W	長板内凹	280 × 45cm	265 × 25cm	40° 断続	10cm	
	底面状態			堆積層数	出土地層	重 墓 間 隙	深	老	
	固 実	ひらいたU字状	1	堆積土 1 層					カク乱の可能性あり。

第19回 SD30・35, SE2 平面図・断面図

**土壤**：IV層上面で1基検出された。SK9はハマキ状の平面形長楕円形を呈する土壤であるが、深さが約10cmと浅く、底面も凹凸状で、カク乱の可能性もある。

**井戸跡**：V層上面でSE2（第19図3）が1基検出された。この周辺は、基本層位1層下が直接V層となり、明確に造構掘り込み面がV層上面とは言い難い。上端平面形は円形を呈するが、中段・下端平面形は隅丸方形を呈しており、元来は、方形の井戸であったことも考えられる。上端径が約3mあるのに対し、深さ2m弱とやや浅い。遺物は堆積土上部よりの出土で、底面よりの出土はない。

## (2) 出土遺物（第20~21図、第3表）

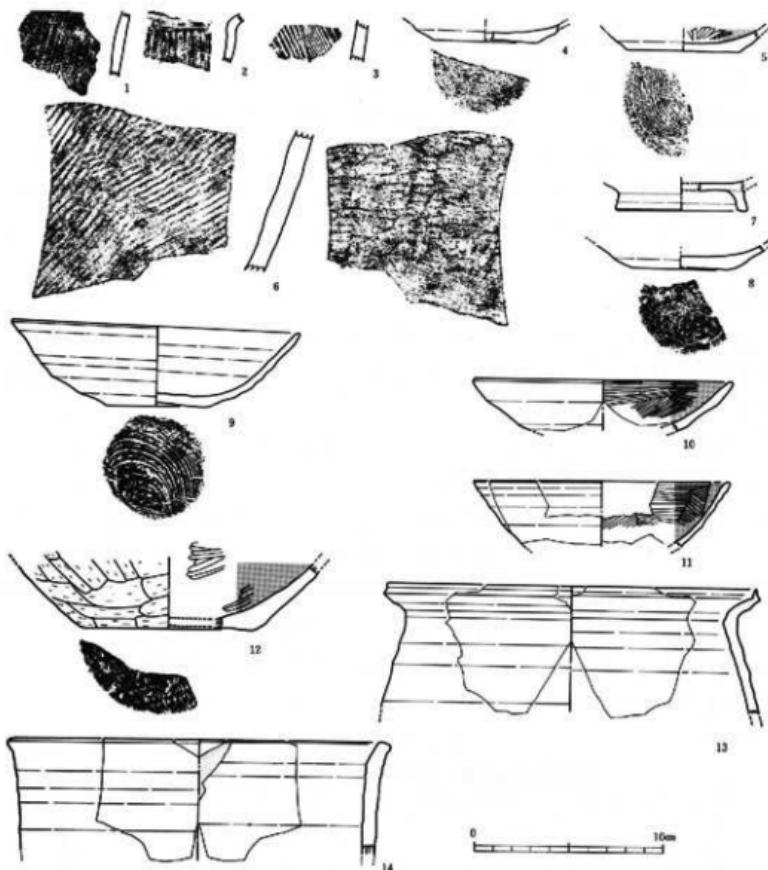
検出造構は、溝跡・土壤・井戸跡で、これらの造構から土師器・須恵器・陶磁器・石製品・赤焼土器等が出土している。特にロクロ使用の土師器の細片が多く、SD27堆積土中から多量に出土している。

**土師器**（第20図1~5・7・10~14）：製作の際に非ロクロとロクロ使用に分けられる。1~3は非ロクロで壺の破片である。調整は外面ハケメである。4~5・7・10~11・13・14はロクロ使用のものである。4は壺底部片である。10~11は体部上半の壺で、内面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。7は高台付壺の高台部片で、高台は貼り付け高台である。12・13は壺の破片で、13は頸部が「く」字状にくびれ、口縁端部で上方に直立する。12は底部片で底部にアジロ压痕、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。14は、口頸部片で体部上半から口縁部まで直線的で、口縁部と頸部の境が明瞭でなく形が筒状である。これらのことから壺の可能性が考えられる。

**須恵器**（第20図6・8・9）：8、9は壺で、9はほぼ完形であり、体部から口縁部にかけ

第3表 IV層上面・V層上面検出造構出土遺物数量表

遺構名 (例)	土 師 器 片		須恵器片 (例)	須恵器片 (例)	陶磁器片	瓦 片	石製品	金属製品	木製品	骨	自然遺物
	非ロクロ	ロクロ									
SD1(1)	13	71	1	15	—	—	—	—	—	—	—
SD3(1)	—	18	1	—	—	—	—	—	—	—	—
(2)	—	14	—	1	—	—	—	—	—	—	—
(底面)	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—
SD4(1)	—	35	—	8	—	—	—	—	—	—	—
(底面)	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
SD5(1)	6	59	2	4	—	—	—	—	—	—	—
SD25(1)	—	160	—	8	2	1	—	—	—	—	—
(2)	—	9	—	1	—	—	—	—	—	—	木片、小枝
SD26(1)	1	121	—	8	—	—	—	—	—	—	—
(2)	—	32	—	4	—	—	—	—	—	—	—
(底面)	—	19	—	1	—	—	—	—	—	—	—
SD28(1)	—	306	3	9	—	—	1	—	—	—	—
(2)	—	193	1	4	—	—	—	—	3	1	—
(底面)	—	78	—	8	—	—	—	—	—	1	—
SD29(1)	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(底面)	—	—	—	(1)	—	—	—	—	—	—	—
SD30(1)	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SD35(1)	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK9(1)	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—
SE2(1)	—	4	—	2	—	—	—	—	—	—	木ノ実、木片、種子
(2)	—	11	—	1	—	—	—	—	1	—	—
(3)	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—



※( )内数値は復元数据

番号	グリッド	遺構	層位	電極番号	種類	期	測定法			算出量	算出基準	
							外 面	内 面	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	
1	B-19	S D26	地1	C-3	土師器	慶	ハケメ	不規	—	—	—	—
2	■ 区	S D1	地1	C-45	土師器	慶	ヨコナヂのちハケメ	—	—	—	—	13・8
3	■ 区	S D9	地1	C-29	土師器	慶	ハケタ	ナデ	—	—	—	—
4	B-19	S D26	底面	D-48	土師器	浜	ロクロ、底部凹転系切り	ミガキ	—	—	5.6	—
5	B-17	S D27	底1	D-35	土師器	浜	ロクロ、底部凹転系切り	ミガキ→黒色処理	—	—	(6.2)	—
6	C-5	S D1	堆1	E-23	須恵器	慶	平行凹目	平行押え目	—	—	—	16・7
7	B-19	S D26	底面	D-47	土師器底台付	浜	ロクロ、底部不明	ミガキ	—	—	(7.0)	—
8	A-11	S D27	堆1	E-5	須恵器	浜	ロクロ、底部凹転系切り	ロクロ	—	—	(5.2)	—
9	B-22	S D28	底面	E-7	須恵器	浜	ロクロ、底部凹転系切り	ロクロ	15.4	4.5	5.4	15・3
10	A-B-17	S D27	縫1	D-1	土師器	浜	ロクロ	ミガキ→黒色処理	(13.8)	—	—	—
11	A-B-17	S D27	縫1	D-2	土師器	浜	ロクロ	ミガキ→黒色処理	(13.7)	—	—	—
12	■ 区	S D3	底面	D-8	土師器	慶	ハケゼリ、底部削成直角	ミガキ→黒色処理	—	—	(9.0)	—
13	C-20	S D28	堆1	D-21	土師器	慶	ロクロ	ロクロ	(19.6)	—	—	14・9
14	B-11	S D25	堆1	D-22	土師器	楕	ロクロ	ロクロ	(20.5)	—	—	—

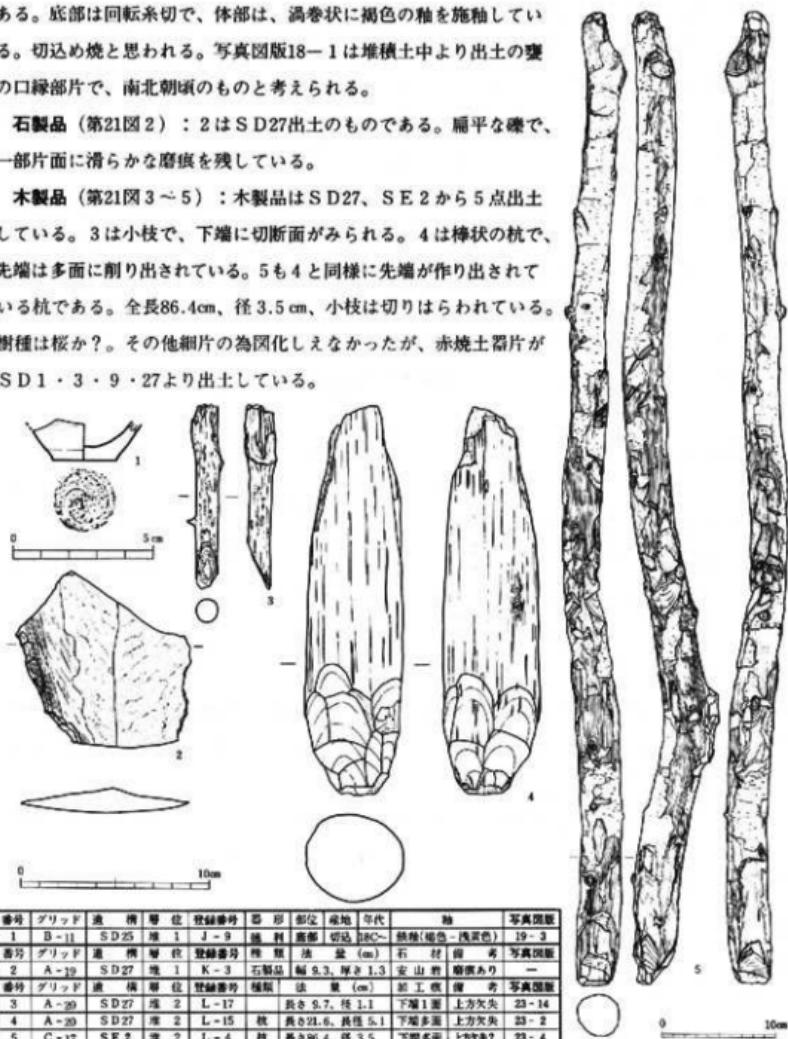
第20図 IV層上面検出遺構出土遺物(土師器・須恵器)

て直線的に外傾する。底部は回転糸切りである。8は底部片で回転糸切りである。6は甕の体部片で外面平行叩目、内面平行押え目である。

**陶磁器（第21図1）**：S D25より2点出土した。1は検出面より出土した徳利の底部破片である。底部は回転糸切で、体部は、渦巻状に褐色の釉を施釉している。切込み焼と思われる。写真図版18-1は堆積土中より出土の甕の口縁部片で、南北朝頃のものと考えられる。

**石製品（第21図2）**：2はS D27出土のものである。扁平な砾で、一部片面に滑らかな磨痕を残している。

**木製品（第21図3～5）**：木製品はS D27、S E2から5点出土している。3は小枝で、下端に切断面がみられる。4は棒状の杭で、先端は多面に削り出されている。5も4と同様に先端が作り出されている杭である。全長86.4cm、径3.5cm、小枝は切りはらわれている。樹種は桜か？。その他網片の為固化しえなかったが、赤焼土器片がS D1・3・9・27より出土している。



第21図 IV層上面、V層上面検出遺構出土遺物(陶磁器・石製品・木製品)

### 3. VI 層 上 面

#### (1) 検出遺構 (第22~24図、写真図版10-1)

V層排土後、VI層上面で検出された遺構である。ただし、SD46は、SD27の底面より検出され、明確にはVI層上面検出遺構と区別されるが、岡面の重複をさける意味で、便宜上、当層位で扱った。従って、VI層上面で検出された遺構は、小溝状遺構のみである。

小溝状遺構 (第22・23図) : I区、C-14~19、D-G-20・21グリッドを中心として検出された。15ライン以西、G-20グリッドを除くDライン以南は、上面検出のみである。約1.5mの等間隔をもって、幾条にも平行に走る小溝跡群で、溝跡の規模は、上端幅約20cm、深さ10cm前後である。上端・下端ともかなり不安定な形状で、底面も凹凸が激しい。底面には深い小穴部分を持つ場合もある。多くは東西方向 (N-80°-W) に走るが、C-16・17グリッドでは、これらに直交する南北方向のものも認められる。東西方向、南北方向の新旧関係については不明である。A・B-16~18グリッドにも東西方向のものが、断片的に検出されている。これらは、後世の削平による残存部と理解される。従って、小溝状遺構は、Cライン以北にも広範囲に分布していたものと予測される。小溝状遺構内よりは、小土師器片が1点出土したのみであった。

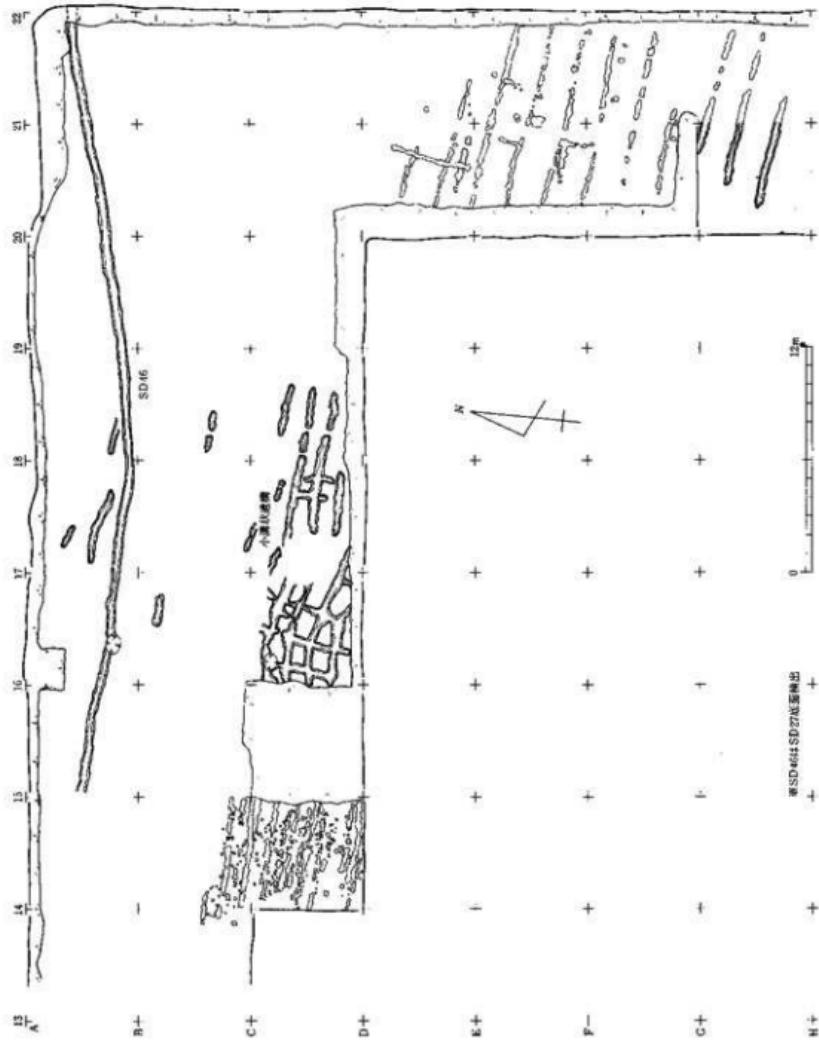
溝跡 (第24図) : SD27と同一方向をとる (東西方向) SD46が、SD27底面より検出されている。残存状況は小溝であったが、上部をかなりSD27により削平されたものと思われる。少量の土師器片・須恵器片を出土している。

#### (2) 出土遺物 (第25図)

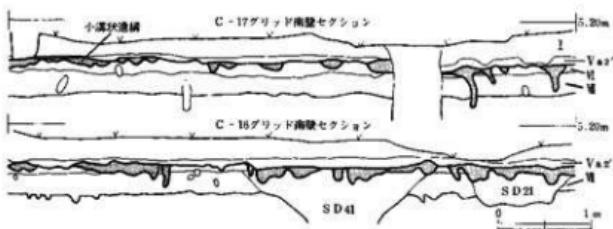
出土遺物は、小溝状遺構より非ロクロ使用の土師器片が1点、SD46より非ロクロ使用の土師器片が1点、ロクロ使用の土師器片が8点、須恵器片が1点出土した。

1はC-15グリッドの小溝状遺構堆積土より出土した。非ロクロ使用の土師器で、壺の頸部破片である。頸部下端から上端にかけて垂直に立ち上る器形で、内外面にはナデが施されている。2はA-18グリッドのSD46堆積土より出土した。非ロクロ使用の土師器で、壺の体部破片である。内外面ともハケメ調整が施されている。

これら遺構の出土遺物は少量で、また細片の為、時代判定を明らかにすることは困難である。

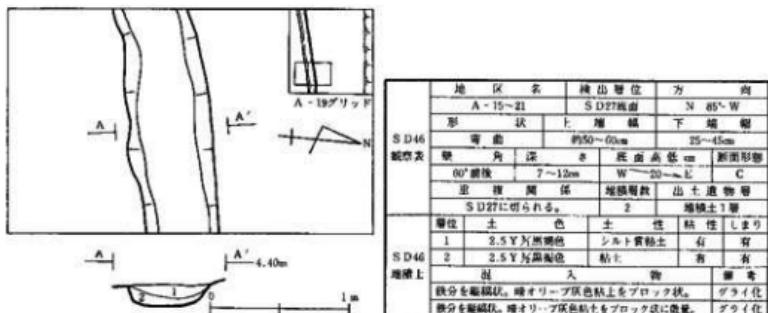


第22図 VI層上面換出造構全体平面図



小溝状構造	土色	土性	粘性	しまり	侵入物
堆積土	2.5YR 黄褐色	シルト	中等	有	V带あるいは埴輪をブロック状。マンゴン粒少種。

第23図 小溝状構造横断面図



第24図 SD 46平面図・断面図



番号	グリッド	遺構	層位	発見番号	種類	外	内	写真版
1	C-15	小溝状構造	堆積土	C-4	土師器	板ヨコナメ	ヨコナメ	二
2	A-18	SD 46	堆積土	C-4	土師器	変ハケメ	ハケメ	一

第25図 VI層上面検出遺構出土遺物(土師器)

#### 4. VII a 層上面

##### (1) 検出遺構 (第26-28図、写真図版10-3~5・11-1)

VII a 層上面で検出された遺構である。水田跡、溝跡1条、井戸跡1基、土壙1基が検出されている。SE1は、1層排土後、直接VII d<sub>1</sub>層 (VII a・b層との対応層)となる地区で検出され、VII 墓排土後検出のものではない。SD21は、調査区南壁・東壁断面観察では掘り込み面がVII層上面か、VII d<sub>1</sub>層上面かの判断がつけ難いが、一応、当層位面検出遺構として取り扱った。従って、明確にVII a 層上面の時期に位置づけられる遺構は、水田跡とSK12である。

**水田跡**: III層上面検出の水田跡に比べ、かなり不明瞭な状態で、14枚以上の水田とこれに伴う水路が2本 (SD41+47・42) 検出された。畦は作土 (VII a・b層) と同じ土によって作られており、畦と作土とは明確な区別は認められない。作土上の畦の高まりは、水路に取り付く畦で若干確認出来たにすぎない。図面上の畦の高まりは、III層上面検出水田跡と同様、わずかな土色等の差で作土を掘り上げた、水田底面上の畦で、水出使用時 (作土上) の畦とは異なる。また、畦の形状に関して、以上のような状況のため多少問題点があり、畦の幅の計測値については、検出面での数値—図面上の畦の上端—を使用した。

**[畦の配列]** 畦はIII層上面の水田跡に比べ、やや乱れているが、ほぼ南北方向 (N-0~5°-W) のものと、これにほぼ直行する東西方向のものから成る。上層の遺構により畦がかなり破壊されていたり、不明確な部分も多いが、南北、東西畦は、十字状に交差する場合と、南北畦に対して東西畦が一方向にしか取り付かない場合がある。

**[畦の断面形と規模]** 畦は大部分作土内でのものであるため、検出が不明確で、従って断面形にも問題点を残すが、ほぼ台形を呈していたと思われる。作土上の盛り上りは、SD42両側、SD47左側の畦で約4cm程確認されたが、他では盛り上りはみられなかった。畦の幅は、南北方向のものがやや広く、特にSD42両側の畦は幅広い (約120cm、他は80cm前後)。これに比べて東西方向のものはやや狭い (約50cm前後)。

**[水口]** 検出されなかった。

**[水田1枚の形状と規模]** 以上の畦による区画によって14枚以上の水田 (A-20・21グリッド、B・C-20・21グリッド) の水田は、南北畦の残存状況より、さらに東西に2分される可能性がある。) が検出された。いずれも不整形形状を呈するものと思われるが、1枚の形状、規模を明確に把握出来るものはない。しかし、A-16グリッド (南側)、A・B-18グリッドの水田の復元結果からは、約4×4m (約16m<sup>2</sup>) の方形 (A-16)、約6×9m (約54m<sup>2</sup>) の不整長方形 (A・B-18) が想定される。ただし、A・B-18グリッドの水田は、中央に東西畦が取り付くことも十分予測される。

**[作土]** 作土底面はほぼ平坦面を呈する。作土 (VII a・b層) は厚い部分で約15cm、薄い部分

で約3cm、多くは約10cm程の厚さである。作土底面の下には鉄分の集積は認められない。作土底面は、調査区北壁際では西端（A-12グリッド）より東端（A-21グリッド）の方が約45cm低く、調査区東壁際では南端（G-21グリッド）より北端（A-21グリッド）の方が約40cm低くなっている。これらのレベル差は各畦を境とするものではなく、地山の傾きと呼応しながら、除々に北東方向へ傾斜している。

〔水路〕水路としてはS D41・42・47（第27図）が検出された。S D41とS D47は、上端幅約110cm、深さ約40cmのほぼ同様な規模、断面形を呈し、A-17グリッドでは両水路が連結する。S D42は、両水路に比べ上端幅約160cm、深さ約90cmと規模がやや大きく、断面形も異なる。走行性では、S D42とS D47は南北畦とほぼ同方向となる。また、底面高低は、S D41とS D42・47では逆となっている。

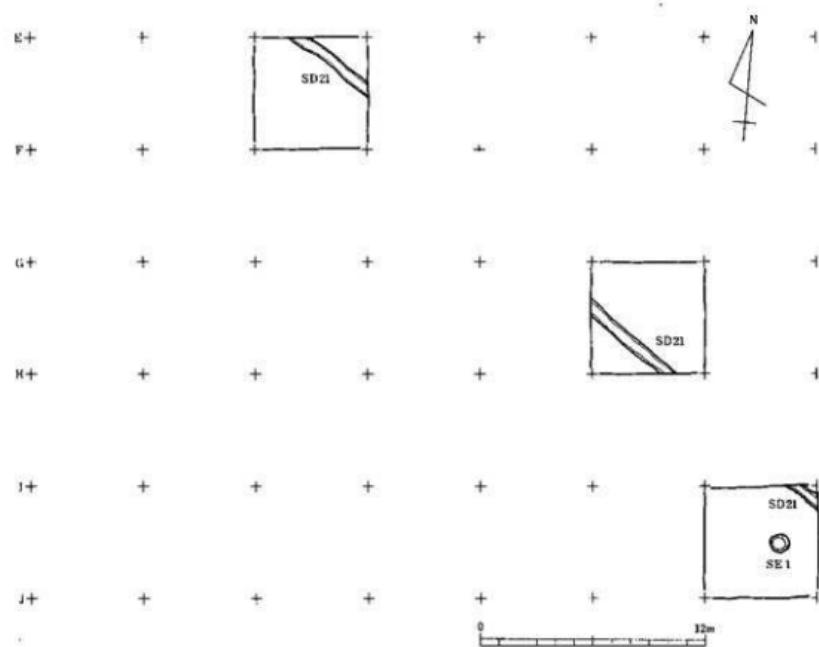
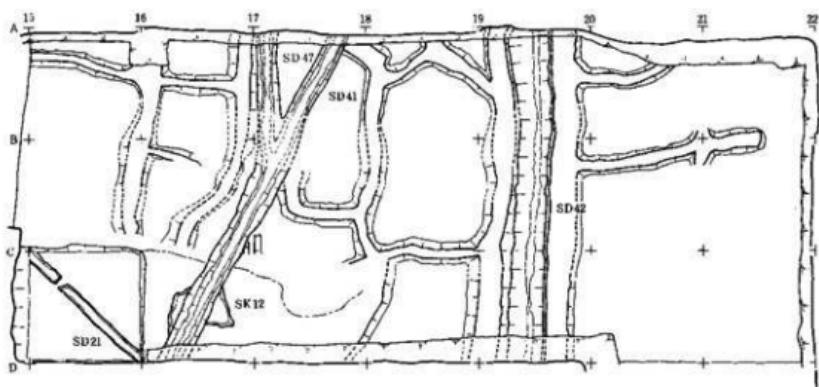
〔水田範囲〕作土は、調査区北壁の観察では12ライン以西になると、上層の造構により全て削平されている。調査区東壁の観察ではH-21グリッド付近で作土は畦状のものに変化し、これより南は、作土との対応層であるVd<sub>1</sub>層となる（第28図1）。C-17グリッド南壁に於いても、西に行くに従い同じ状況が認められた（ただし、畦状部分が確認されなかった）。このような調査区東壁・南壁の作土の変化は、水田部分と水田外部分を示すものと思われる。C-16・17グリッドの一点鎖線部分（第26図）は、平面的にこの変化がみられた地区である（以南が水田外部分）。水田の範囲は、Ⅱ区では作土が存在しないことにより、Ⅰ区に限られ、しかも、その北東側にしか広がっていない。

以上の水田跡からの出土遺物は、作土上面及び水路より、石製品、石器が各1点出土したのみである。

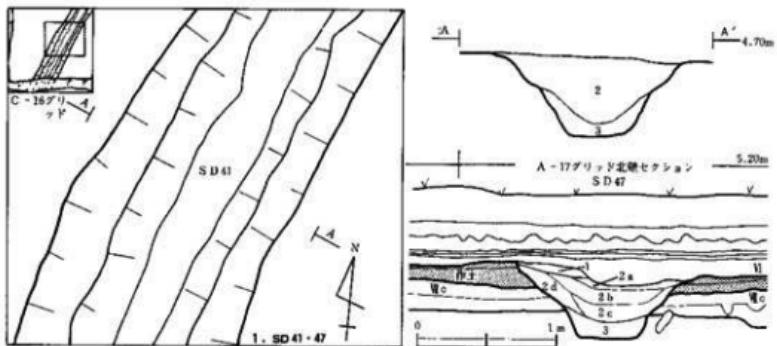
溝跡：S D21（第28図2）が1条検出された。調査面がVd<sub>1</sub>層上面となったため、小溝状を呈したが、Vd<sub>1</sub>層上面が掘り込み面であった場合には、上端幅約80cm、深さ約40cmの規模となる。調査区を南東→北西方面に走行しており、水田南北畦に対して西へ約45°傾いている。出土遺物はない。

井戸跡：I-21グリッドでS E 1（第28図3）が1基検出された。円形の素掘りの井戸で、深さ約150cmである。上端付近は崩壊し、中段以下がほぼ当時の形状をとどめているものと思われる。中段径約80cmで、壁は底面から中段まで、ほぼ垂直に立ち上っている。出土遺物はない。

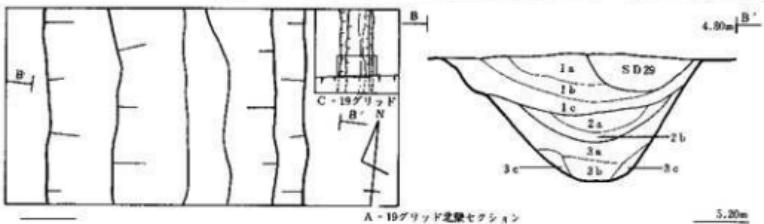
土壤：C-16グリッドでSK12が1基検出された。S D42に切られており、平面形は不明である。上端平面規模東西約300cm、南北約220cmで、深さは約20cmと浅い。底面は凹凸状である。出土遺物はない。



第26図 71a層上面突出構全体平面図

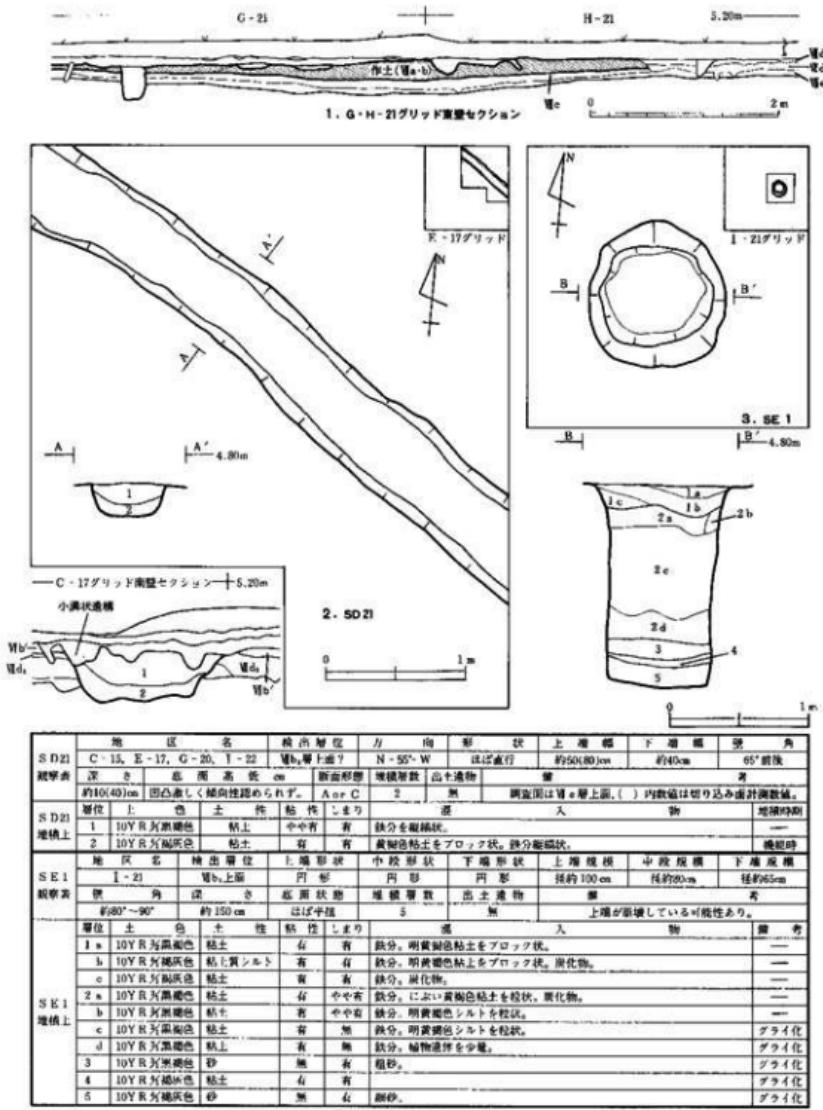


SD 41	地 区 名	検出層位	方 向	形 状	状 況	
					41	47
砂 岩 系	上 層 部	下 端 部	傾 角	深	底 面 基 盤	断面形態
	100~120cm	30~40cm	60°前後	50~60cm	SD 41 N=20° S, SD 47 N=10° S	断面基盤
層位	上 部	角	性	粘 性	しまり	出土物
1	10Y R 8号 色	青褐色	砂層	やや有	有	鉄分離解状。
2 a	10Y R 8号 黄 色	黃褐色	粘土質シルト	やや有	有	マンガン斑。炭化物量、細粒度。
2 b	10Y R 8号 灰 色	灰色	シルト質粘土	やや有	有	鉄分離解状。に多い黄色シルト粒、炭化物粒、鉄分量。
c	2.5 Y 8号 褐 色	褐色	粘土	有	有	鉄分離解状。
d	10Y R 8号 褐 色	褐色	粘土	やや有	有	炭化物粒、鉄分量。
3	2.5 Y 8号 褐 色	褐色	粘土	やや有	有	鉄分離解状。炭化物粒、鉄分量。



SD 42	地 区 名	検出層位	方 向	形 状	上 層 部 下 端 部	
					41	約30cm
砂 岩 系	上 層 部	底 部	底 面	高 低	cm	断面形態
	45°~60°	80~100cm	N=10° S	F	3	堆積土2層
層位	土 色	上 性	粘 性	しまり	底 面 基 盤	出土物
1 a	10Y R 8号 灰 色	粘土質シルト	有	有	鉄分多量。マンガン斑。	堆積時
b	10Y R 8号 灰 色	粘土	やや有	有	鉄分多量。マンガン斑。	堆積時
c	2.5 Y 8号 褐 色	褐色	粘土	石	有	鉄分離解状。
2 a	7.5 Y 8号 褐 色	褐色	粘土	有	に多い黄色シルトをブロック状。	堆積時
b	7.5 Y 8号 褐 色	褐色	粘土	有	に多い黄色シルトをブロック状。変化粒多量。	堆積時
3 a	5 Y 8号 イエロー 色	黄色	粘土	有	グラウナ化した地山ブロック多量。鉄分、砂粒。	堆積時
b	2.5 Y 8号 褐 色	褐色	粘土	石	グラウナ化した地山ブロック多量。黒褐色粘土微量。	堆積時
c	10G Y 8号 褐 色	褐色	粘土質シルト	有	グラウナ化した地山ブロック多量。	堆積時

第27図 SD 41・42・47平面図・断面図



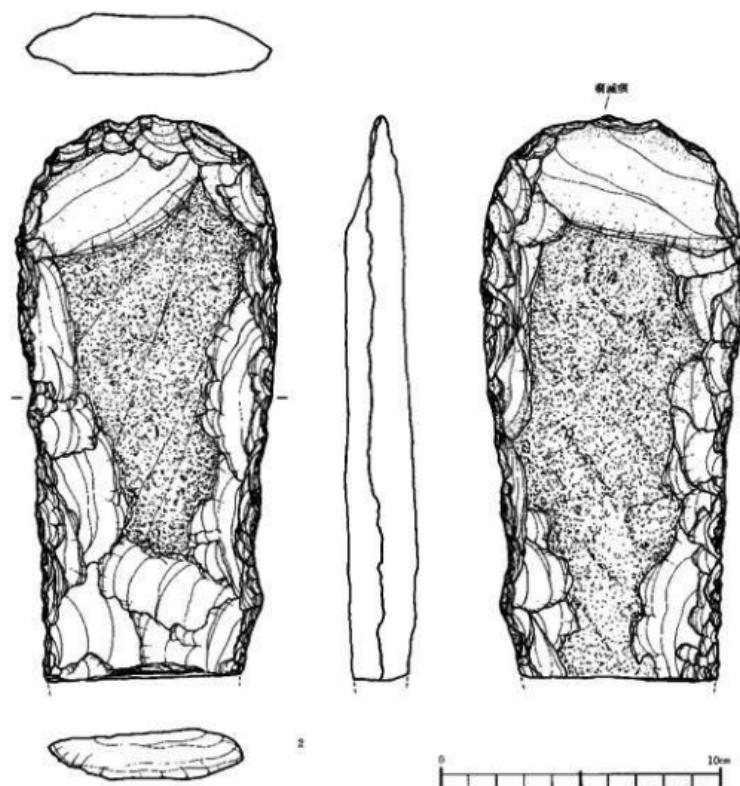
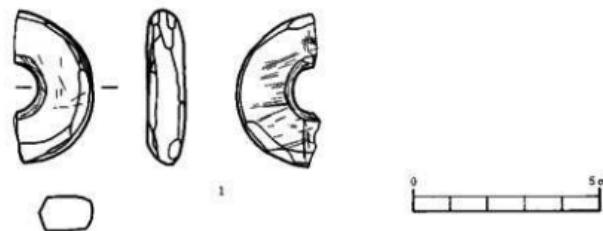
第28図 G・H-21グリッド東壁断面図, SD21, SE1平面図, 断面図

## (2) 出土遺物（第29図）

石器と石製品が各1点、埴層水田跡より出土したのみである。

石器(2)：水田跡水路（S D42）内堆積土中より、扁平打製石斧が1点出土した。石器の形によって、その製作時代を識別するのはかなり難しいことである。本石斧は縄文或いは弥生時代のものという可能性がある。製作技術について、大形な扁平な礫器を素材に両面から加工をくわえ、対称性がある形に仕上げている。加工の削離痕は約長幅 $1\times 0.5$ と $1.3\times 1.5$ cmという二つの種類を区別でき、前者は石斧全体の整形をするため、後者は刃部の調整或いは、刀部の再生などと考えられる。さらに、石斧の刃部の対応する両側では明らかに使用痕らしい磨滅痕がある。石斧の一端は折断されており、折断面はBending fractureの破壊面の特徴を持っている。

石製品(1)：水田跡作土上面（埴a層）より、環状になると思われる石製品が1点出土した。ほぼ均強を欠失しているが、推定外径7.4cm、推定孔径1.3cmである。厚さは約0.9cmで扁平である。表裏両面及び側面には整形の際の擦痕が認められる。



番号	グリッド	遺 横	厚 位	登録番号	種 細	法 葉	石 質	調 常	写真図版
1	B-17	水	田	作上下面	K-36	塊状石製品	1.5	0.9	輕小黃褐色泥灰岩 最大径約4 cm, 孔径約1.3cm, 機械あり
2	C-19	S	D42	块	3	K-4	打製石器	2.3	2.5

第29図 Ⅴ層水田跡出土遺物(石器・石製品)

## 5. VIIc層上面・VII層上面

### (1) 検出遺構 (第30~32図、写真図版11-2~3、12-1~2)

VIIc層上面検出遺構は、VIIb層排土後に検出された遺構である。ただし、平面プランがVIIc層上面では不明確で、調査はVIIe層上面で行なった。この面に於ける遺構は、溝跡が5条検出されている。

罹層上面検出遺構は、II層あるいはIII層排土後、直接罹層面になる地区 (E-13・14グリッド、II区) で検出され、明確には、VII層排土後の検出遺構とは異なる。溝跡が2条、河川跡が1本検出されている。

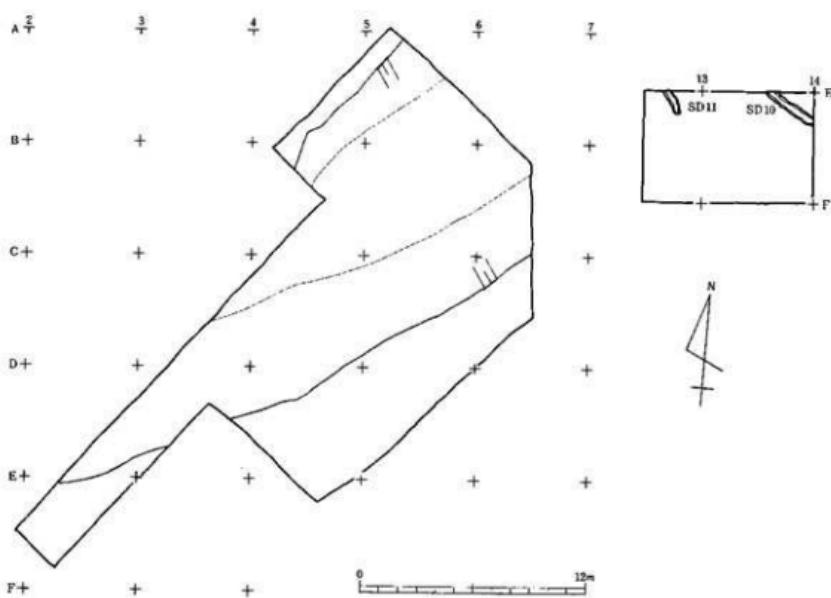
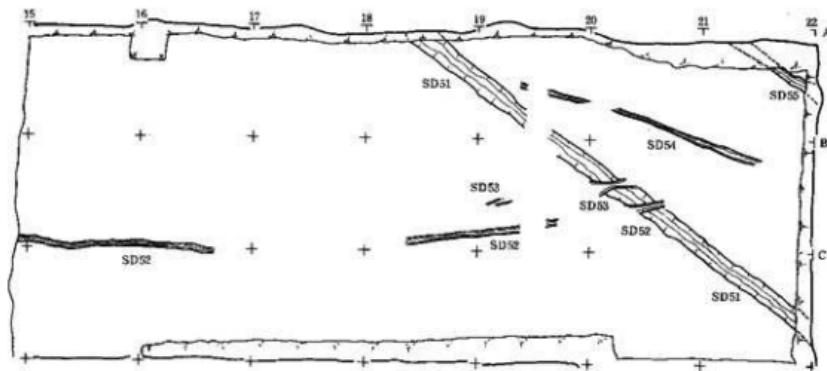
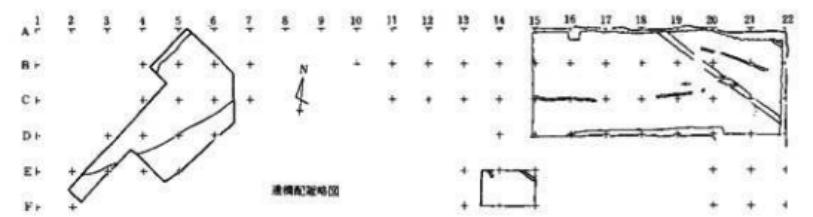
溝跡: VIIc層上面検出のものは、走行方向に共通性は認められない。SD51 (第31図) は、上端幅約1mのもので、この面で検出された溝跡中では、最も直線的で、規模も大きい。他のSD52~55は、全て上端幅が50cm以下、深さ10cm以下の小規模な溝跡で、断片的なものが多い。SD52・53は、SD51を切っている。いずれの溝跡からも遺物は出土しなかった。VII上面検出のSD10・11は、ほぼ同規模な小溝跡であるが、調査部分がわずかであった為、詳細は不明である。

河川跡: II区、罹層上面で1号河川跡が検出された。A-5~7グリッド北壁でも、堆積土2層の落ち込みが確認されており、ほぼ北東から南西方向に走るものと思われる (流れの方向は不明)。1m幅部分だけ底面まで掘り下げ、他は上面検出のみにとどめた。堆積層は大別6層から成る (第32図)。最下層は砂層で、堆積土2層は灰白色火山灰を含む (写真図版12-1)。明確な落ち込みが認められるのは、堆積土2層面からである。堆積土1層は広範囲な分布を示し、調査対象地区北側の壁面観察では、A-13ライン以西、西端の4ラインまで、約10cmの厚みを持って分布している。調査区では、II区とA・B-7グリッドの全面に分布する。堆積土2層面 (明確な落ち込み面) の上端幅は、底面調査区で約13m、調査対象区北壁観察では約9cmで、地点により値が異なる。深さは、底面調査区では約1.4m程度で浅い。小範囲の調査であったが、堆積土中、底面より多量の遺物を出土した。墨書き土器は全て当河川跡よりの出土である。また、底面より径30cm以上もある流木 (根元部分も含む) が出土している。

### (2) 出土遺物 (第33~37図、第4表)

II区検出の1号河川跡以外、他の遺構よりの出土遺物は皆無である。1号河川跡では堆積土1層を中心として、土師器、赤焼土器、須恵器、瓦、土製品、石製品、木製品、木片、種子、樹皮等が出土している。1号河川跡は一部分のみの調査の割には遺物出土量が豊富で、土師器、須恵器には、%以上のものや、岡化されたものが多い。特に土師器、須恵器の坏外面体部、及び底部には「臣」、「人」と墨書きされているものもあり注目される。

土師器 (第33・34図) : 堆積土上層から底面まで出土している。これらは製作の際に非ロク

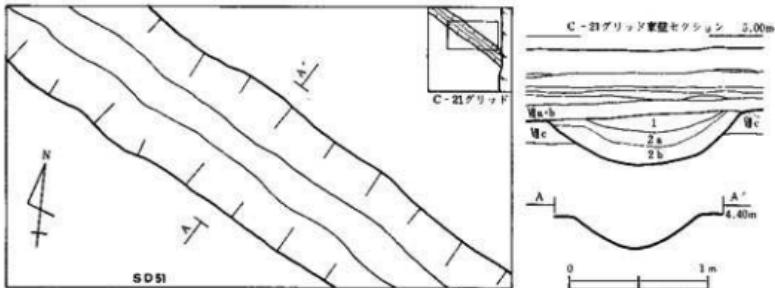


第30図 Ⅳc層上面・Ⅴ層上面検出造構全体平面図

第4表 瓦屑上面檢出遺構出土遺物數量表

地名 (部位)	主耕层(0~30cm以上)		次耕层(30~60cm)		更次层(60cm以上)		瓦片		上製品		石製品		木製品		其他	
	耕作层	腐殖层	耕作层	腐殖层	耕作层	腐殖层	瓦片	瓦片	上製品	上製品	石製品	石製品	木製品	木製品	其他	其他
1号地(田1)	25	16(2)	—	13	—	20	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
(2)	2	39	—	2	7	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
(3)	3	23	—	—	4	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(4)	—	21(2)	—	1	20(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(底土)	2	14	1	11	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—

ロのものと、ロクロ使用のものに分けられる。第33図1～7は非ロクロの壺の破片で1・2は口縁部から頸部までの資料で、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外傾する。内外面ともハケメ、II縁部ヨコナデ調整である。3・4は頸部から体部にかけての資料で内外面ともハケメ調整である。5・6は底部資料で体部内外面ハケメ調整である。また7も底部資料で体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ調整である。第33図8～10、第34図はロクロ使用のものである。第34図1～8は壺である。2・6・8を除き他は全て方に未なたい破片資料である。2は底部切り離し不明で、体部から底部にかけて手持ちヘラケズリ、8は底部切り離し回転ヘラ切り、体部下半、回転ヘラケズリ、1・3～7は、いずれも底部切り離し回転糸切りで、3は体部下半に手持ちヘラケズリが加えられている。内面はいずれも横位、縦位のヘラミガキ後、黒色処理が施されている。7・8は体部外面に墨書きされており、7は「臣」と判読出来る。8は破片



SD10·11·52~55標密表

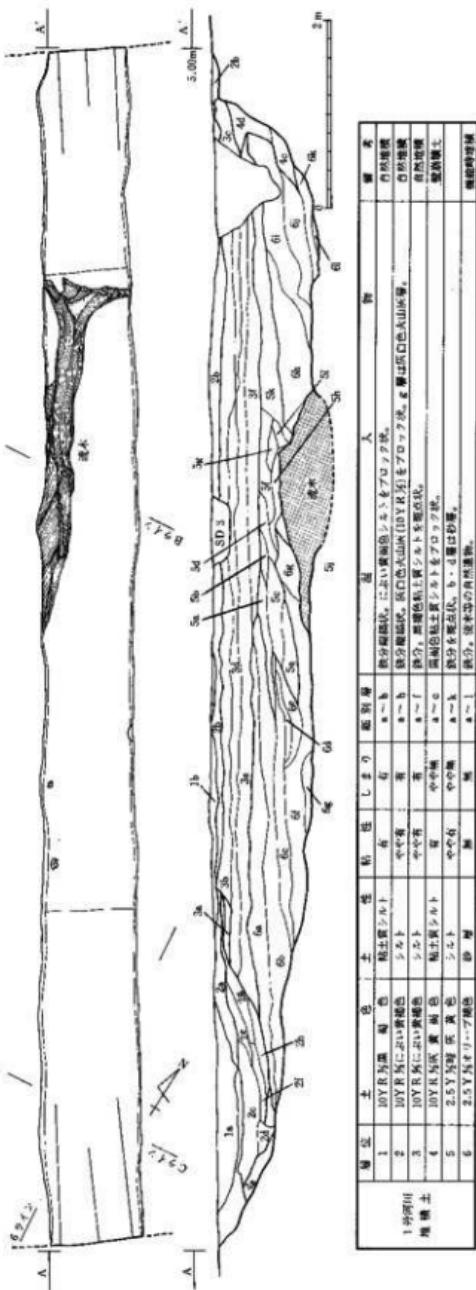
中SD 52-5545高麗山脈上壁上部(一)内坡底は切り込み斜面状。等高線									
通路名	地 区	地 球 坡 度	方 向	面 积	坡 底	上 坡	下 坡	左 坡	右 坡
SD 10	E-24	僅 墓 上	N=60°-W=70°	行 40	約30	5~10	N W-S-E	—	無
SD 11	F-13	僅 墓 上	N=30°-W=40°	行 40	約25	5~10	—	—	無
SD 12	B-15~16~18~19~20	僅 E 海 壁 上	N=60°-E=75°	少々 島 壁 上	20~40	約15	約5	W~15~16~17~18~19~20	S D M 多 種 存 在
SD 13	B-19~20	僅 E 海 壁 上	N=75°	—	約25	約15	約5	—	S D M 多 種 存 在
SD 14	A-19~20~20~21	僅 E 海 壁 上	N=75°~W=60°	行 40~45	5~20	5~10	W=0~6~12~18~24	—	無
SD 15	A-21	僅 E 海 壁 上	N=60°~W=70°	行 50	約20	5~30	N W-S-E	—	無

第31圖 SD51平面圖：斷面圖

の為、判読不明である（写真図版17-1～2）。2は口縁部内外面に黒色の付着物が認められる。形態を観ると体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（2・3・7）、丸味をもって内湾するもの（1・4・6・8）に分られる。第33図8～10は巻の口縁部から体部上半にかけての資料である。8は口縁部が折り返し口縁となっている。9は口頭部が「く」の字状に外傾し、口縁端部は上方に直立する。10は頭部でくびれ、短い口縁部を形成し、外面クロ調整、内面横構のヘラミガキが施されている。第34図9も破片資料であるが、体部上半から口縁部まで直線的で、口縁部と頭部の境が明瞭でなく、形状が筒状であることから第10図12、第20図14と同様、瓶である可能性が考えられる。

赤焼土器(第35図1)：堆積土上部から底面まで出土している。総数17点で全て破片資料である。1は底部片で、底部回転系切り無調整である。体部内外面とも無調整である。

須恵器（第35図2～13、36図）：堆積土上層から底面まで出土している。第35図2～10は環で、この内4、7は完形に近い。2～7は底部切り離し技法は、回転糸切りである。8は底部切り離しが回転ヘラ切り、9は底部切り離しが不明で手持ちヘラケ



第32图 1号河川踏平面图·断面图

ズリである。また体部から口縁部までの形態で分けられ、7～9は、直線的に外傾し、器厚がやや厚い。2～6は、体部から口縁部にかけて丸味をもって内湾し、器厚は薄手である。3・6・9には墨書が認められる（写真図版17—3～5）。9は底部外面に一字で「人」と墨書きされ、3・6は、体部外面に墨痕が認められるが破片のため判読不明である。10は高台環の高台部破片で、高台部は「ハ」字状に開く。第35図11～13は体部下半から底部にかけての壺で、底部は、貼り付け高台である。11・12は外面ともロクロ調整、13は外面一部ナア、内面ヘラナデ調整である。第36図の1は体部がほぼ球形状に丸味があり、形態から瓶子の可能性がある。外面ともロクロ調整である。第36図2～8は甕の破片である。2は口縁部から体部上半にかけての資料で、頸部で大きくくびれ口縁が「く」字状に外反する。外面ロクロのち平行叩目が施されている。3～7は体部資料である。外面調整は、全て平行叩目で、7は平行叩目のちヘラナデ調整が加えられている。内面は3にはカキ目調整が、4には同心円文押え目、5には平行押え目、6・7にはナデ調整が施されている。8は体部下半から底部にかけての資料である。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。

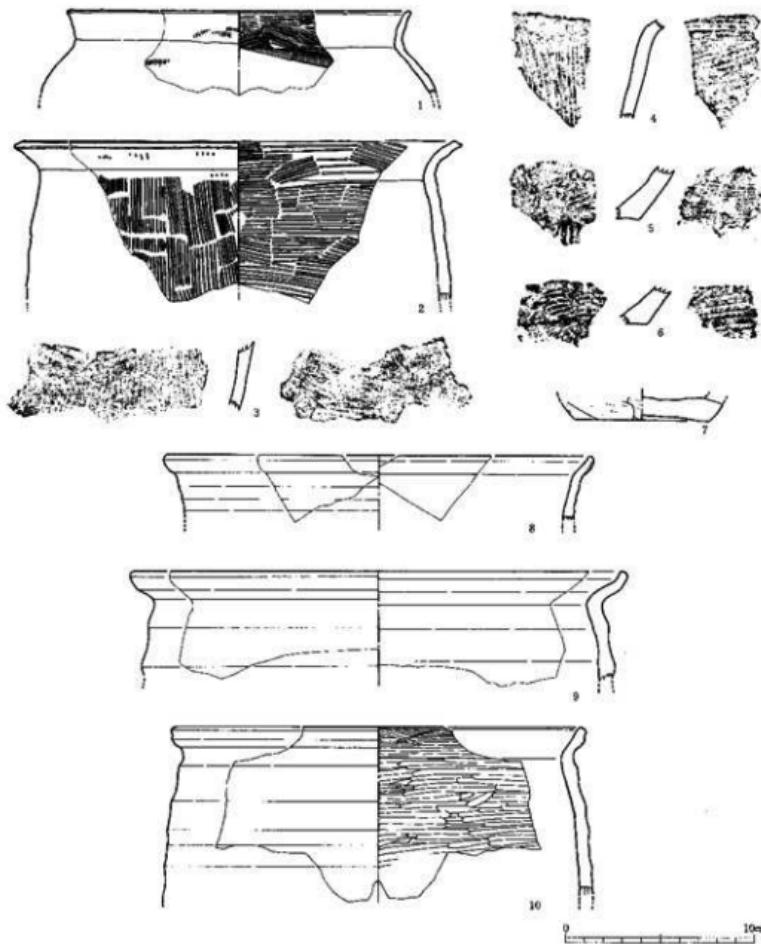
瓦（第37図1）：堆積土3層より平瓦の細片が1点出土している。凸面は繩叩き目、凹面は布目、一部スリケシが施されている。調整等から古代瓦である。

土製品（第37図2）：堆積土2層より土錘が1点出土している。中央部がやや膨む、円筒形状を呈している。長さ3.8cm、直径0.9～1.4cm、ほぼ中央に0.3cm前後の貫通孔を持つ。

石製品（第37図3）：堆積土1層より砥石が1点出土している。表裏側面とも擦痕が認められる。石質は福島県相馬市付近で産出される砂岩に類似している。

木製品（第37図4）：1号河川底面上で、直径30cm前後、長さ3mの流木とともに木製品が1点出土している。孔板状の曲物の蓋か底板と考えられる。直径19.5cm程の円形を呈し、周縁部に2孔一対の穿孔が4ヶ所見られる。穿孔は3mm程度ほぼ円形で、その孔に幅3mm前後の紐が通っている。紐は、桜の木の外皮と思われる。表面は丁寧にケズリが施され、内面は、一部ケズリの他、粗ケズリが施されている。

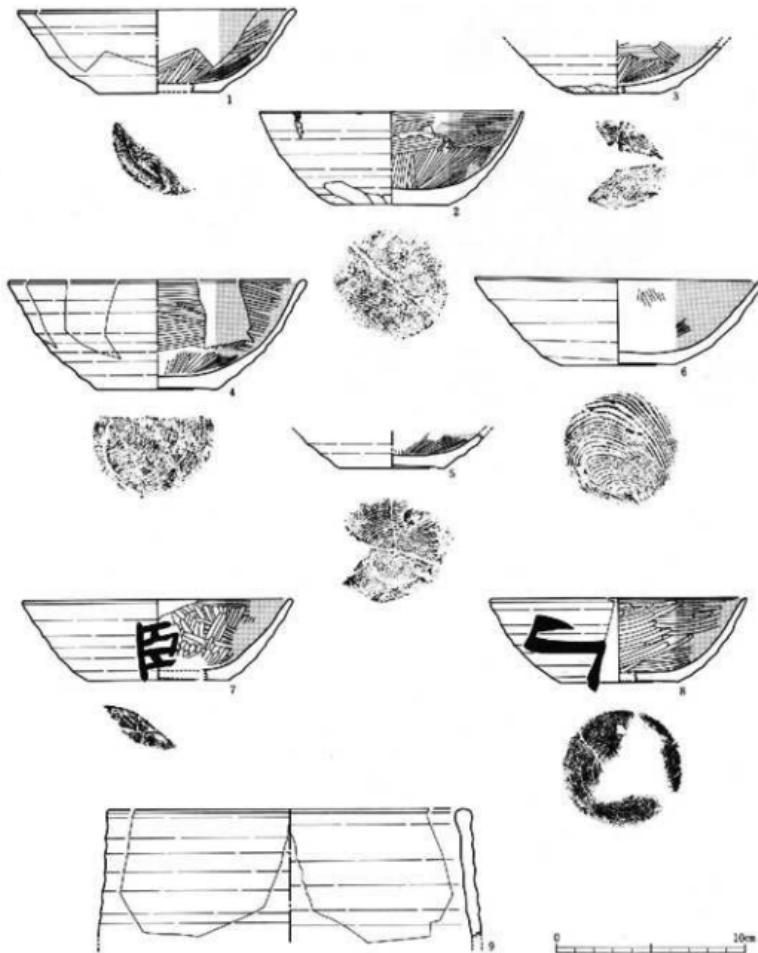
以上出土遺物の内、所属時期が明確で、しかも最も新しいものと考えられるものは、ロクロ使用の土師器で、これらは土師器編年の表杉ノ入期に比定される。



( )内数値は復元数値

番号	グリッド	東	西	層位	分類	種類	測				復元 量	復元 率	%真跡
							外 面	内 面	壁 面	口 径			
1	Ⅲ 区	1号河川	堆6	C-15	土器	壺	ハケメ→ヨコナゲ	ハケメ		(18.4)	—	—	13-7
2	Ⅲ 区	1号河川	堆6	C-26	土器	壺	ハケメ→ヨコナゲ	ハケメ		(23.8)	—	—	13-6
3	Ⅲ 区	1号河川	堆3	C-48	土器	壺	ハケメ	ハケメ		—	—	—	13-10
4	Ⅲ 区	1号河川	堆1	C-44	土器	壺	ヨコナゲ→ハケメ	ハケメ		—	—	—	13-11
5	Ⅲ 区	1号河川	堆3	C-24	土器	壺	全体ハケメ、底部不明	ハケメ		—	—	—	13-14
6	Ⅲ 区	1号河川	堆1	C-69	土器	壺	全体ハケメ、底部不明	ハケメ		—	—	—	—
7	Ⅲ 区	1号河川	堆1	C-12	土器	壺	全体ハケメ、底部素状底	ミガキ		—	—	7.2	—
8	Ⅲ 区	1号河川	堆2	D-12	土器	壺	ロクロ	ロクロ		(23.0)	—	—	—
9	Ⅲ 区	1号河川	堆2	D-34	土器	壺	ロクロ	ロクロ		(26.6)	—	—	14-6
10	Ⅲ 区	1号河川	堆3	D-15	土器	壺	ロクロ	ミガキ		(22.2)	—	—	—

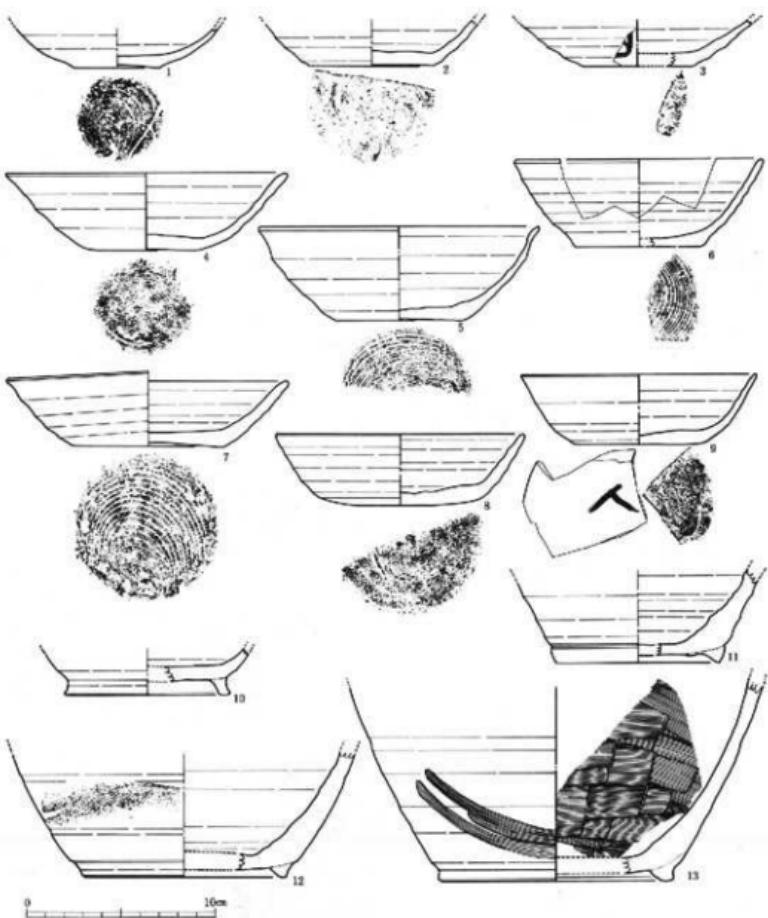
第33図 1号河川跡出土遺物(土師器1)



※( )内数字は復元数値

番号	グリッド	遺構	層位	箇 跡 番 号	種 類	種 類	調		型	法 量 cm	写真 図版
							外 面	内 面			
1	II 区	1号河床	地3	D-6	土 師	环	体部ロクロ、底部回転糸切り	ミガキ→黒色処理	(14.8)	4.5	( 6.4)
2	II 区	1号河床	地3	D-13	土 師	环	体部ロクロ、底部切り離し不明一手跡もヘラケズリ	ミガキ→黒色処理	14.1	5.0	6.0
3	II 区	1号河床	地3	D-5	土 師	环	体部ロクロ→手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	ミガキ→黒色処理	—	—	6.4
4	II 区	1号河床	地3	D-16	土 師	环	体部ロクロ、底部回転糸切り	ミガキ→黒色処理	(15.5)	5.9	6.4
5	II 区	1号河床	地2	D-17	土 師	环	体部ロクロ、底部回転糸切り	ミガキ→黒色処理	—	—	5.6
6	II 区	1号河床	地5	D-7	土 師	环	体部ロクロ、底部回転糸切り	ミガキ→黒色処理	15.4	4.8	6.0
7	II 区	1号河床	地5	D-10	土 師	环	体部ロクロ、底部回転糸切り	ミガキ→黒色処理	(14.3)	4.3	( 7.6)
8	II 区	1号河床	地6	D-11	土 師	环	体部ロクロ→手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラ切り	ミガキ→黒色処理	15.6	4.5	6.4
9	II 区	1号河床	地2	D-9	土 師	直?	ロクロ	ロクロ	(19.4)	—	—

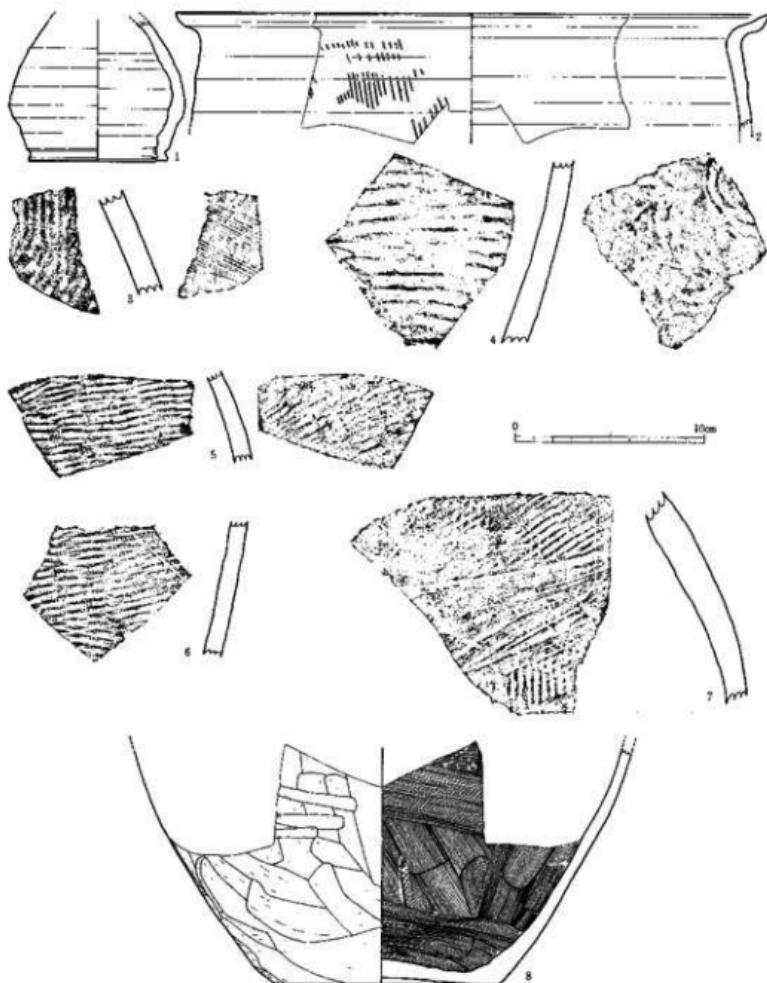
第34図 1号河川跡出土遺物(土師器 2)



※( )内数値は復元数据

番号	グリッド	遺構	層位	登録番号	種類	特徴	測定			法化年	写真
							外	内	口		
1	II 区	1号河川	堆1	Q-1	赤陶土器	环	体部ロクロ、底部同経条切り	ロクロ	—	—	4.6 15-1
2	II 区	1号河川	地6	E-11	須恵器	环	体部ロクロ、底部同経条切り	ロクロ	—	—	6.6 —
3	II 区	1号河川	地2	E-21	須恵器	环	体部ロクロ、底部同経条切り	ロクロ	—	( 5.8 )	17-3
4	II 区	1号河川	地6	E-18	須恵器	环	体部ロクロ、底部同経条切り	ロクロ	15.0	4.2	5.4 15-2
5	II 区	1号河川	堆2	E-20	須恵器	环	体部ロクロ、底部同経条切り	ロクロ	( 15.0 )	5.0	6.8 15-4
6	II 区	1号河川	堆6	E-13	須恵器	环	体部ロクロ、底部同経条切り	ロクロ	( 13.3 )	4.7	( 6.8 ) 17-5
7	II 区	1号河川	堆6	E-17	須恵器	环	体部ロクロ、底部同経条切り	ロクロ	15.0	4.0	8.0 15-3
8	II 区	1号河川	地5	E-12	須恵器	环	体部ロクロ、底部同経条切り	ロクロ	( 13.3 )	3.8	8.6 15-2
9	II 区	1号河川	地5	E-14	須恵器	环	体部ロクロ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロ	( 12.5 )	3.7	( 6.7 ) 17-3
10	II 区	1号河川	地6	E-19	須恵器	高台付环	体部ロクロ、底部不明	ロクロ	—	—	8.8 —
11	II 区	1号河川	堆1	E-22	須恵器	高台付环	体部ロクロ、底部不明	ロクロ	—	—	( 8.8 ) 15-9
12	II 区	1号河川	堆1	E-15	須恵器	高台付环	体部ロクロ(而角)、底部同経ヘラケズリ	ロクロ	—	—	( 10.8 ) 15-8
13	II 区	1号河川	堆3	E-8	須恵器	高台付环	体部ロクロ(而角)、底部不明	ハラナダ	—	—	( 12.5 )

第35図 1号河川跡出土遺物(赤焼土器・須恵器1)



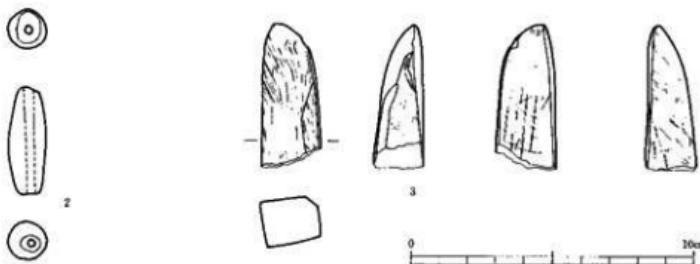
(内数値は復元数値)

番号	グリッド	遺 墓	層位	登録分	種類	規 格	測 定			法 量	重 量	写真図版
							外 面	内 面	口 径			
1	E 区	1号河川	堆2	E-28	須 恵 器	瓶子?	全体クロコ、底部不明	ロクロ	—	—	(7.4)	—
2	E 区	1号河川	堆3	E-10	須 恵 器	瓶	ロクロ→平行印経	ロクロ	(31.6)	—	—	16-1
3	E 区	1号河川	堆1	E-48	須 恵 器	甕	平行印経	カキ目	—	—	—	—
4	E 区	1号河川	堆1	E-46	須 恵 器	甕	平行印経	四心印文神えび	—	—	—	16-6
5	E 区	1号河川	堆2	E-25	須 恵 器	甕	平行印経	平行神えび	—	—	—	—
6	E 区	1号河川	堆1	E-47	須 恵 器	甕	平行印経	ナ ナ	—	—	—	16-5
7	E 区	1号河川	堆3	E-45	須 恵 器	甕	平行印経→ヘラナギ	ナ ナ	—	—	—	16-6
8	E 区	1号河川	堆6	E-16	須 恵 器	甕	全体ヘラナギ	ヘラナギ	—	—	12.4	16-8

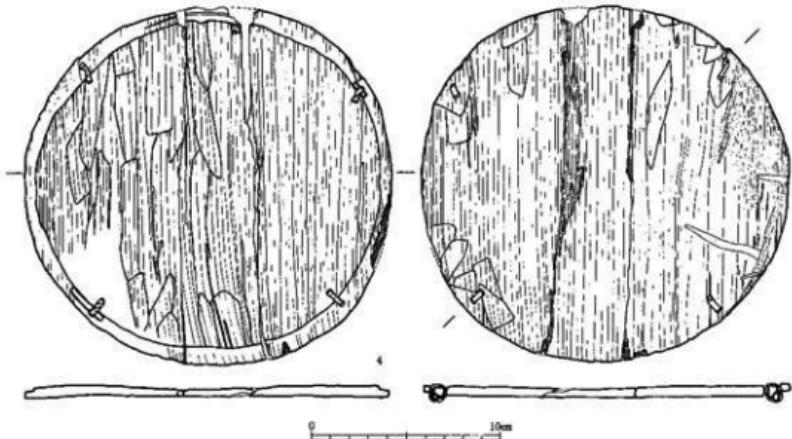
第36図 1号河川跡出土遺物(須恵器2)



番号	グリッド	遺 墓	層 位	登録番号	種 種	量			写真図版
						西	東	南	
1	II 区	1号河川	地 1	G-17	平 瓦	無印	各日→ナゲ	20-2	



番号	グリッド	遺 墓	層 位	登録番号	種 種	量			石 材	備 考	写真図版	
						西	東	南				
2	II 区	1号河川	地 2	P-7	土 罐	3.8	—	1.3	0.25	5.0	—	20-6
3	II 区	1号河川	地 1	K-17	瓦 G	1.6	2.1	—	—	—	BP 石 全面に擦痕	20-12



番号	グリッド	遺 墓	層 位	登録番号	種 種	木 取 り	量			考	写真図版
							西	東	南		
4	II 区	1号河川	底 面	L-1	木 物	板	目	—	—	直径約19.5cm、厚さ 0.5cm。裏or底。表面丁寧な調査。内面曳い削り。穿孔4ヶ所。穿孔には桿の木の外皮?による擦が通る。	20-2

第37図 1号河川跡出土遺物(瓦・土製品・石製品・木製品)

## 第IV章 その他の出土遺物

基本層位Ⅰ層からⅣ層より出土した遺物である。全て破片資料である。この内Ⅱ層の出土量は比較的多かったが、Ⅲ層水田跡の出土量には及ばない。特にⅥ層以下は、わずか9点しか遺物を出土しなかった。

### 1. 基本層位Ⅰ層

基本層位Ⅰ層は、現水田耕作土で、出土遺物は、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、金属製品等でほとんどが細片が多く、時期を觀ると平安時代から現代のものまで出土している。以下各種別に記述していく。

**土師器**（第38図3～5）：製作の際にロクロ未使用とロクロ使用に分けられる。3～5はロクロ未使用で、4は甕の頸部片で内外面ハケメ調整、3は口縁部片で外面ハケメ、ヨコナデ調整、5は外面ヘラケズリ、内面ハケメ調整である。ロクロ使用のものは細片が多く、図化しえない。

**須恵器**（第38図9・10）：ほとんどが細片である。9は壺で、底部切り離し技法が回転糸切りである。10は甕の頸部片で、4条の波状沈線とそれを区画する1条の沈線を巡らしている。

**陶磁器**（第38図13・17、39図3・4・7・8）全て破片資料の上、細片が多く、図化したのは6点である。13は擂鉢の体部片で、内面に2mm間隔で横目を施している。17は陶器の甕の口縁部片で、頸部から口縁部にかけて短く外傾し、頸部に沈線を巡らしている。産地は不明である。3は白磁の茶碗で、色調は明青灰色を施している。中国産のものと思われる。4は、平面形がひし形を呈し、幅3.4cmの高台付で、内外面とも施釉され、内面に草文が染付されている。産地は伊万里焼である。7は高台付の体部下端から底部にかけての破片で、ケズリ出し高台である。外面体部下端に染付の一部が認められる。8は高台付の皿か鉢の破片で、外面に3本の同心円が染付されている。産地は伊万里焼のものと思われる。

**瓦**：瓦は合計4点出土している。ほとんど近世瓦で、細片の為、図化しえなかった。

**金属製品**（第39図4～7・9～13）：古錢が9点出土している。その内訳は、いずれも日本銭の寛永通寶である。素材には、銅（4～7・9・10・12）と鉄（11・13）のものがある。初鑄年は、最も古いものが寛永14年（4・5）、最も新しいものが明治2年（11）である。

### 2. 基本層位Ⅱ層

基本層位Ⅱ層では、陶磁器片を中心として、土師器、須恵器、瓦、土製品、石製品、金属製品等の細片を出土している。出土遺物の所属年代等よりこの層の形成時期は近世後半頃であると思われる。

**土師器**（第38図1・6～8）：製作の際にロクロ未使用とロクロ使用に分けられる。1はロクロ未使用のもので高壺の脚部片である。脚部外面は、手持ちヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。6～8はロクロ使用のものである。6・7は壺の破片である。6は底部から口縁部にかけてやや丸味をもって立ち上り、底部の切り離し技法は、回転糸切りである。内面は黒色処理、ヘラミガキが施されている。8は口縁部から体部上半にかけての壺の破片で、頸部から口縁部にかけて「く」字状にくびれ、口縫部で垂直に立ち上がる。内外面ともロクロ調整である。一部古墳時代の破片が含まれるが、大半は平安時代の遺物と思われる。

**須恵器**（第37図11）：甕の体部片と思われ、外面斜格子叩目が施されている。

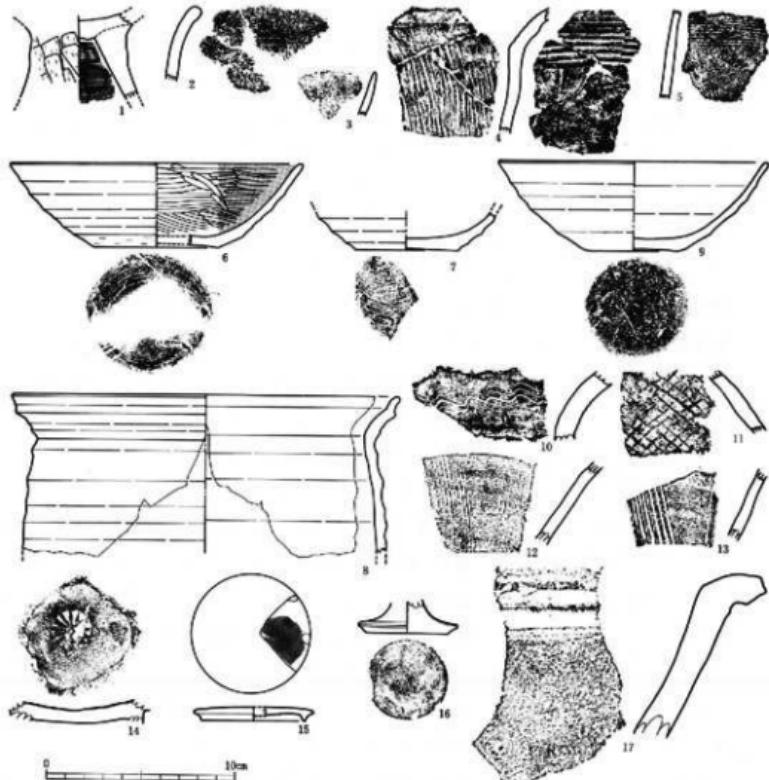
**陶磁器**（第38図12・14～16、39図1・2・5・6）：全て破片資料で、しかも細片が多く、同化したのは8点である。12は、楕円の体部片で3mm間隔の櫛目がある。産地は在地のものと思われる。14は、底部片で内面に花文が押印されている。高台は貼り付け高台である。産地は唐津焼と思われる。15は内面にカエリのある茶碗の蓋で、外尚天井部に花文が染付されている。16は、外面灰白色の釉が施釉され、買入がある。摘みの長い蓋の破片と思われる。内面には回転糸切り痕跡が認められる。産地は京焼か瀬戸焼と考えられる。1は碗で、外面に文様が染付されている。破片断面には、接着に使用された漆の付着が見られる。産地は伊万里焼と思われる。2も碗で、外面に鉄釉が施釉され、内面にオリーブ灰色の買入が認められる。産地は相馬焼と思われる。5は器形が不明であるが、黒褐色の鉄釉が施釉されている。6は皿の破片で内面に文様が施され、2ヶ所にトチソル跡が認められる。高台は、ケズリ出し高台である。産地は不明である。これらは全て、江戸時代（中頃以降）のものと思われる。

**瓦**：1点のみ出土しており、胎土等から近世瓦である。

**土製品**（第39図9～11）：9・10は、土錘で、9は長さ：最大径が約1.5：1のずんぐりした紡錘状を呈する。長さ3.0cm、直径1.4～2.1cm、ほぼ中央に直径0.3cmの貫通孔がある。10はやや中央で膨む、紡錘状を呈する。長さ4.3cm、直径0.7～1.1cm、ほぼ中央に直径0.3cmの貫通孔がある。いずれも軟く土師質である。11は不整球形を呈する土錘の破片である。上部に把手がつき、その部分に0.2cm前後の貫通孔があり、外面はナデ、内面はシボリ目が施されている。

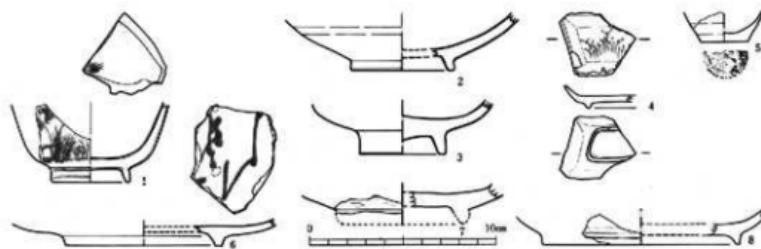
**石製品**（第39図12・13）：12は扁平な小円錐あるが、表裏面に擦痕が認められる。13は砥石の破片である。残存面（2面）には使用痕である擦痕が残る。

**金属製品**（第39図14、40図1～3・8）：古銭が4点と、馬のひづめの底に接着した蹄鉄が1点と鉄滓が2点出土している。古銭の内訳は中国銭の北宋銭が2枚（1、2）、明銭が1枚（3）、日本銭の寛永通寶（初鋳年寛文8年）が1枚（8）である。これらは全て銅製である。蹄鉄14は、幅1.8cm、厚さ0.4cmで、約半分を欠失する。蹄鉄の後方部には、0.5cmの孔が4ヶ所あり、そ

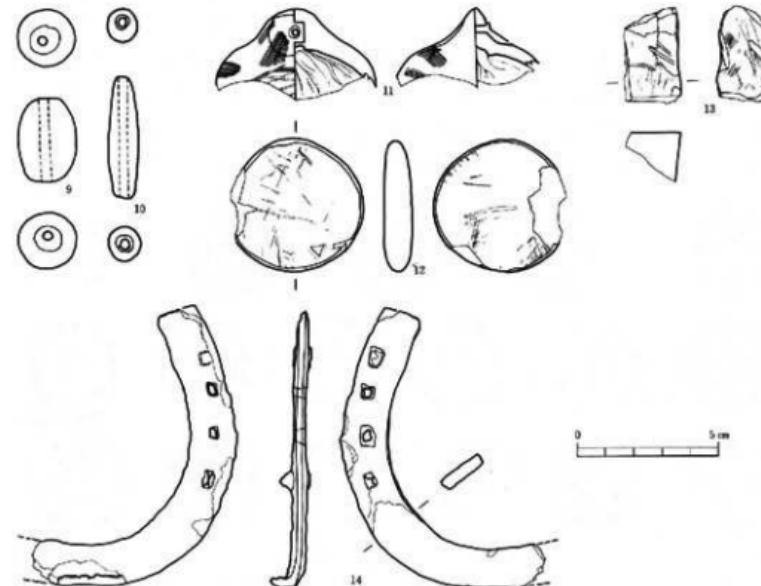


番号	グリッド	層位	登録番号	種類	測		量 cm				写真回数
					外	内	口径	高さ	底径		
1	II 区	II 層	C-1	上 鋼 瓶 直杯	ハラケズリ	ハラナデ	—	—	—	—	13-5
2	B-16	VII 層	C-68	土 鋼 瓶 備	ナダ	ハケメ	—	—	—	—	—
3	I-21	I 層	C-57	土 鋼 瓶	ハケメ→ヨコチテ	不 明	—	—	—	—	—
4	II 区	I 層	C-21	土 鋼 瓶 裏	ハケメ	ハケメ	—	—	—	—	13-9
5	II 区	I 層	C-58	土 鋼 瓶 裏	ハラケズリ	ハケメ	—	—	—	—	13-13
6	II 区	II 層	D-4	土 鋼 瓶 环	部底ロクロ、底部削除手切り	ミガキ→黒色処理	(15.4)	4.5	6.8	—	14-2
7	A-10	II 層	D-25	土 鋼 瓶 环	部底ロクロ、底部削除手切り	ミガキ	—	—	(5.6)	—	—
8	A-10	II 層	D-26	土 鋼 瓶 備	ロクロ	ロクロ	(20.8)	—	—	—	—
9	B-5	I 层	E-9	須 慈 瓶 环	部底ロクロ、底部削除手切り	ロクロ	(14.4)	4.8	4.8	—	—
10	A-16	I 层	E-1	須 慈 瓶 備	ロクロ	ロクロ	—	—	—	—	16-3
11	B-17	II 层	E-57	須 慈 瓶 備	椎子平目	同心円文押え目	—	—	—	—	—
番号	グリッド	層位	登録番号	種類	埋地	年代	地	縫	考	写真回数	
12	B-18	II 層	J-35	縫 地	—	—	—	—	—	—	—
13	C-21	I 层	J-35	縫 林	施點あり	陶土被覆、内面擦痕あり	—	—	—	—	—
14	E-F-16	II 层	J-32	縫 江津 江戸中綱	施點あり	陶土に3mm前後の白色粒子含む、内面擦痕あり	—	—	—	—	—
15	B-16	II 层	J-19	茶碗・直	(アイスホワイト3.0PB <sup>3</sup> %)	内面印花(白地5Y 1%)	18-15	—	—	—	—
16	E-IK	II 层	J-34	直 東?	江戸中綱	(アイスホワイト3.0PB <sup>3</sup> % 茶ねず10.0B <sup>3</sup> %)	19-10	—	—	—	—
17	E-IK	I 层	J-30	直	白地	外表面黄土に沈継	19-11	—	—	—	—
					口縁剥落下に沈継	—	—	—	—	—	18-2

第38図 基本層位出土遺物(土師器・須恵器・陶磁器Ⅰ)



番号	グリッド	層位	登錄番号	種形	地	年代	物	参考	写真図版
1	B-16	Ⅱ 層	J-21	瓶	伊万里	(明治末 5.8 年)	外腹鉢付(3.0PB <sup>3</sup> %), 瓶片断面に添付者	19-6	
2	C-14	Ⅱ 層上面	J-17	瓶	相馬	鉄錆(板錆赤褐色 2.5YR 色)	内面に質入	19-7	
3	Ⅱ 区	I 層	J-2	瓶	中国産	白釉(明治末 5.8 年)	—	19-2	
4	B-16	Ⅰ 層	J-1	伊万里		(アイスホワイト 3.0PB <sup>3</sup> %)	堅り、内外面に質入。内腹鉢付(ストレートブリーフ 3.0PB <sup>3</sup> %)	19-5	
5	B-16	Ⅱ 層上面	J-33			鉄錆(板錆赤褐色 5YR 色)	—	—	
6	A-12	Ⅱ 層上面	J-18	瓶	江戸中期	(灰白 7.5Y 色)	内外面に質入。内腹鉢付(灰オリエーブ 2.5GY 色), 内面2ヶ所チタン錆	19-4	
7	E-17	I 层	J-15			(オーリーブ 2.5GY 色)	外腹鉢付	—	
8	E-F-10	I 层	J-36	瓶 or 鋼	伊万里	(アイスホワイト 3.0PB <sup>3</sup> %)	外腹鉢付(透 3.0PB <sup>3</sup> %), ストレートブリーフ 4.0G <sup>4</sup> %)	19-8	



番号	グリッド	層位	登錄番号	種類	法 長 さ (cm)	幅 さ (cm)	重 量 (g)	石 材 材 質	備 考	写真図版
9	A-19	Ⅱ 層上面	P-1	土 筒	3.0	2.1	—	—	—	20-8
10	A-11	Ⅱ 層	P-4	土 筒	4.3	1.1	—	5.1	—	20-5
11	A-B-20	Ⅱ 層下面	P-3	土 筒	—	—	—	—	外腹ナギ調整、ヘラ傷、内面シボリ目	20-4
12	A-14	Ⅱ 層下面	K-19	石製品	—	4.7	1.0	—	表裏兩面擦痕	—
13	A-14	Ⅱ 層下面	K-9	磁 石	—	2.0	—	—	磁性質颗粒沙泥	—
14	J-20	Ⅱ 層下面	N-11	鍾 鍋	10.0	1.7	0.4	—	外腹錆	—
										21-11

第39図 基本層位出土遺物(陶磁器 2・土製品・石製品・金属製品 1)

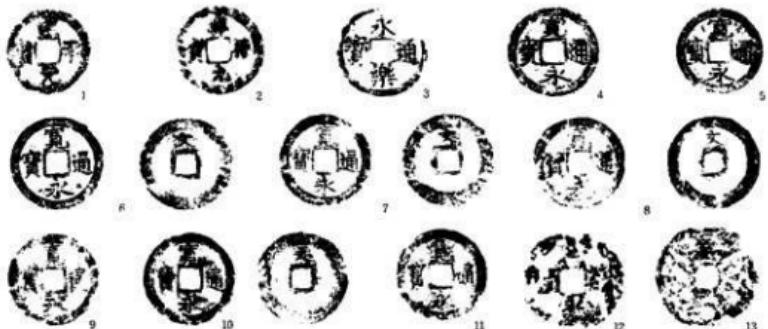
の内の1つには鉢が着装している。

### 3. 基本層位N~VI層

出土遺物は全て細片で、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。各層の内訳は、基本層位IV層より土師器片187点（内2点は非ロクロ）、須恵器片16点、基本層位Vより土師器片90点（内非ロクロ3点）、須恵器片5点、基本層位VI層より土師器片8点（内1点は非ロクロ）、基本層位Ⅳ層（M<sub>d</sub>層）より、弥生土器片が1点出土している。これらは細片の上、磨滅が著しく、図化されたものは、後述の土師器1点のみであった。

基本層位IV・V層はロクロ使用の土師器が多数出土したことより、形成時期を平安時代に位置づけられるが、資料上の点より、細別時期までは言及出来ない。基本層位VI層は、土師器が8点出土しており、その内の1点が非ロクロであったが、他の7点がかなり摩滅しており、ロクロか非ロクロ使用なのか不明であった。また基本層位Ⅳ層出土の弥生土器片1点（写真図版13-4）も、摩滅が激しかったが、土師器との胎土の違い、及び、Ⅲ層水田跡出土の弥生土器片（第10図1）と同一個体の可能性が高いことから、一応弥生土器とした。従って、基本層位出土遺物より、基本層位VI層、Ⅳ層の形成時期の判定材料を導き出すことは困難であった。

土師器（第38図2）：2は非ロクロの口頸部片ある。調整は外側がナデ、内側ハケメである。



図版38-2

番号	グリッド	層	ID	出土地点	種類	基盤	地	時代	初期 年 (西暦)	中期 年 (西暦)	後期 年 (西暦)	特徴	文様	開拓番号
1	E-17	II	1	N-33	古	鉢	底平	宋 宋	咸平元年 (998)			網	—	—
2	C-17	III層上面	2	N-39	古	鉢	底平	宋 宋	大中祥符元年 (1008)			網	—	—
3	A-11	II	3	N-34	古	鉢	底平	明 明	洪熙6年 (1456)			網	—	—
4	I	IV	4	N-26	古	鉢	底平	江戸 江戸	寛永14年 (1637)			網	仙台城堀内底頭文字	—
5	I	IV	5	N-28	古	鉢	底平	江戸 江戸	寛永14年 (1637)			網	舟之宮鏡面章	—
6	I	IV	6	N-27	古	鉢	底平	江戸 江戸	寛文16年 (1686)			網	正字文	—
7	I	IV	7	N-31	古	鉢	底平	江戸 江戸	寛文8年 (1668)			網	正字文	—
8	B-15	II層上面	8	N-32	古	鉢	底平	江戸 江戸	寛文8年 (1668)			網	正字文	—
9	I	IV	9	N-29	古	鉢	底平	江戸 江戸	寛文8年 (1668)			網	正字文	—
10	I	IV	10	N-30	古	鉢	底平	江戸 江戸	寛永4年 (1627)			網	江戸城内銅鏡面正字	—
11	A-11	II	11	N-37	古	鉢	底平	明 明	明治2年 (1869)			網	南陽城内正字	—
12	A-11	II	12	N-36	古	鉢	底平	明 明	—			網	寛永通寶か?	—
13	A-11	II	13	N-38	古	鉢	底平	明 明	—			網	寛永通寶か?	—

第40図 基本層位出土遺物(金属製品2)

## 第V章 考察とまとめ

### 1. 検出遺構の所属年代

#### (1) 水田跡

III層水田跡：作土・畦・水路（S D23）内出土遺物で、最も新しい資料は、室町時代に位置づけられる陶器片であった。また、下層のIV層上面検出遺構内（S D25を除く）及びIV層中からは、平安時代以前の遺物しか出土せず、上層のII層は、江戸時代中期から末期頃の遺物を中心とした、近世の時代の形成層である。以上、水田跡内出土遺物、これを狭む上下層とその検出遺構内出土遺物の点より、III層水田跡は、中世に位置づけられる。

S D25は、IV層上面で検出された溝跡である。堆積土中より中世陶器片を出土し、他のIV層上面検出遺構とは、時期的に区別される。<sup>註1)</sup> 第41図は S D25とIII層水田跡を合成したものである。水田3以西では、水田1～3の水田外部分をほぼ水田と等間隔に走行しており、水田4以東では畦Gの下を走行する（第7図3）。このように S D25は、出土遺物、走行性でIII層水田跡と強い親密性を持つことより、III層水田跡に伴った旧水路と考える。しかも、最終水田跡より1段階古い旧水路—S D23—に切られており、より古い段階のものである。従って、III層水田跡は水田経営期間内に少なくとも①S D25が取り付いた時期の水田→②S D23が取り付いた時期の水田→③調査区内に水路が取り付なかった時期の水田 という3段階の変遷があったと言える。II区のS D9（第15図）は、作土排土後の1号河川跡堆積土上面で検出された溝跡の1つである。この溝跡の走行方向は、II区の水田部分と水田外部分の境界線と一致し、S D25と規模、断面形態（C類）の面でも類似性が強く、S D9はS D25と同一のものである可能性が高い。また、上面検出のみのS D12も、その走行方向よりS D25との同一性が十分考えられる。

V層水田跡：出土遺物が稀薄で、所属時期を明確にし難い。水田外部分で弥生土器片らしきものが1点と、水路内より弥生時代の石歯に酷似した打製石斧<sup>註2)</sup>が1点出土しているが、これを持って弥生時代の水田跡と断定するには、余りにも時期決定遺物不足である。ただし、基本層位上層のV層中には、10世紀前半の降下とも考えられる灰白色火山灰が小ブロック状に含まれている。従って、当水田跡の所属時期は、V層堆積前、すなわち、平安時代中頃以前のいずれかの時期に位置づけられよう。また、同一検出面であるS D21、SK12も、後述するように、当水田跡に付随・関連する可能性がある遺構で、同一時期のものと考えたい。

#### (2) 小溝状遺構

V層下、VI層上面で検出された遺構である。堆積土は、V層中にVI層あるいはVI層が多量に小ブロック状に混じった单層であった。このことは、この遺構が、VI層上面より掘り込まれたものではなく、VI層上面から掘り込まれた結果と理解したい。従って、小溝状遺構は S D24遺跡

(IV層堆土後のV層上面検出遺構)と同一時期のものと言える。小溝状遺構、SD24からは時期決定遺物が得られず、その所属時期を明確に出来ない。しかし、V層の堆積時期及び上層IV層上面検出遺構の年代より、平安時代中頃から後半の時期が与えられる。

### (3) 溝跡

**V層上面**：出土遺物が平安時代中頃以後を中心とする平安時代以前のものであり、しかも、灰白色火山灰を含むV層より上層で検出されていることより、これらは全て平安時代後半に位置づけられる。SD27底面より検出のSD46も出土遺物の点より、当検出面と同時期のものであろう。しかし、これら溝跡にも、重複関係、走行性により新旧関係が認められる。すなわち、明確に溝跡と認定出来るものの内、最も古いものは、南北方向に走るSD28・29・30、次に東西方向に走るSD26・35・46、そして最も新しい東西方向に走るSD27の3時期である。

**1号河川跡堆積土上面**：IV層上面検出のSD27が、IV層の分布しないI区西側で、1号河川跡堆積土上面で検出された。また、出土遺物の上でも、当面検出のものとIV層上面検出のものには時期的差異が認められない。これらより、当面検出の多くは、IV層上面検出の溝跡と同時期のもので、その内の数条は、IV層上面検出のもの（東西方向の走行）と同一のものである考算が強い。

**Vc層上面**：5条（SD51～55）検出されたが、いずれも出土遺物がなく、所属時期に明確さを欠く。従って、V層水田跡と同様、平安時代中頃以前としか所属時期は与えられない。しかし、これらの溝跡は、調査区内では層位の検出状況に於いて、最も古い時代に属する。5条の溝跡中、重複関係、形態・規模の差異により、SD51が最も古い段階のものと考えられる。

### (4) 井戸跡

**SE1**：出土遺物が皆無であり、また、検出状況からも所属時期は不明である。ただし、検出地区が両水田跡の水田外部分であった点は興味を引く。

**SE2**：小溝状遺構を切っている点、出土遺物（堆積土上層のみ出土であるが）の点より、IV層上面検出溝跡とほぼ同時期—平安時代後半—と思われる。

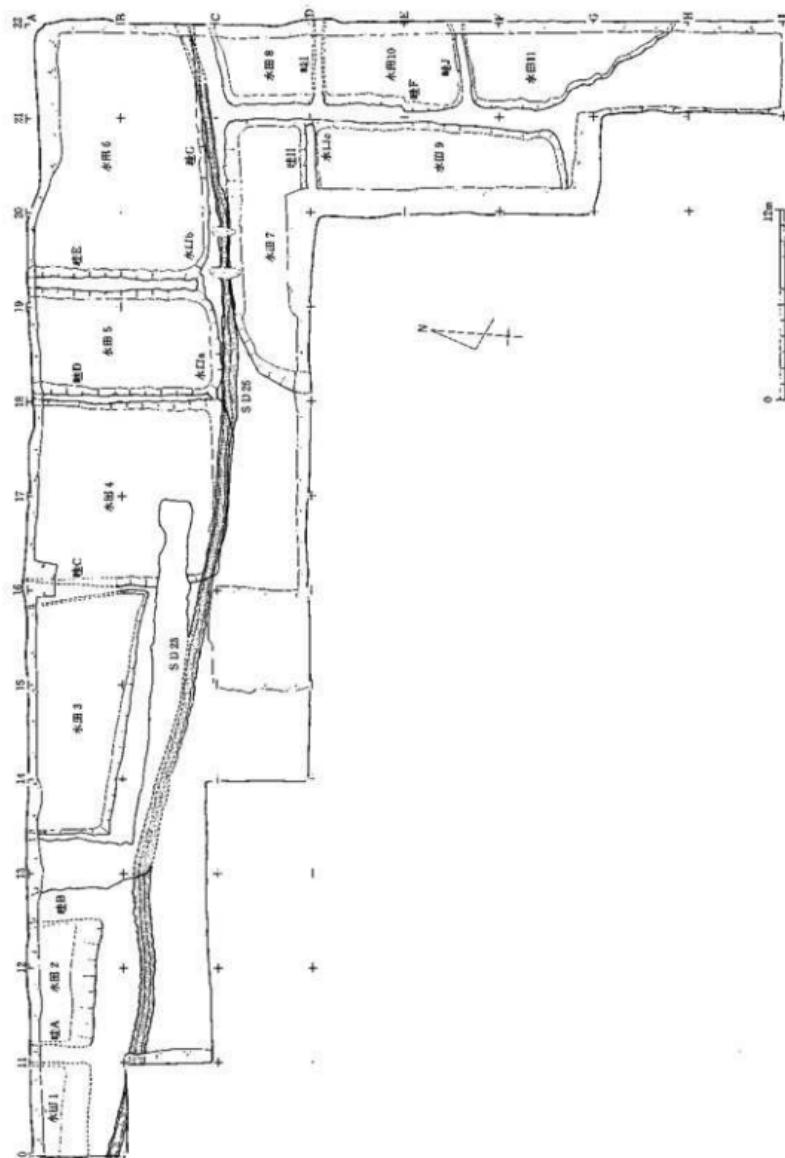
### (5) 河川跡

**1号河川跡**：この河川がいつ頃形成されたかは、基本層位に於ける切り込み層位が不明の為判らない。河川機能後の堆積土（2層）中に多量の灰白色火山灰層を含むことより、この河川が、平安時代中頃にほぼ埋っていたことが推察出来る。

### 註

1 この他、検出面より近世の切込焼を1点出土した。しかし、出土地点がI層あるいはII層下が直接IV層となるB-11グリッドであり、これは上層よりの混入遺物と考えられる。

2 当遺跡では打製石斧として分類したが、「天神沢遺跡」報文中では、これを打製石器IA類としている。



第41図 Ⅲ層水田跡+SD25平面図(Ⅰ区)

## 2. 水田跡・小溝状遺構について

### (1) Ⅲ層水田跡

当水田跡は、作土・畦底面検出の S D23・S D25の両水路の存在より、少なくとも経営期間の内、3回の変遷があったことが窺える。最終段階の水田枚数は12枚以上が確認されたが、これらが最初の段階より機能していたか、それとも水田経営期間の内で、枚数を増加させていったのかは、何とも言い難い。しかし、あえて可能性を上げるならば、次のようなことが言える。中間段階、すなわち S D23が用水路として取り付いていた時期には、この用水路の水口部は、検出状況より水田4の西側に位置していたと考える。この水口のある水田4は、東側の水田5・6と作土底面が同一レベルである。これに比べ水田4の西側(畦C以西)、南側(畦G以南)の水田作土底面は、6cmから8cm高くなっている。もし、当時の水田に対する耕作深度が同一のものとするなら、用水路より水田4に注ぎ込まれた水は、水田4の西側、南側の水田には行き渡らない。従って、S D23が用水路の機能を果していた時期には、水田4・5・6しか存在せず、その後になって、新たに西側、南側に水田が広げられ、それに伴い用水路も、水田面の高い場所に移されたということも考えられる。

当水田の畦方向は、I区では南北方向、東西方向から成る。しかし、II区では両方向とも西へ約50°傾き、調査区内で、畦方向を必ずしも同一方向に向けるという訳ではない。これは水田域の地形的制約に係るものなのか、他の要因に起因するものなのかについては、今回の調査対象区内より得られる資料では、その結論を導き出すことは不可能であった。ただ、調査担当者としては、広大な水田域に畦が整然と並ぶという状況よりは、狭い水田域の形状に合わせ、畦の方向が定められているという状況をより強く感じられずにはいられない。

### (2) 小溝状遺構

幅30cm前後の小溝が、1.5m前後の間隔を置いて平行に幾条にも走り、内にはこれと直行するものも認められる遺構である。このような遺構は、仙台市西部の六反田遺跡<sup>井上1)</sup>、山口遺跡<sup>井上2)</sup>、下ノ内浦遺跡<sup>井上3)</sup>等で検出されている。六反田遺跡の報告書では、この遺構が烟跡の可能性があることを指摘している。仮に当遺跡のものも烟跡であったとするならば、V層自体が烟の耕作土であり、V層下に及んでいる小溝は、作土下に伸びる作物の為に深く掘り下げた部分であろう。小溝の堆積土が、V層を基本とし、それに下層のブロックを多量に含む点、断面形が安定せず、底面に不定形な小穴が多數認められる点は、烟跡の可能性をより強くする材量と言える。

S D24は、検出層位より小溝状遺構と同時期のものである。この溝跡は、小溝状遺構の南北

方向と同一方向に走行する。加えて、溝跡の周辺及び西側では、小溝状造構は検出されなかつた。これらは、S D24が小溝状造構に関連する溝、すなわち、畑の西側を画する溝という可能性もある。

### (3) Ⅲ層水田跡

当水田跡の所属時期は、出土遺物の点より明確さを欠く。B - 16グリッドでは、1枚の水田が $4 \times 4$ mの、ほぼ正方形であった。検出水田中には、長辺が10m近くある長方形のものもあったが、これは中央部を上層の造構に大きく切られており、ここに畦が取り付いた可能性がある。多くは水田一枚の規模・形状が、4m前後の1辺または長辺をもつ正方形、長方形を呈していたものと考える。Ⅲ層水田跡と比べると、形状はほぼ同様であるが、規模は著しく小さい。現在まで仙台市で検出された水田跡との比較では、富沢水田遺跡（鳥居原・中谷地地区）<sup>註5)</sup>の弥生時代のものと、水田一枚の形状・規模が似ている。ただし、これを持って弥生時代の水田跡と時代的類似性を求めるることは、種々の点で無理があろう。

畦の方向は、I区に於いてはⅢ層水田跡の畦方向とほぼ同一である。しかも水田域も多少狭まるが、ほぼ同一分布域を示す（12ライン以西には分布しない）。このような共通性は、当地域に於ける各時代の水田経営が、何らかの地形制約を受けていたとも理解理解出来る。

S D21とS K12は当水田跡と同一検出面の造構である。S D21は、水田外部分を北西—南東に走行する溝跡である。この走行域は、水田を意識しており、水田に関連する溝として機能していたことが推察される。S K12は、水路（S D41）が水田外に出た所に掘り込まれており、恐らくは水路に取り付いた施設の一つであったと思われる。しかし、検出状況より、当水田の最終経営段階では埋め戻されてしまったものと考える。

### 註

- 1 田中則和「六反田遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第34集 1981
- 2 田中則和「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集 1984
- 3 古岡豊平「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第69集 1984
- 4 この他に、このような小溝群は、天地返しの際等に作られる可能性もある。
- 5 齋野裕彦・荒井格「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ」仙台市文化財調査報告書第69集 1984

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器、土師器、赤焼土器、須恵器、陶磁器、瓦、土製品、金属製品、木製品等整理用小平箱30箱程度である。この中で特に土師器、須恵器が他の出土遺物より多く出土している。これらが出土している遺構では、1号河川跡、Ⅲ層水田跡からの出土量が多い。

#### (1) 1号河川跡出土の土師器・須恵器について

前述のように、Ⅱ区1号河川跡から土師器壺・甕・須恵器壺・甕等が多く出土した。その内の土師器壺・須恵器壺の底部及び体部外面には、墨書きされているものも認められた。墨書き土器には、「臣」、「人」と判読できるものがある。

堆積土から出土した土師器と須恵器の壺を概観してみると、土師器壺では、器形は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、あるいは丸味をもって立ち上がる。底部は、回転糸切り無調整、体部内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されているものが大半を占めている。中には極少数ではあるが、底部が再調整されているものがある。また、須恵器壺では、底部の切り離し技法を見ると、糸切りのち無調整、再調整のものが混在している。器形では、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものがほとんどである。

1号河川跡の堆積状況を見てみると、堆積土1層と堆積土3層の間に、厚さ10cm程のレンズ状に火山灰層（堆積土2層）が堆積している。この火山灰層は分層の結果、宮城県各地（岩沼以北）に見られる灰白色火山灰と同一のものと同定された。この灰白色火山灰の降下年代は、白鳥良一氏によって、陸奥国分寺の白土層と多賀城跡の灰白色火山灰層の同一性および出土遺物等の点より、10世紀前半頃という見解が出されている。この年代に基くならば、1号河川跡堆積土中の火山灰層も同様の年代に位置づけられると思われる。この点に着目し、1号河川跡堆積土2層（火山灰層）および、その上下層から出土する土師器・須恵器について、器形、調整等を比較したが、ほとんど大きな変化は認められなかった。従って、遺物の点では、火山灰層の上下で年代差を求めるることは困難であり、ほぼ一定の年代と思われることから、1号河川跡の出土遺物は、10世紀前後のものと思われる。

#### (2) 出土甕？について

全出土遺物の中で、器種が不明な遺物が3点含まれる。第42図1～3はいずれも体部上半から口縁部にかけての資料で、器形としては、甕か甌と思われる。これらは、いずれも体部から口縁部にかけて、ほぼ直立ぎみに立ち上がる器形を呈し、口縁部、体部の境は、明瞭ではなく、口縁部は、ほぼ平坦である。器面調整は、内外面ともロクロ調整である。また破片の為口縁径は推定で19cm～24cmの範囲と思われる。

県内の他の遺跡の出土遺物に類例を求めてみると、多賀城跡、上新田遺跡、安久東遺跡、家

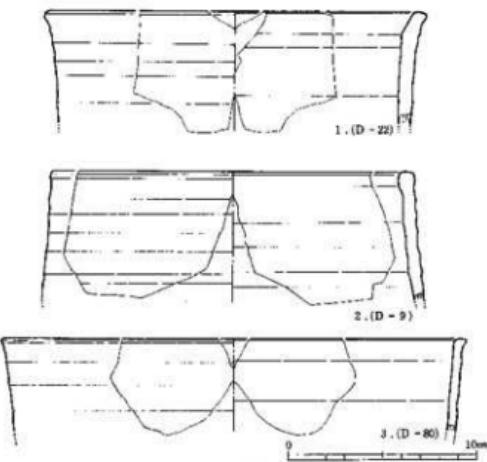
註3)

註4)

註5)

註6)  
老内遺跡が上げられる。  
多賀城跡では、多賀城出土土器の変遷のC群土器(S K981  
土壤出土)のもので、器形を  
非口クロ無底鉢状としている。

上新田遺跡2号住居跡出土の  
甌は、器形全体は明らかでは  
ないが、無底式のものであり、  
胴部から口縁部にかけて円筒  
状に連続している。安久東遺  
跡2号住居跡の甌は、胴部上  
半の破片で、胴部から屈曲な  
く口縁部へ至るもので、甌の  
可能性があることを指達して



第42図 出土甌

いる。家老内遺跡2号住居跡出土の筒形土器は、胴部から口縁部にかけて垂直に立ち上っている。

これらに、遺物の類似性を求めるることは出来るが、用途等について断定出来るものではなく、器形名称についても、筒形土器及び甌の可能性を指達するもの等、決定的な名称は与えられていない。このような資料的制約により、当遺跡出土のものも、現行では器種名称及び用途を明確に出来ない。今後、この種の良好な資料の増加に期待したい。

### 註

- 1 庄子貞雄・山田一郎「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡一昭和54年度発掘調査概報』 1980
- 2 白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要』 第1号 宮城県多賀城跡研究所 1980
- 3 同 上
- 4 小井川和夫「上新田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第78集 1981
- 5 土岐山武「安久東遺跡」 宮城県文化財調査報告書第72集 1980
- 6 真山悟「家老内遺跡」 宮城県文化財調査報告書第81集 1981

## 4.まとめ

### (1) 検出遺構

今回の後河原遺跡の調査では、時代の異なる水田跡2面（関連溝跡8条、土壙1基を含む）、小溝状造構1面（関連溝跡1条を含む）、溝跡25条、土壙1基、井戸跡2基、河川跡1本が検出された。時代別では、平安時代中頃以前のものが、溝跡5条、水田跡1面（関連溝跡4条、土壙1基を含む）、河川跡1本、平安時代後半のものが、小溝状造構1面、溝跡18条、井戸跡1基、中世のものが、水田跡1面（関連溝跡4条を含む）である。この他、時代が不明なものに溝跡2条、土壙1基、井戸跡1基がある。

### (2) 出土遺物

弥生時代から近代に至る、弥生土器、土師器（非ロクロとロクロ使用）、赤焼土器、須恵器、陶磁器、瓦、土製品、石器、石製品、金属製品、木製品、動植物遺体が出土した。ほとんどが破片資料で、出土量は小型の平箱で30箱程度である。この内、最も出土量が多かったのがロクロ使用の土師器片で、出土量の約5%を占める。ロクロ使用の土師器を灰白色火山灰層を境にし、その上下で比較を試みたが、資料的制約の為か変化は認められなかった。

### (3) 各時代に於ける遺構の変遷

**平安時代以前**：当調査区内に初めて遺構が残された時代であるが、その時代は限定出来ない。まず溝が1条作られ、その後、数条の溝が作られた。その次の段階になると、当調査区に初めて水田が営まれる。

**平安時代**：いつの時期に形成されたか不明であるが、調査区西側の小河川が、この時代の中頃まで流れていた。この小河川が埋った後、調査区東側には、畑とも考えられる小溝状造構がひろがる。その後、調査区内には、溝群と井戸が作られる。溝群はⅠ区では、当初南北方向に走行し、次の段階には東西方向へと変り、最終段階に於いてもこの方向性を踏襲する。

**中世**：この時代になると、調査区内には再び水田が作られる。この水田は、経営期間内に、SD25が取り付いた段階、次のSD23が取り付いた段階、最後にSD23を使用しなくなった段階の少なくとも3度の変化を遂げる。

**近世以後**：引き続き現代まで水田が作られていったことが、プラント・オパールの分析結果より得られている。水田は、時代が進むにつれて、水田面積が徐々に拡大し、現在のような調査対象区周辺を含む広大な水田地帯へと変貌して行ったものと考えられる。

以上のように、後河原遺跡に於ける今回の調査区内では、同一立地の内で時代の変遷と共に、溝群→水田→畑?→溝群→水田と、当地の利用方法が日々ぐるしく変化していった、複合遺跡であったことが窺える。しかし、中世以降から水田としての利用方法が定着し、この後も幾度かの断絶はあったものの、水田が営まれて行ったものと言える。

## 付章 諸 分 析

### 1. 仙台：後河原遺跡における水田址の探査

宮崎大学 藤原宏志  
大分短期大学 杉山真二  
佐々木一章

#### (1) はじめに

昭和57年10月、青森・垂柳遺跡で弥生時代中期の水田址が検出され、東北地方北部でこの時代に水田稲作が営なまれていたことが実証された。従来、東北地方北部における弥生稲作については伊東信雄氏等の先駆的な所論があったが、大勢としてこれを容認するには至っていなかった。東北地方北部における炭化米や稈痕土器の出土例だけではそれらが搬入可能な遺物である以上説得力に欠けるという見解によるものであった。この限りでは容認できないとする見方にも論理性が認められる。しかし、水田址という造構が検出されたことによって、この疑問は解決されることになった。

仙台平野では弥生時代中期の遺跡から石包丁、稈痕土器が出土しており、この時期に稲作が始まったと推定されている。石包丁は農具であり、同じ遺物であっても生産物である稈とは意味が違うという見方もある。しかし、それにもかかわらず、石包丁はやはり搬入可能な遺物であり、この地で稲作が行なわれた根拠にはなりえないとする論理も成り立つことになる。

水田址は造構であり、水田稲作の動かぬ証拠であると同時に、そこで営なまれた生産の状況をより具体的に示すとともに、その時代の稲作技術水準を知る上でより確かな情報を提供するものである。

最近、仙台・山口遺跡で平安時代の、富沢水田遺跡で平安時代・弥生時代の水田址が検出されたことは仙台平野における水田稲作史を解明する上で意義深いものと思われる。今後、仙台平野の中で時代と立地の異なる水田址発掘例が増えることにより、同平野における水田稲作技術の発展過程が体系的に把握されることになるであろう。

筆者等は数年来プラント・オパール分析により埋蔵水田址を分析的に探査する方法について検討を重ね島根：夫敷遺跡、青森：垂柳遺跡、福岡：板付北遺跡さらに仙台：富沢水田遺跡群などで、その有用性について見通しを得るに至った。

当該遺跡は仙台平野の東南部にあたる微高地の縁辺部に立地している。周辺には周知の遺跡も多く、比較的早い時期に拓かれた水田が埋蔵されている可能性があり、その分析的探査を試みた結果について報告する。

## (2) 試料および分析法

### [試料]

昭和58年4月26日および6月1日、6地点計57試料を試掘壁面から100cc採土管で採取した。

### [分析法]

プラント・オパール分析により埋蔵水田址を探査する最近の方法では調査域を5~10mメッシュで分割し各地点でボーリングを行なうことにより分析試料を採取する方法が採られる。この方法によると、調査域全体についての分析情報を得ることができるのでより正確な推定結果を出すことができる。

当該遺跡調査では試掘壁の壁面試料だけを分析したので水田址の面的広がりを推定するには至らなかった。

試料の分析はプラント・オパール定量分析法(ガラス・ビーズ法)(第43回)により行なった。

## (3) 分析結果

分析結果は第44~45図に示す。図表の見方は別紙に示した。

## (4) 察考および結論

1. 調査域の北部と南部の古環境は互いに大きく異なっている。すなわち、調査域の東北端に位置するA-21地点ではⅥ層より下層から多量のヨシが検出され、これらの上層が湿润な条件下で堆積したことを示している。これに対して南端に位置するE-13地点ではⅡ~Ⅳ層が欠落し(おそらく後代削平されたのであろう)Ⅴ層がⅠ層直下に現われる。Ⅴ層は厚いがA-21地点とは異なりヨシが全く認められず、逆にタケ亜科が増えている。これはE-13地点はⅤ層堆積時比較的乾燥した微高地状であったことを示すものである。

以上のことから調査域は北側に低湿地、南側に微高地を擁し、時代が新しくなるにつれ均平化が進んできた様子が伺える。

2. A-21地点およびA-16地点の分析結果をみると、イネ生産量の大きなピークはⅠa、ⅢaおよびⅤabの各層にあることがわかる。Ⅰa層は現在の水田である。Ⅲa層は中世の遺物を包含しており、その当時の水田とみられる。

Ⅴab層は平安時代以前の遺物包含層であるが時代は明らかにされていない。しかし、イネ機動細胞プラント・オパールの量からみて、この土層が水田址である可能性は極めて高い。また、Ⅲa層からⅤab層の間にいくつか小さなピークが認められるが、量的に少なく、間違からの流入堆積の可能性がある。もし、これらの小ピーク位置で水田址が検出されれば、その水田の利用された期間は短いものであったと推定される。

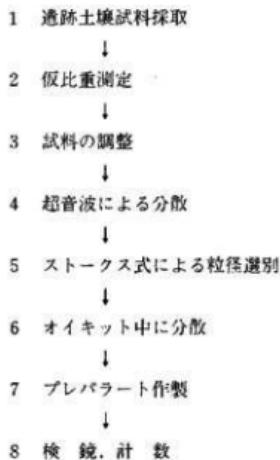
Ⅴab層はイネとともにヨシが多量に検出されることから、低湿地に招かれた地下水依存型の水田であったと考えられる。Ⅲa層ではヨシが認められず、逆にややタケ亜科が増えている。こ

の時期の水田は用水路に依存した表面水型（乾田）に移行していたものと思われる。

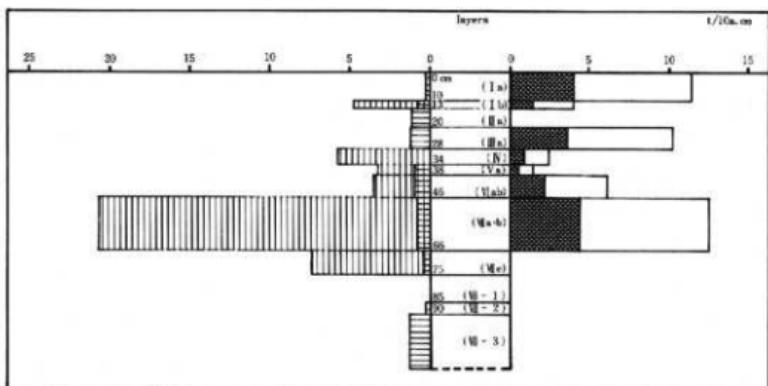
3. I区の南側、I-21地点、E-13地点は現水田におけるイネのピークが認められるだけで、その下層に水田が埋蔵されている微候は認められない。また、II区北壁、(2)-N地点ではIIIa層まで多量のイネが検出されるが、その下層は遺構の埋土で擾乱を受けている可能性があり、イネは全く検出されなかった。

#### 参考文献

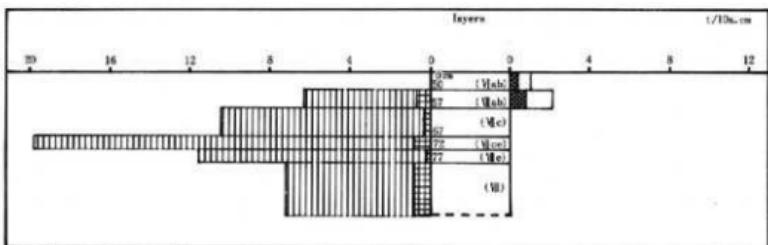
1. 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析による古代栽培植物の探索、考古学雑誌、62: 148-156.
2. 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究1-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法一、考古学と自然科学、9: 15-29.
3. 藤原宏志・佐々木章 (1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究2-イネ (*Oryza*) 植物における機動細胞珪酸体の形状-考古学と自然科学、11: 9-20.
4. 藤原宏志 (1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究3-福岡・板付遺跡（夜白式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (*O. sativa*, L.) 生産總量の推定一、考古学と自然科学、12: 29-41.
5. 藤原宏志 (1982) プラント・オパール分析法の基礎的研究4-熊本地方における純土質土に含まれるプランクト・オパールの検出、考古学と自然科学、14: 55-65.
6. 藤原宏志 (1984) プラント・オパール分析法とその応用-先史時代の水田址探査-考古学ジャーナル、227: 2-7.



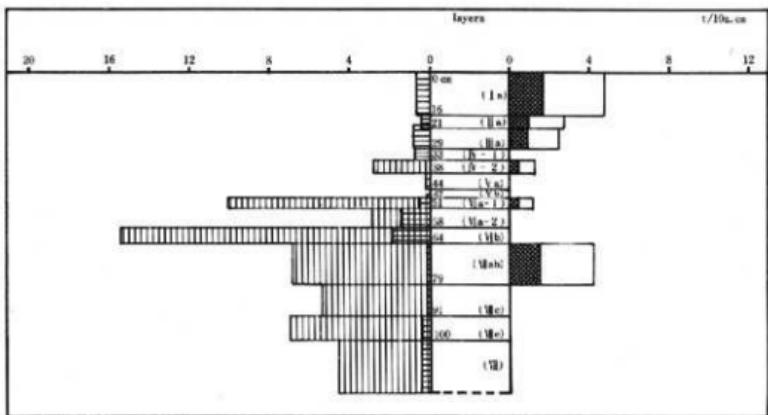
第43図 定量分析ダイアグラム



1. 後河原A-16 4 / 26 '83



2. 後河原A-16 6 / 1 '83



3. 後河原A-21 6 / 1 '83

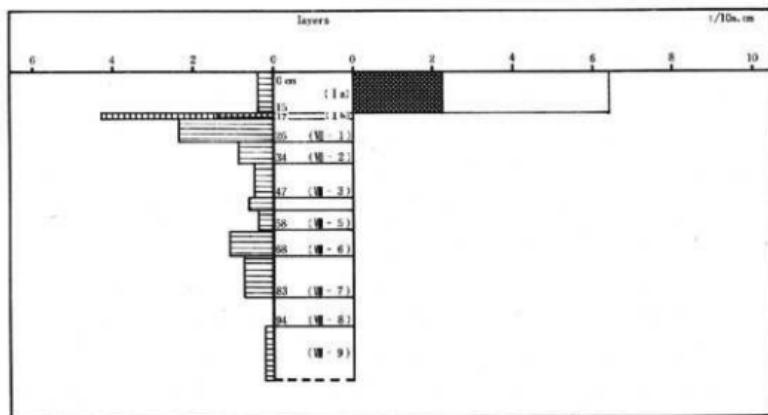
O.sati.

rice.g.

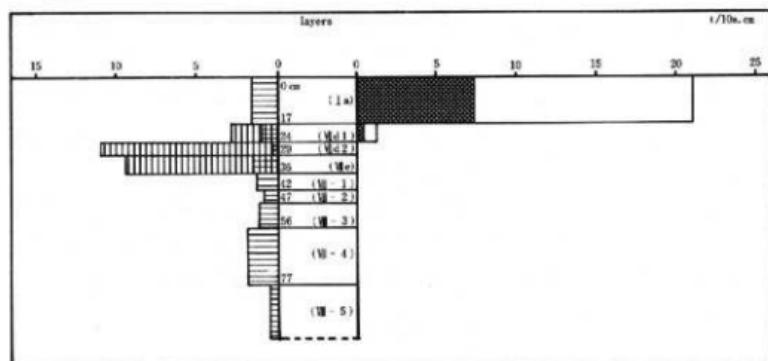
Phrag.

Bank.

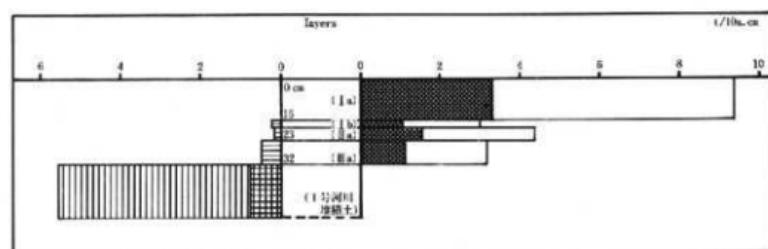
第44図 イネ科植物乾物生産量 1



1. 後河原E-13 4 / 25 '83



2. 後河原E-21 4 / 26 '83



3. 後河原E-21 6 / 1 '83



第45図 イネ科植物乾物生産量 2

### グラフの見方について

1. layers : 採取地点の土層模式図、( )内の数字は土層番号、左すみの小数字は表層からの深さをcmで表わしたもの。
  2. O.sati. : *Oryza sativa*. 裁培稻の地上部乾物重。
  - rice.g : *Oryza sativa* の穀果（穂）乾物重。
  - Phrag. : *Phragmites communis*. ヨシの地上部乾物重。
  - Bamb. : *Bambooaceae*. タケ亜科の地上部乾物重。
- 各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壤中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。
3. 土柱模式図の右側に栽培植物、同左側に野、雑草を示している。単位 t / 10a. cmはその土層の厚さ 1 cm、面積10a (1000m<sup>2</sup>) に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量をt (トン、 $1 \times 10^3$  kg) で表わしたものである。例えば、その土層が10cmの厚みであると、グラフで示された値に10を乗じた量の植物体がその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。
  4. 水田址が埋蔵されている土層ではO.sati.の値がピークを形成する場合が多い。土層の堆積状況により一概にいえないが、水田址の層位はこのピークと一致するのが通例である。
  5. Phrag. (ヨシ)、Bamb. (タケ) の乾物量変遷はその地点における土壤水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し、タケ (ササ) は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみると、その地点の乾湿変化を推定できる。
  6. 最下段は遺跡名、採取地点、採取年月日を示す。

## 2. 後河原水田遺跡土壤

東北大学農学部 庄子貞雄  
山田一郎

後河原遺跡は現世から平安時代以前の水田遺跡が累積している複合遺跡である。

土壤の断面調査はⅠ区A-16、Ⅰ区A-20、Ⅱ区1号河川跡の3箇所で行い、土壤分析は鉄の集積が最も明瞭に認められたⅠ区A-20試料について行った。

土壤の母材は、主に粒径組成からⅠ層～V層、VI層～VII層、VIII層に大きく3分できる。Ⅰ層～V層は粘土含量がほぼ20～30%で、VI層～VII層は42～43%と多く、この層は腐植含量も3～7%と高い。VIII層は細粒質の河川堆積物層と思われる。

Ⅰ層は近代から現代まで水田として利用されてきた層である。Ⅰ区A-16でみられるようにⅠ層のうち11～15cmのTb層はこれらの時代の水田の耕盤層である。この層は腐植含量が4.4%とやや高い。

Ⅱ層は近世の水田跡であり、母材はⅠ層と同様に比較的細粒の河川堆積物からなる。この層の腐植含量は2.9%とⅠ層と同様にやや高い。

Ⅲa層は中世の水田跡である。そして、その下位の層(35～38cm)は肉眼観察で明瞭な鉄の集積が認められ、室内実験でも遊離鉄含量は5.8%と高い値を示し、作土層(Ⅲa層)からの鉄の溶脱し、集積層(35～38cm)への鉄の移動集積をよし示している。このように鉄の移動集積が明瞭なのは、この層位が透水性が良い条件下にあったためである。これらの層はⅠ層、Ⅱ層に比べると腐植含量が1～2%と少い。

Ⅳ層は平安時代後半と考えられる層である。Vb層は断面中では最も粗粒な層であり、腐植含量も最も少ない層である。

VI層およびVII層はプラントオパールの分析から平安時代以前の水田跡と考えられる層である。この層は前述したようにその上位層よりも粘土含量が高く、腐植含量も高い層である。これらの層は断面の肉眼観察では不明であったが、室内分析から遊離鉄含量の高い層であることがわかる。しかし、この遊離鉄はこの層が上位のやや乾性の性質を示す層から湿性の性質の層への移行層であるので、下方の地下水中の鉄がこの面で酸化され沈殿した結果と思われる。

以上のことからみて、平安時代中頃以前には耕良の悪い湿田のグライ土壤下で水田耕作が営なされたのに対し、平安時代後半以後は、水はけの比較的に良い条件下で水田耕作が行なわれていたことがわかる。

一方、Ⅱ区1号河川跡の堆積土上面下、25cm～40cm部分には、10世紀前半の降下火山灰である灰白色火山灰が河川を埋めるように堆積している。

## 土 壤 の 性 質

I区A-20 北 燥

試料採取地点	深さ(cm)	土色	粒度組成(%)	保水性	培養供給(%)	培養供給(%)	地盤・結構	備考
Ia, a <sub>2</sub>	0-17	10YR 5/4	2 41 28	29	4.42	1.71	掌管(既耕あり)○	現代、近代の水田。
Ia	17-28	2.5Y 5/4	1 43 22	35	2.89	1.72	掌管(既耕あり)○	近世の水田。
IIa	28-35	2.5Y 5/4	3 46 23	28	4.30	0.98	掌管(既耕あり)○	中曽の水田。
Na	35-38	2.5Y 5/4	5 54 18	24	1.24	5.75	去菅状地質△○	
Va <sub>2</sub>	38-47	10Y R 5/4	3 48 20	28	1.84	1.37	掌管(既耕あり)○	
Vb	47-55	2.5Y 5/4	11 53 15	22	1.01	2.16	掌管(既耕あり)○	
Va+b	55-65	10Y R 5/4	2 26 31	42	3.06	4.10	掌管(既耕なし)○	平安時代以前の水田？
Va+b	65-75	10Y R 5/4	1> 16 41	43	6.36	3.46	掌管(既耕あり)○	平安時代中期以前の水田。
Vc+c	75-90	10Y R 5/4	1 18 38	43	5.09	3.46	掌管(既耕あり)○	
W	90+	5BG 5/4	1 31 29	39	1.86	1.22	掌管(既耕あり)○	

I区A-16 北 燥

試料採取地点	深さ(cm)	土色	粒度組成	備考	試料採取地点	深さ(cm)	土色	粒度組成	備考
Ia, a <sub>2</sub>	0-11	10Y R 5/4	掌管(既耕あり)○		1a	0-5	10Y R 5/4		
Ib	11-15	10Y R 5/4	マンガン斑点多。		2a	5-15	10Y R 5/4	掌管(既耕多)○	
IIa	15-24	10Y R 5/4	マンガン斑点多。		2e	15-25	10Y R 5/4	掌管(既耕あり)○	
IIIa	24-35	10Y R 5/4	掌耕较多。		2g	25-40	10Y R 5/4	灰白色火山灰。	
Va <sub>2</sub>	33-45	2.5Y 5/4	掌耕较多。		6a	40-55	10Y R 5/4		
Vb	45-58	2.5Y 5/4	掌耕较多。		6b	55+	10Y R 5/4		
Vb	48-52	10Y R 5/4	掌耕较多。						
Va+b	52-60	10Y R 5/4							
Vc	60-67	10Y R 5/4							
Vd	67-78	10Y R 5/4							
W	78+	5BG 5/4							

II区B-5 1号河川跡

### 3. 花粉分析

斎藤報恩会自然史博物館 竹内貞子

後河原遺跡のA-18およびA-20のそれぞれについて、Ia<sub>1</sub>層～Ⅲa層の14層準より試料を採取し、花粉分析をおこなった。

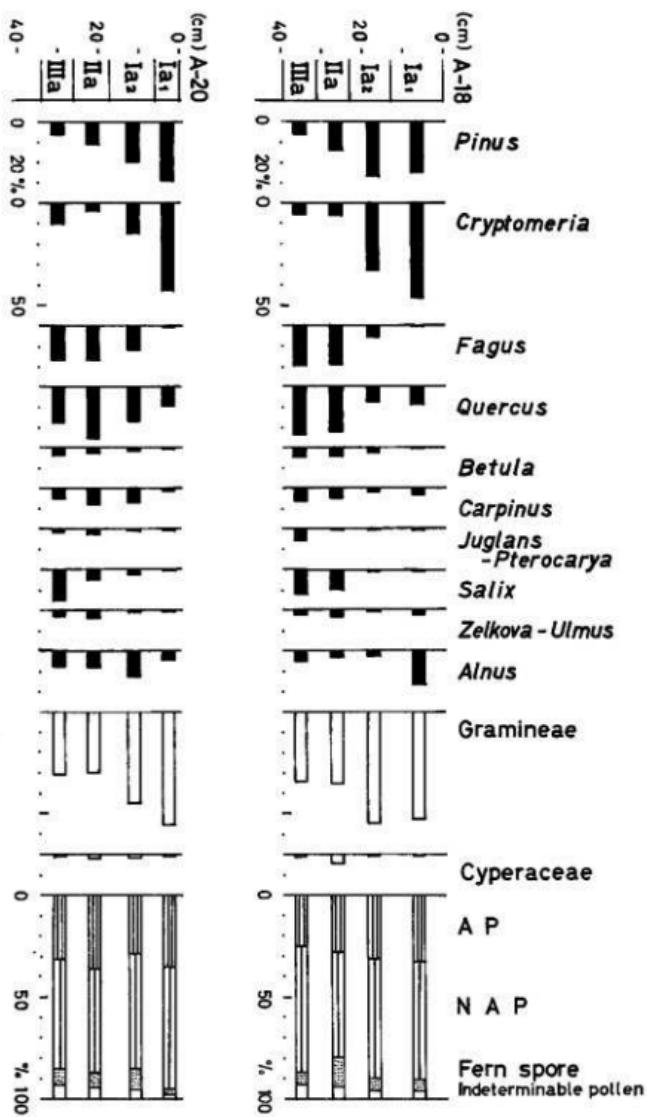
A-18、A-20ともにIa<sub>1</sub>層、Ia<sub>2</sub>層、IIa層、Ⅲa層の4層は花粉を豊富に産出するが、IVa層以下の10層の試料は絶対花粉量が少なく、シダ類の胞子および草本類の花粉がわずかづつ検出されたのみである。上位4層の分析結果のみを第46図および第5表に示す。樹木花粉(AP)については樹木花粉の総数を百分率の基数とし、草本花粉(NAP)および胞子については花粉および胞子の総数を百分率の基数としている。

A-18、A-20ともに4層準とも樹木花粉に比べて草本花粉の割合が多い。そして大まかにみてIa<sub>1</sub>層とIa<sub>2</sub>層、IIa層とⅢa層がそれぞれ類似の花粉組成を示している。前者はCryptomeria, Pinusで特徴づけられ、後者はQuercusとFagusで特徴づけられる。

A-18についてみると、4層最下位のⅢa層は樹木花粉ではQuercus, Fagus, Salixが多く、Cryptomeria, Pinus, Carpinus, Betula, Alnusなどがこれに次いでいる。草本類の花粉ではGramineaeが多くArtemisia, Nymphaeaceaeもかなり出現している。IIa層もⅢa層とほぼ類似の花粉組成を示し、Quercus, Fagusが優勢でPinus, Cryptomeria, Carpinus, Salix, Betula, Alnusなどを伴っている。草本花粉の出現傾向もⅢa層に類似している。Ia<sub>2</sub>層になると下位に比べてCryptomeriaおよびPinusの増加が目立ち、Fagusをはじめとする落葉広葉樹の花粉の割合が減少する。また草本類の中でのGramineaeの占める割合が急増している。最上部のIa<sub>1</sub>層は、Ia<sub>2</sub>層であらわれた傾向がさらに顕著となる。Cryptomeria, Pinusが優占する花粉組成となり、草本類はIa<sub>2</sub>と同様ほとんどGramineaeで占められている。A-20においても、各層毎の各タクサ(分類単位)の割合およびⅢa層からIa<sub>1</sub>層までの花粉組成の変化は、A-18のそれらとあまり変わらない特徴を示している。Cryptomeria, Quercus, Alnusの消長に若干のちがいがみられるのみである(第46図)。

以上の結果から次のようない境が推測される。Ⅲa層、IIa層の堆積当時この付近は開けた状態にあり、後背の丘陵地や台地の林はコナラやブナを主とし、クマシデ、クリミ、ケヤキ、カエデ、ハシバミなどの温帯性落葉広葉樹やマツやスギなどの常緑針葉樹などからなっていたと推定される。また水辺にはスイレン科の仲間が繁茂し、ヤナギやハンノキがまわりを縁どっていたであろう。イネ科花粉の高率の出現は水田の存在によるものであろうし、畔にはヨモギやアカザ、カヤツリグサなどが生えていたであろう。Ia<sub>2</sub>層、Ia<sub>1</sub>層堆積当時にになると、後背地でのブナの伐採とマツ、スギの植林の影響が花粉組成に大きくあらわれてくる。ブナ・コナ

ラを中心とした落葉広葉樹林はマツ林やスギの林にかわり、水田も更に広がったと考えられる。



第46図 主要花粉ダイアグラム

第5表 花粉百分率表

#### 4. 後河原遺跡Ⅲ層水田跡出土植物遺体

東北大学農学部 星川清親

水田遺構のアゼの内側面に多数の水稻のモミが散乱して発見された。モミはほぼ同一面より出土し、炭化はしてはいないが、モミの内部には玄米は見当らなかった。このことから出土物は脱穀して玄米をとったあとのモミガラを、田面に捨てたものか、あるいは収穫適期をすぎても刈ることができず、茎が枯れてモミが自然に地上に落下し、玄米は腐って消失しモミガラだけが残り、湛水に浮いてアゼに寄ってそのまま水が引いて、アゼに埋まり、そのアゼが埋没したものと思われる。

モミは写真図版1に示すように長さ7.3mm、幅3.4mmで形は比較的よく揃っており、完全な日本型品種で、現代の品種に近い形態のものと思われる。なお、土壤中にイネの茎の断片と思われるものが、ミイラ化状態でかなり多数存在した。また、カヤツリグサ、コウホネなど水田雑草の種子などもいろいろ存在した。

S D23の堆積土内では、多数のウリの種子がかたまって出土した。種子は炭化していないかった。その状況を写真図版2-1に示す。これはたぶんカボチャの種子ではないかと思われる(写真図版2-2)。カボチャ(ニホンカボチャ)が日本に渡来したのは16世紀のことであるから、それがいち早く仙台の地にも傳来して栽培されたのであろう。種子の量からみて、大形のカボチャの果実1ヶがそのまま腐熟したものと見られる。種子とまぎって多くのゴミムシの翅鞘や胸部、腹部の遺体が見出された(写真図版2-3)。ゴミムシは腐熟した果実などに多く集まるものである。腐果に集まつた虫たちと一緒に、これらが上砂に埋没し、何らかの理由で腐敗せずに原形を留めたものと思われ興味深い。(1984年2月29日)



1. B-21グリット  
IIIa層作土

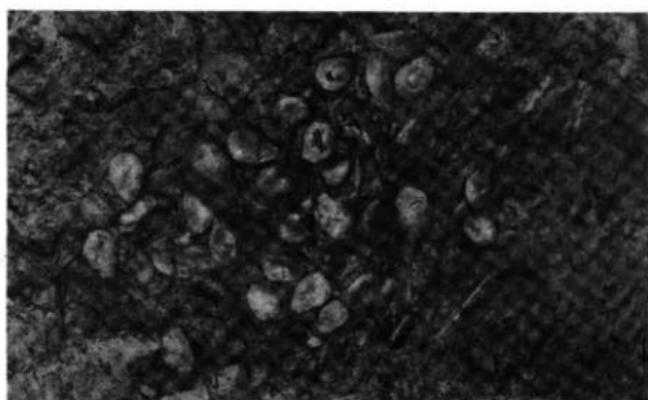


2. 1と同じサンプル群

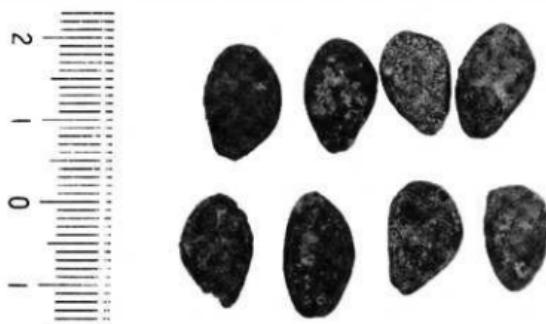


3. 1と同じサンプル群

写真図版1 植物遺体



1. ウリの種子  
出土状況  
(SD23)



2. ウリ(カボチャ)  
種子



3. ゴミムシの  
遺体

写真図版2 動植物遺体



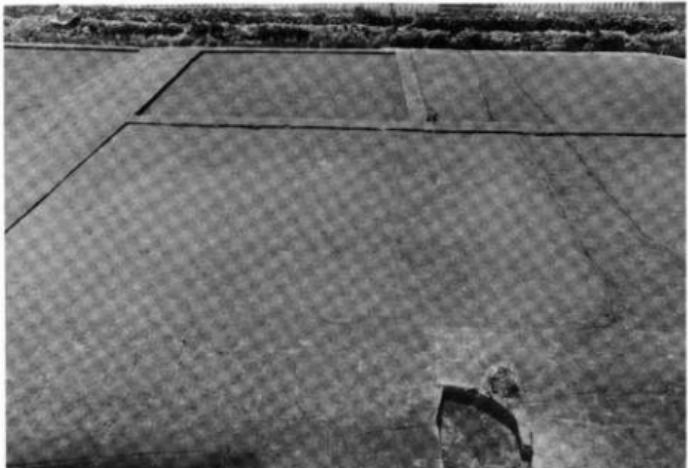
1. 調査前風景  
(東から)



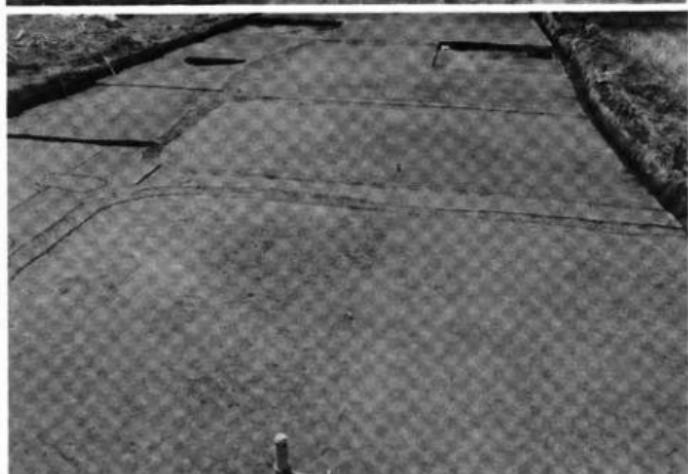
2. 調査前風景  
(南東から)



3. 調査前風景  
(西から)



1. Ⅲ層水田耕作D-E  
検出状況  
(I区A~C -  
17~19束から)

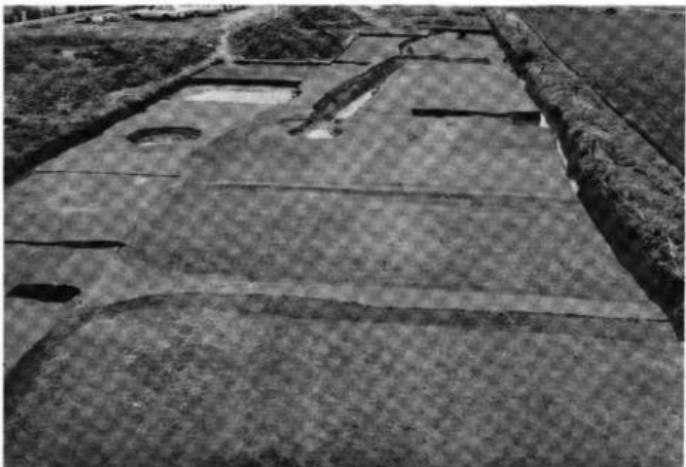


2. Ⅲ層水田耕作土上面  
検出状況①  
(I区A~C -  
14~21束から)

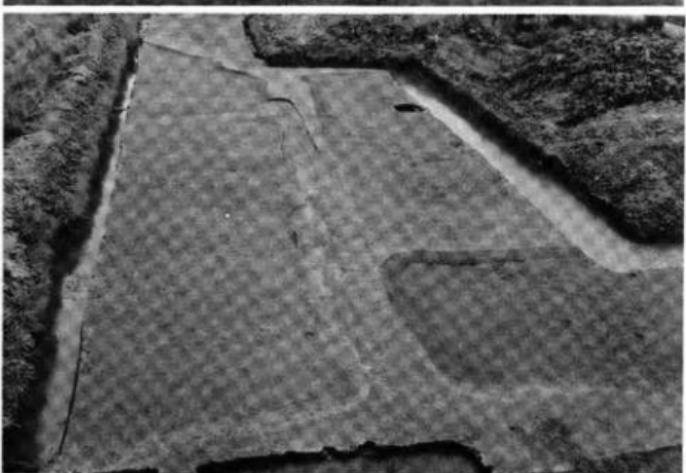


3. Ⅲ層水田耕作土上面  
検出状況②  
(I区A~I -  
20~21束から) 81

写真図版5  
検出遭構2



1. Ⅲ層水田跡作土下面  
検出状況①  
(I区A～C -  
10～29東から)



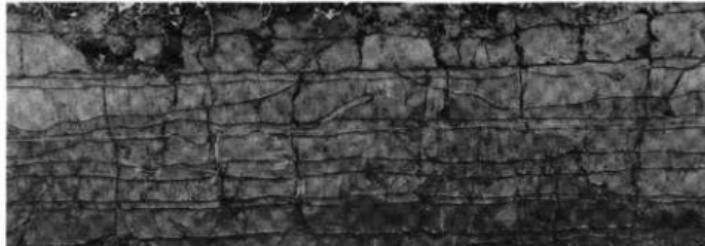
2. Ⅲ層水田跡作土下面  
検出状況②  
(I区D～H -  
20～21北から)



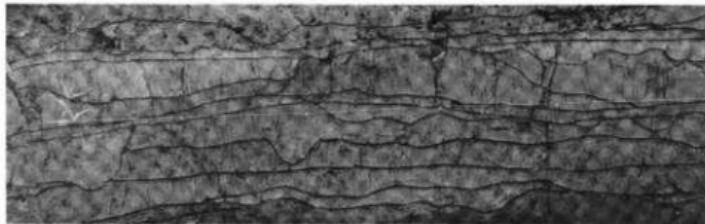
3. Ⅲ層水田跡水口c  
(I区C - 20北から)



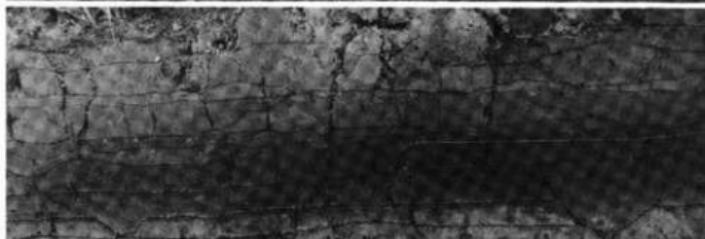
4. Ⅲ層水田跡水口b  
(I区B - 19西から)



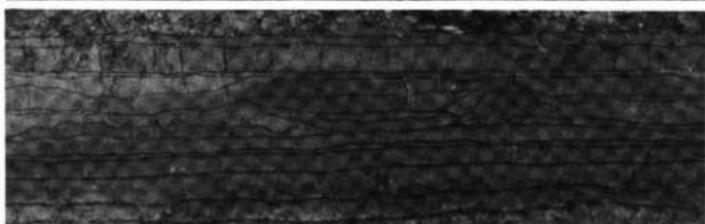
1. 田層水田跡  
畦D断面  
(I区A-18  
北壁)



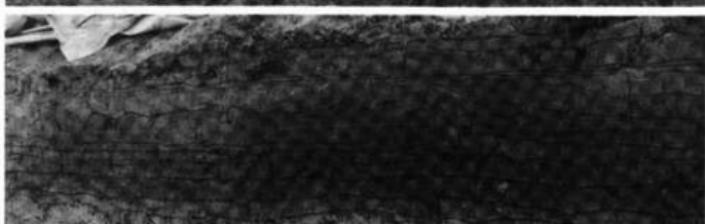
2. 田層水田跡  
畦E断面  
(I区A-19  
北壁)



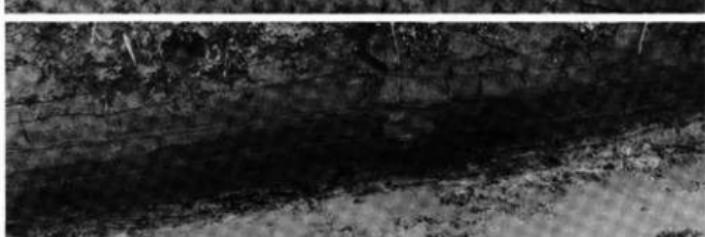
3. 田層水田跡  
畦丁断面  
(I区D-21  
東壁)



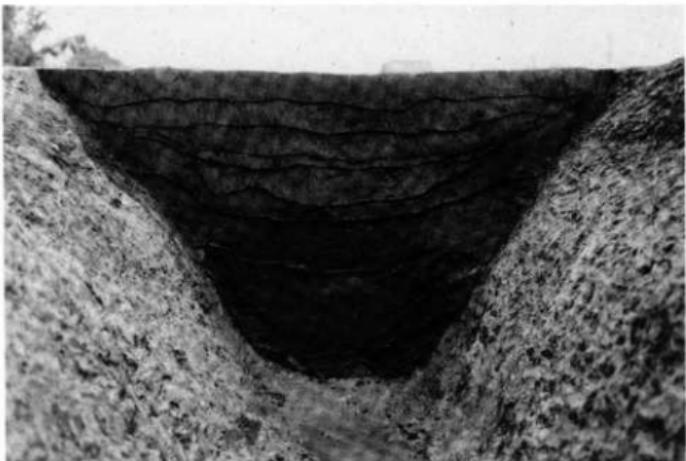
4. 田層水田跡  
畦G断面  
(I区B-21  
東壁)



5. 田層水田跡  
畦C断面  
(I区A-15 +  
16 北壁)



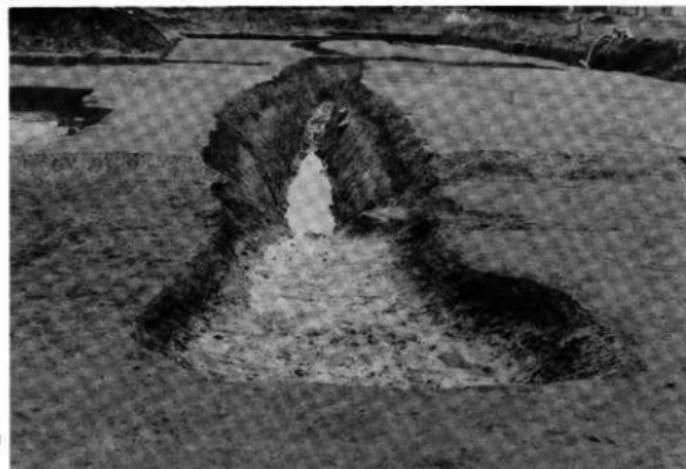
6. 田層水田跡畦  
終了部断面  
(I区G-I-21 83  
北壁)



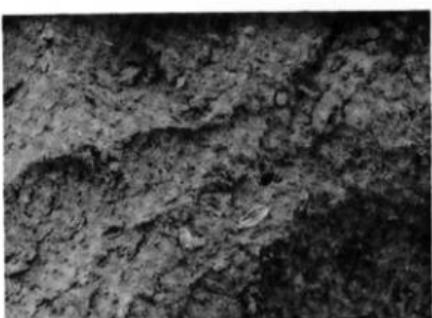
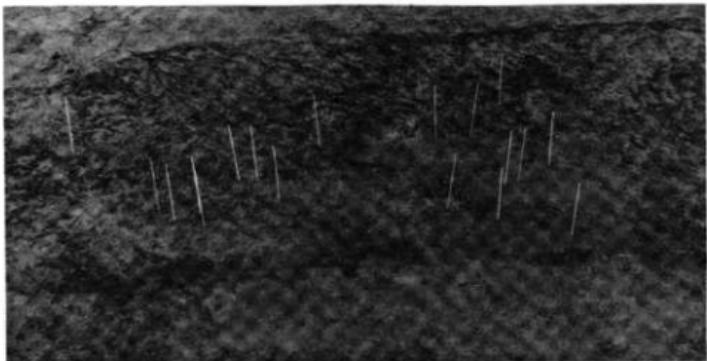
1. SD23堆積土  
(I区B-15  
東から)



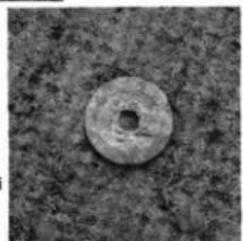
2. SD23完掘状況①  
(I区 西から)



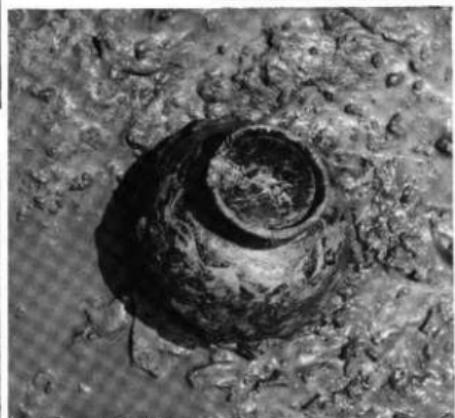
3. SD23完掘状況②  
(I区 東から)



2. Ⅱ層水田跡  
畦G上稻穀出土状況②  
(I区B-20 北から)



3. Ⅱ層水田跡作土上面  
古銭出土状況  
(I区B-18)



5. SD23 漆器椀出土状況

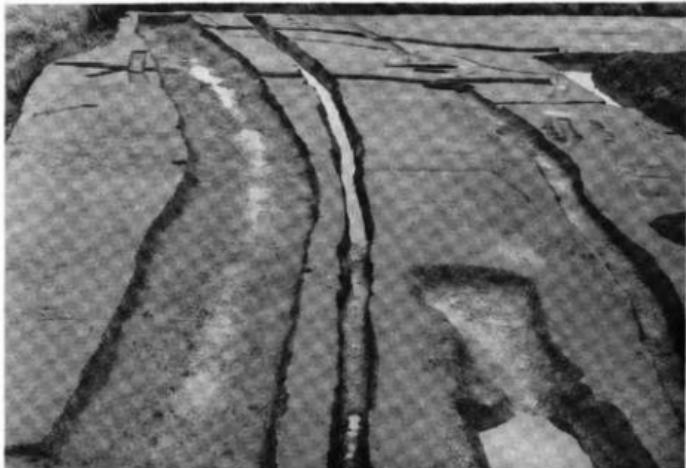


4. SD23 遺物出土状況



6. SD23 木製品出土状況

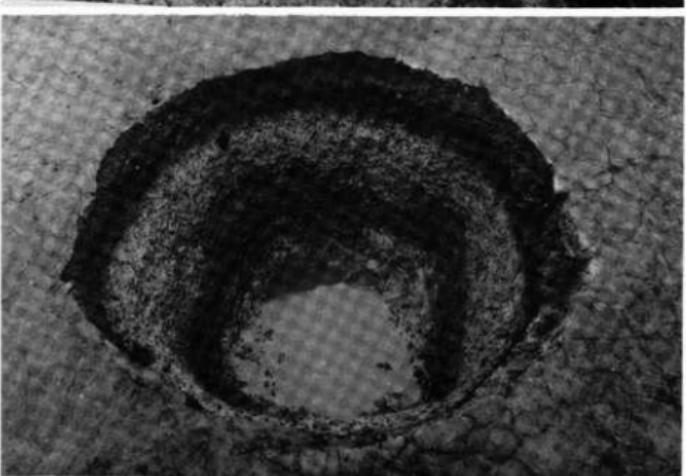
1. IV層上面検出造構  
完掘状況  
(I区A~C - 16~21  
西から)



2. SD25堆積土  
(I区B - II 東から)

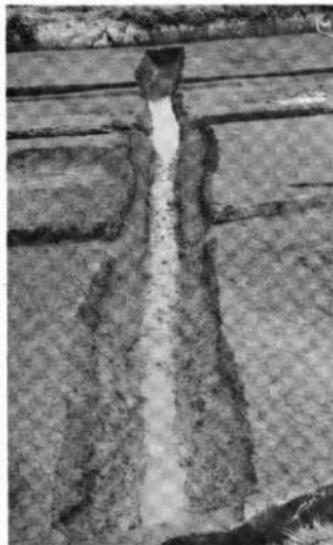


3. SE2完掘状況  
(I区C - 17 東から)





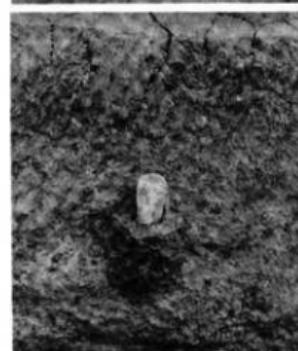
1. 小溝状灌漑実施状況  
(I 区 C - 16~18 西から)



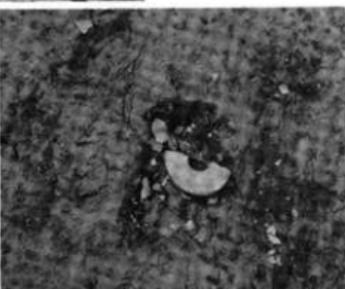
2. SD 42 実施状況  
(I 区 南から)



3. 褐層水田跡  
作土底面検出状況  
(I 区 A~C -  
14~21 西から)

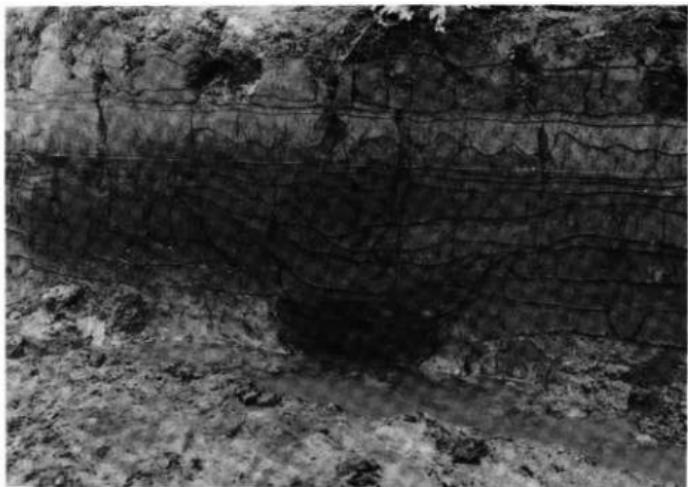


4. SD 42 石器出土状況  
(I 区 C - 19 西から)

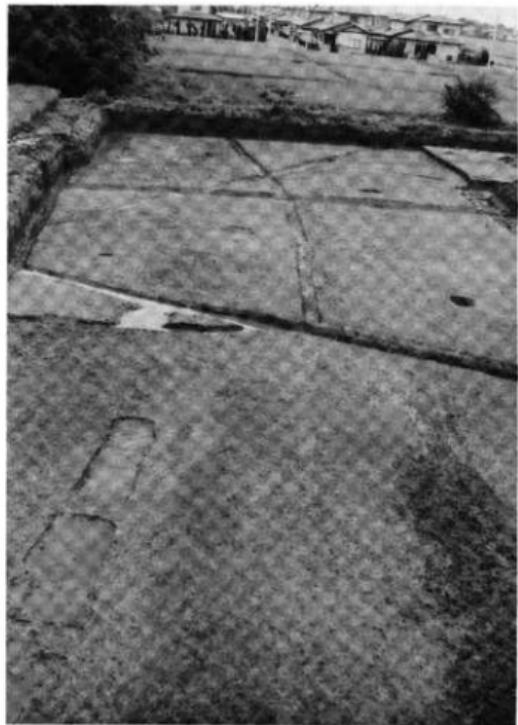


写真図版10  
検出遭構 6  
遭物出土状況 2

写真図版II  
検出遺構 7



1. SD42堆積土 (I区 A - 19 北壁)



2. VIc層上面検出遺構完掘状況  
(I区 A-C - 16~21 西から)



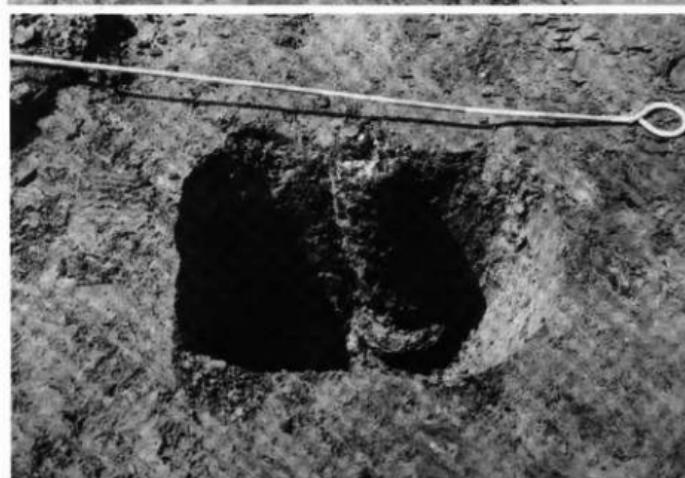
3. 1号河川跡トレンチ内完掘状況  
(II区 南東から)



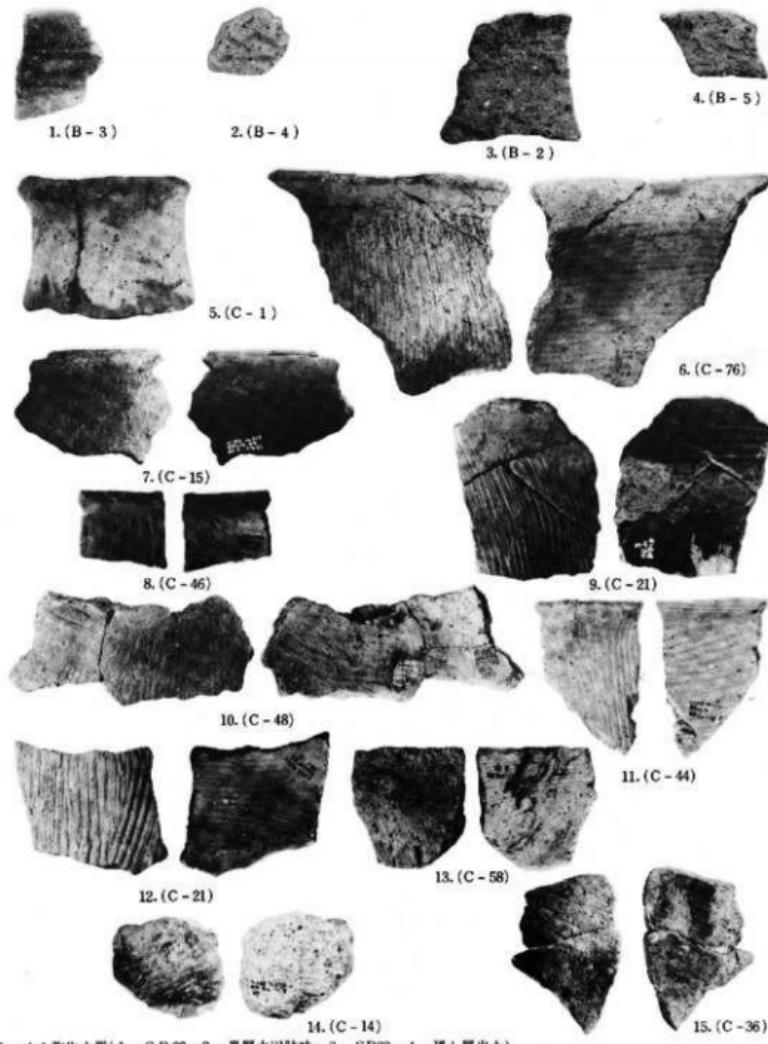
1. 1号河川跡  
灰白色火山灰  
(II区B-6  
北西から)



2. 1号河川跡  
土器出土状況  
(II区B-6)



3. 焼夷弾出土状況  
(I区B-17)



1~4: 弥生土器(1 - SD 23, 2 - Ⅲ層水田跡蛙、3 - SD23, 4 - Ⅳd層出土)

5~15: 土師器(非ロクロ) (5 - Ⅱ層、6 - 1号河川跡、7 - 1号河川跡、8 - SD 1、9 - I層、10 - 1号河川跡、

11 - 1号河川跡、12 - I層、13 - 1層、14 - 1号河川跡、15 - Ⅲ層水田跡蛙)

縮尺不同

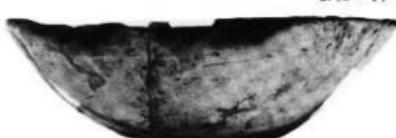
写真図版13 弥生土器・土師器 1



1. (D - 16)



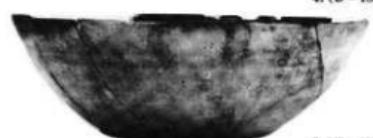
2. (D - 4)



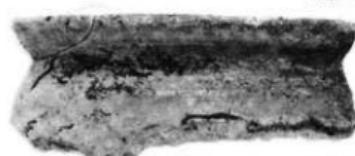
3. (D - 7)



4. (D - 13)



5. (D - 11)



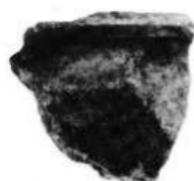
6. (D - 14)



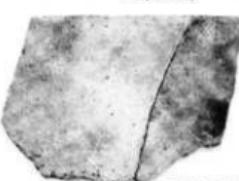
7. (D - 3)



8. (D - 19)



9. (D - 21)



10. (D - 9)

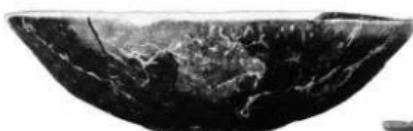
1 : 1号河川跡出土 2 : II層出土 3 : 1号河川跡出土  
4 : 1号河川跡出土 5 : 1号河川跡出土 6 : 1号河川跡出土  
7 : 蓋層水田跡作土出土 8 : III層水田跡作土出土  
9 : SD28出土 10 : 1号河川跡出土  
縮尺不同



1. (Q - 1)



2. (E - 12)



3. (E - 7)



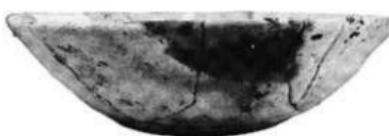
4. (E - 20)



5. (E - 17)



6. (E - 13)



7. (E - 18)



8. (E - 15)



9. (E - 22)

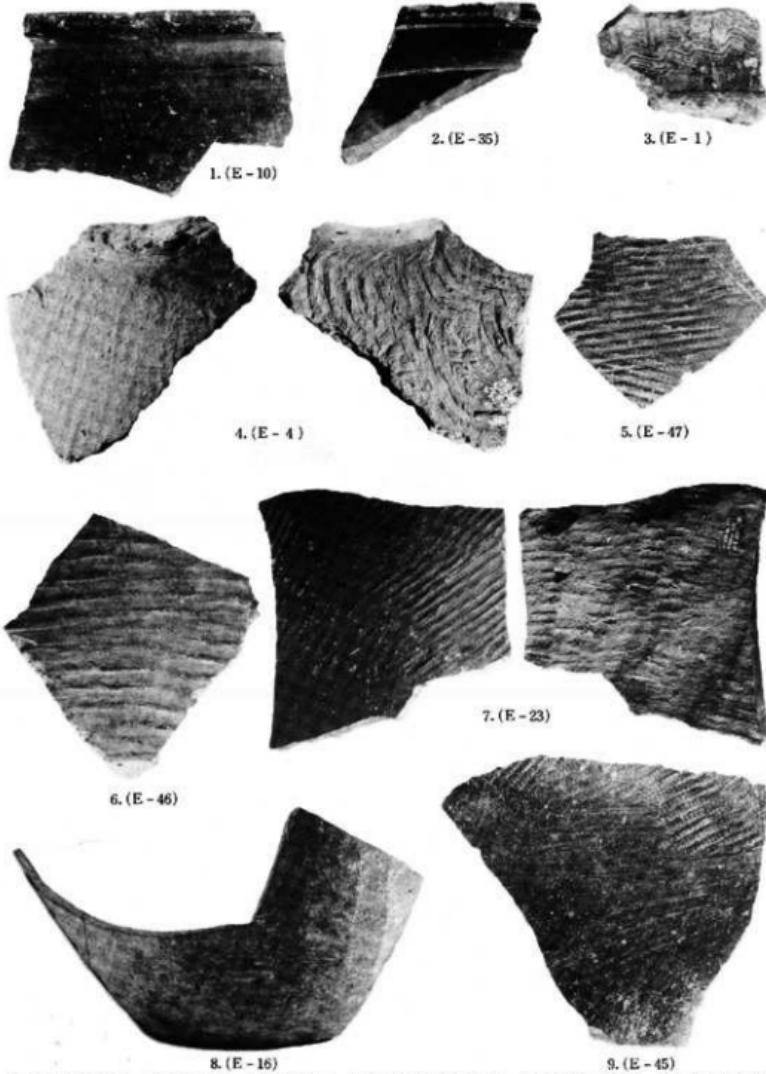


10. (E - 8)

1 : 赤燒土器(1号河川跡出土)、2~10:須恵器(2~1号河川跡出土、3~SD28出土、4~1号河川跡出土、5~1号河川跡出土、6~1号河川跡出土、7~1号河川跡出土、8~1号河川跡出土、9~1号河川跡出土、10~1号河川跡出土)

縮尺不同

#### 写真図版15 赤焼土器・須恵器 1



1 : 1号河川跡出土 2 : Ⅱ層出土 3 : Ⅰ層出土 4 : Ⅲ層水田跡作土出土 5 : 1号河川跡出土 6 : 1号河川跡出土  
7 : SD1出土 8 : 1号河川跡出土 9 : 1号河川跡出土 縦尺不同



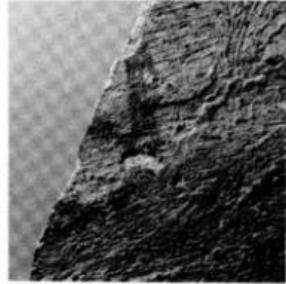
1. (D - 11)



2. (D - 10)



3. (E - 14)



4. (E - 21)

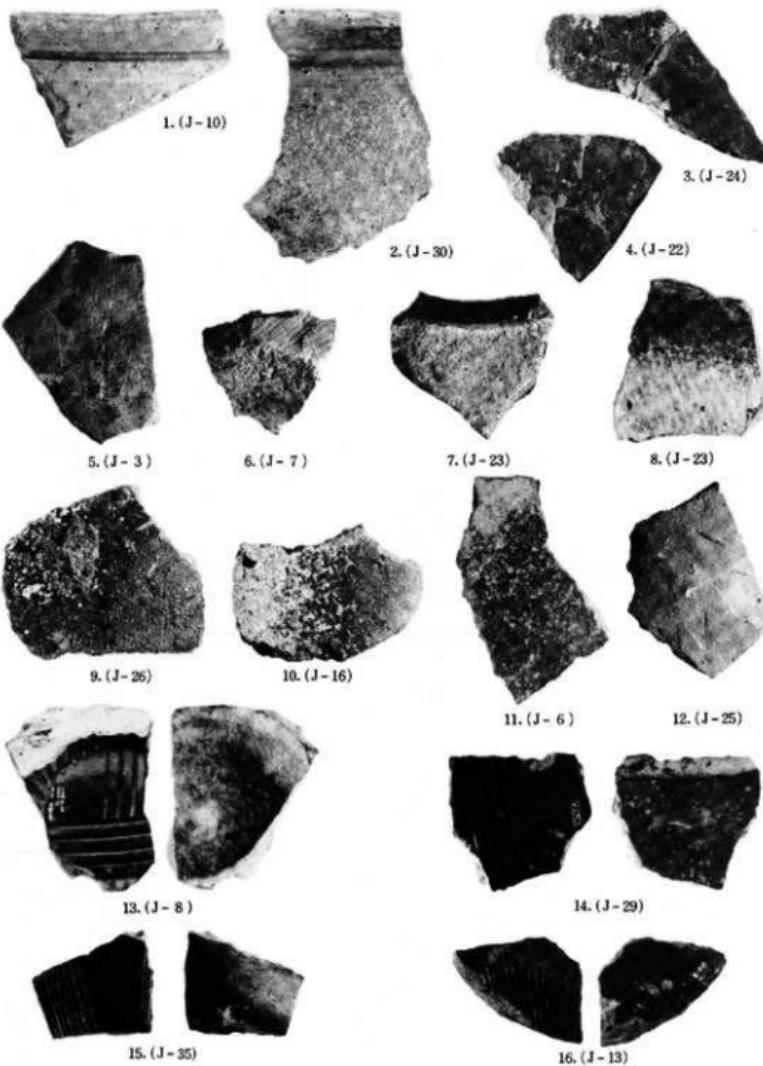


5. (E - 13)

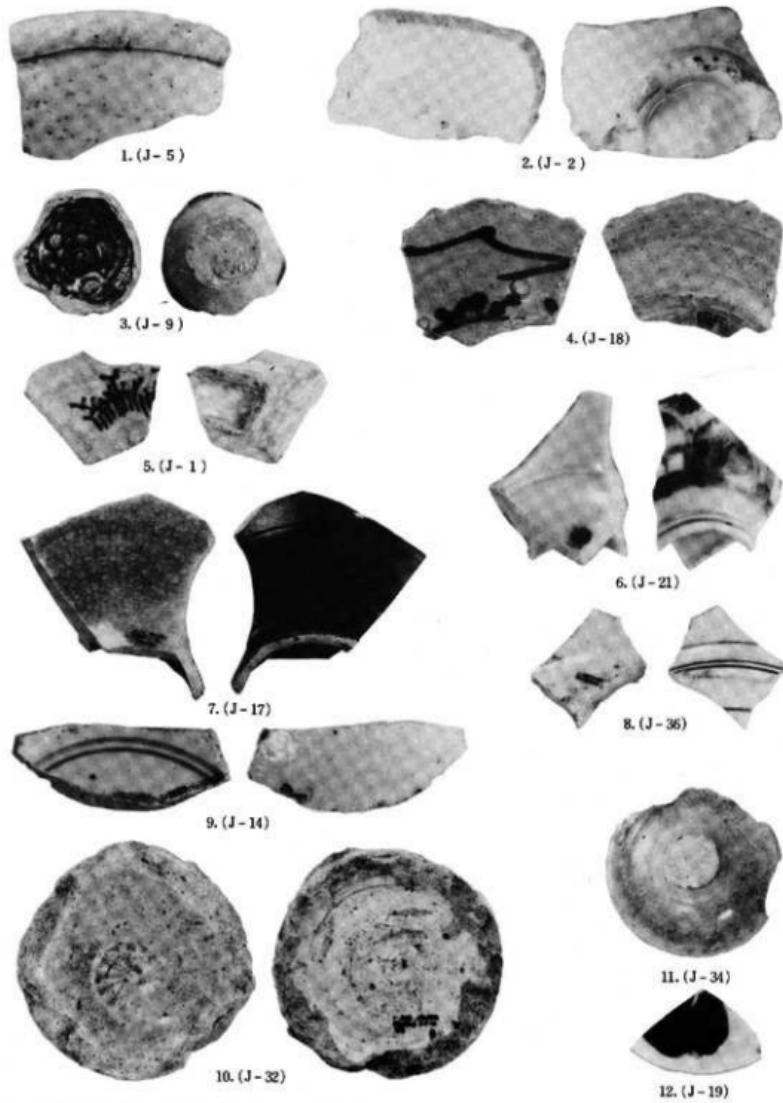
- 1 : 上師器环体部 (1号河川跡出土)  
2 : 上師器环体部 (1号河川跡出土)  
3 : 須恵器环底部 (1号河川跡出土)  
4 : 須恵器环体部 (1号河川跡出土)  
5 : 須恵器环体部 (1号河川跡出土)

縮尺不同

写真図版17 墨書土器

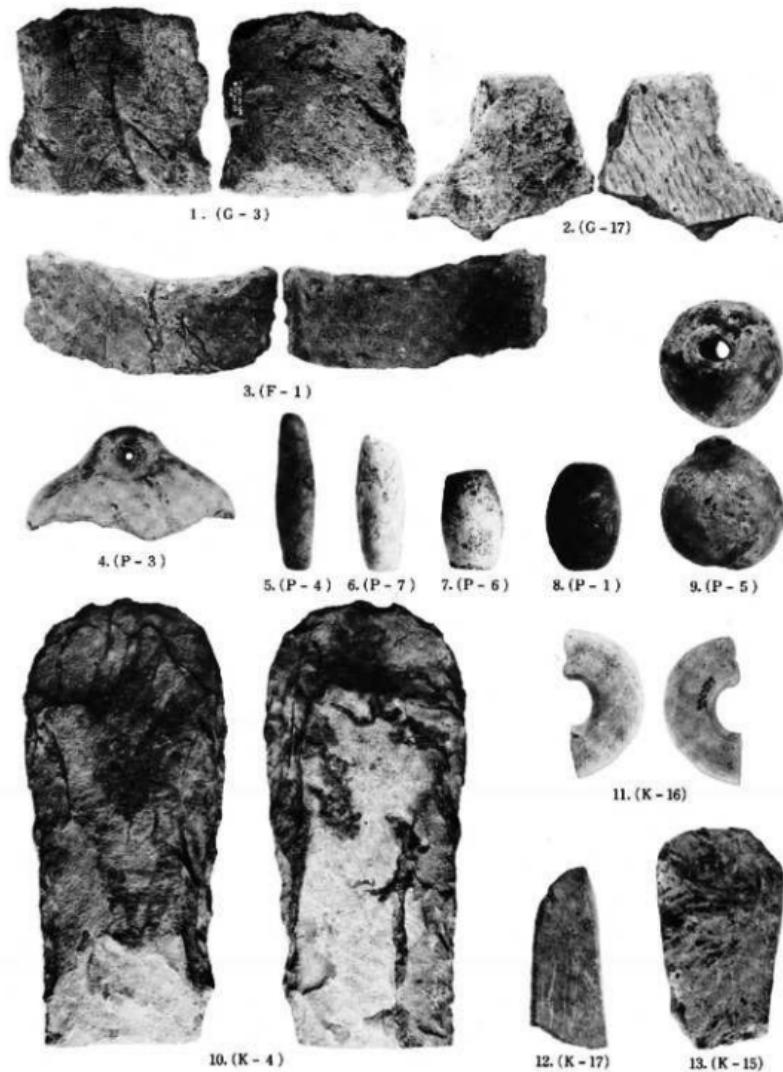


1・2・11・12：產地不明(1 - SD25、2 - I層、11 - 1号河川跡、12 - Ⅲ層水田跡作土出土)  
 3・4：在庭地(Ⅲ層水田跡作土出土) 5～8：常滑產(5 - Ⅱ層、6 - SD23、7・8 - Ⅲ層水田跡作土出土)  
 9・10：東北產(9 - Ⅲ層水田跡作土、10 - II層出土) 13・14：產地不明(13 - SD23、14 - Ⅲ層水田跡作土)  
 15・16：在地縫(15 - Ⅱ層、16 - I層出土)



1～2：中国産白磁(1～Ⅲ層水田跡作土) 2～Ⅰ層出土) 3：切込焼(S D 25) 5・6・8：伊万里焼(5・8～1層、  
6～Ⅱ層出土) 7：相馬焼(Ⅰ層出土) 9：在地窯(Ⅰ層出土) 10：唐津焼(Ⅱ層出土) 11：京焼?(Ⅱ層出土)  
4・12：産地不明(Ⅱ層出土)

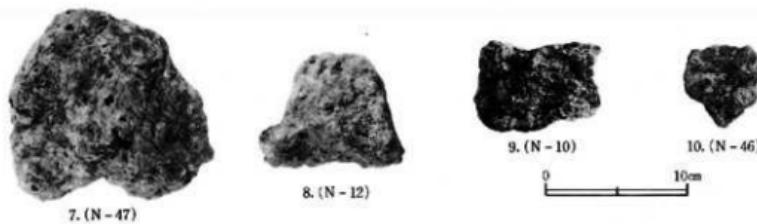
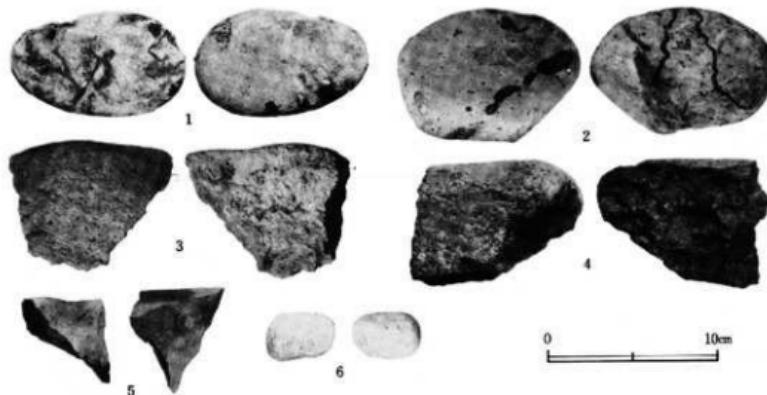
#### 写真図版19 陶 磁 器



1~3:瓦(1-S D 23、2~1号河川跡、3~Ⅲ層水田跡作土出土) 4:土鉗(Ⅱ層出土) 5~9:土鍼(5~8~Ⅲ層、6~1号河川跡、7~9~Ⅲ層水田跡作土出土) 10:打製石斧(S D 42出土) 11:環状石製品(Ⅲ層水田跡作土出土)  
12~13:燧石(12~1号河川跡、13~Ⅲ層水田跡作土出土)

写真図版20 瓦・土製品・石器・石製品

縮尺不同



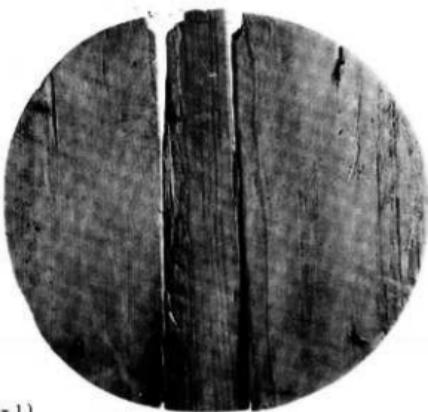
1～6：礫(SD25出土) 7～10：鐵鋤(7・8 - Ⅲ層水田跡作土、9 - Ⅱ層、10 - 1号河川跡出土)  
11：鍛鐵(Ⅱ層出土)

縮尺不同

写真図版21 磚・金属製品



1. (L - 3)

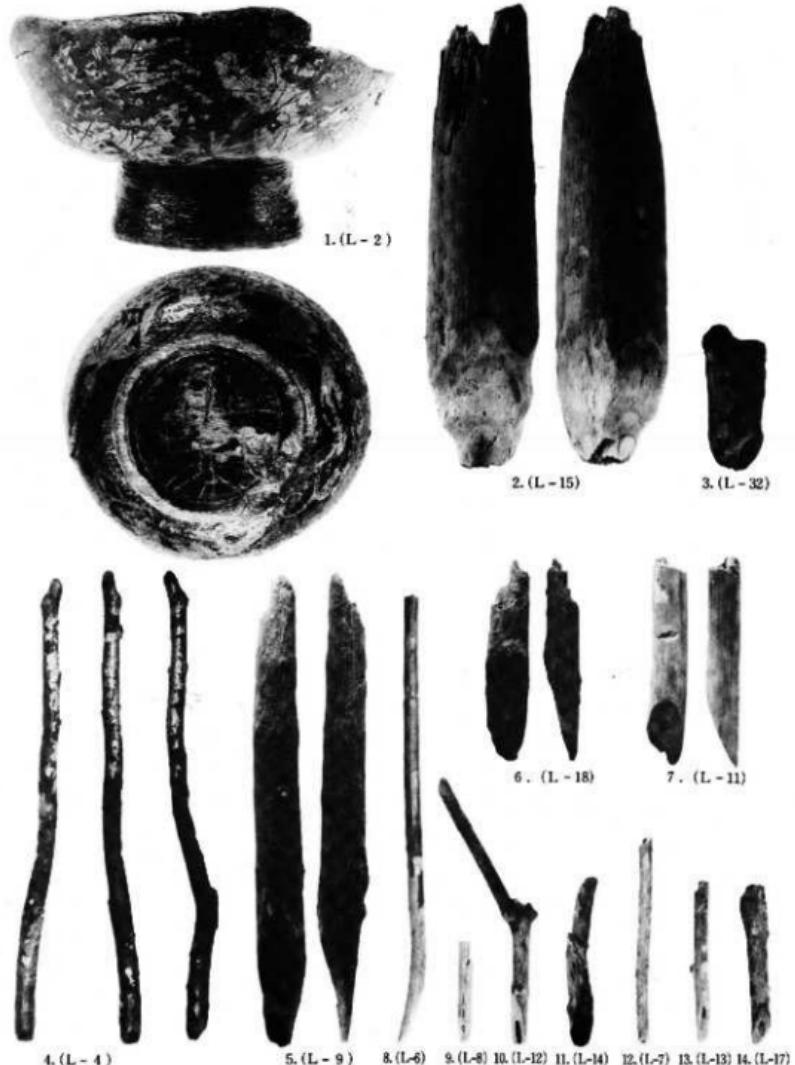


2. (L - 1)

1 : 農具? (SD23出土)

2 : 曲物 : 底? (1号河川跡出土)

縮尺不同



1 : 漆器桺(SD23出土) 2~7 : 梳(3・5~7 - SD23、2 - SD27、4 - SE2出土)  
8~14 : 切断面のある小枝(8~13 - SD23、14 - SD27出土)

縮尺不同

写真図版23 木 製 品 2

## 発掘調査参加者

浅見礼子 井口祐二 石山真理子 氏家弘子 遠藤勝一 太田栄子 太田照美 太田しげの  
 大友フミ子 大野亨 大山のり子 柏倉セツ子 柏原靖史 鎌田直 菊池豊 熊谷信一 小竹  
 恵子 今野義晴 佐々木友子 佐藤紀美 佐藤忠勝 佐藤みよ 庄子敦 菅ノ又三千代 菅原  
 まさよ 鈴木和子 鈴木茂人 中野裕平 新堀昭宏 八賀宗夫 平沢英樹 本堂富子 宮本昌  
 俊 村上令子 横田太吉 小笠原久美子 小林康子 遠藤武治 三浦和子 大河内佳子

## 職 員 錄

### 社会教育課

課 主	長 幹 永 早 野 春 泰
文化財管理係	
係 主	長 事 大 澤 岩 澤 克 夫 輔 宏

### 文化財調査係

係 教 主	長 佐 藤 渡 佐 田 結 城 瀬 原 沼 沢 村 原 藤 森 藤 岡 藤 部 辺 浜 野 島 井 橋 高
文化財調査係	
教 主	長 佐 藤 渡 佐 田 結 城 瀬 原 沼 沢 村 原 藤 森 藤 岡 藤 部 辺 浜 野 島 井 橋 高
派 遣 員	長 佐 藤 渡 佐 田 結 城 瀬 原 沼 沢 村 原 藤 森 藤 岡 藤 部 辺 浜 野 島 井 橋 高

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物靈屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）  
第2集 仙台城（昭和42年3月）  
第3集 仙台市燕沢番寺横浜穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）  
第4集 史跡陸奥國分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）  
第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）  
第6集 仙台市荒巻五本松墓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
第7集 仙台市富沢裏町古墳苑調査報告書（昭和49年3月）  
第8集 仙台市向山愛宕山構穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）  
第9集 仙台市根岸町宗徳寺様六群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）  
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）  
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）  
第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）  
第14集 岩出塚発掘調査報告書（昭和54年3月）  
第15集 史跡遠見塚昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
第16集 六反田遺跡発掘（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）  
第17集 北鳳敷遺跡（昭和54年3月）  
第18集 桜江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）  
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）  
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）  
第21集 仙台市開発関係遠跡調査報告I（昭和53年3月）  
第22集 経ヶ率（昭和55年3月）  
第23集 年報I（昭和55年3月）  
第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）  
第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）  
第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）  
第27集 史跡陸奥國分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
第28集 年報2（昭和56年3月）  
第29集 郡山遺跡I—昭和55年度発掘調査概報一（昭和56年3月）  
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）  
第31集 仙台市開発関係遠跡調査報告II（昭和56年3月）  
第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）  
第35集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）  
第36集 北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）  
第37集 仙台平野の遺跡群I—昭和56年度発掘調査報告書一（昭和57年3月）  
第38集 郡山遺跡II—昭和56年度発掘調査概報一（昭和57年3月）  
第39集 藤沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）  
第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I（昭和57年3月）  
第41集 年報3（昭和57年3月）  
第42集 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査一（昭和57年3月）  
第43集 朱嶋跡（昭和57年8月）  
第44集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）  
第45集 茂庭・茂庭住宅団地造成工事内遺跡発掘調査報告書一（昭和58年3月）  
第46集 郡山遺跡III—昭和57年度発掘調査概要一（昭和58年3月）  
第47集 仙台平野の遺跡群II—昭和57年度発掘調査報告書一（昭和58年3月）  
第48集 史跡遠見塚昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）  
第49集 仙台市文化財分布調査報告I（昭和58年3月）  
第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
第51集 仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）  
第52集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第2次調査報告一（昭和58年3月）

- 第53集 中田畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
第54集 神明社遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
第55集 南小泉遺跡－青葉女子学園移転新工事地内調査報告一（昭和58年3月）  
第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年3月）  
第57集 年報4（昭和58年3月）  
第58集 今泉城跡（昭和58年3月）  
第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）  
第60集 南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書一（昭和58年3月）  
第61集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）  
第62集 燕沢遺跡（昭和59年3月）  
第63集 史跡候奥岡分寺跡－昭和58年度環境整備子備調査概報一（昭和59年3月）  
第64集 郡山遺跡群－昭和58年度発掘調査概報二（昭和59年3月）  
第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ－昭和58年度発掘調査報告書一（昭和59年3月）  
第66集 年報5（昭和59年3月）  
第67集 高沢水山遺跡第一号－病院施設に伴う泉崎前地区的調査報告書一  
（昭和59年3月）  
第68集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第3次調査報告書一  
（昭和59年3月）  
第69集 仙台市高速鉄道関係調査報告書Ⅳ（昭和59年3月）  
第70集 戸ノ内遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）  
第71集 後河原遺跡（昭和59年3月）

---

---

仙台市文化財調査報告書第71集

後 河 原 遺 蹤

－平安時代以前・中世の水田路の調査－

昭和59年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市田町3-7-1  
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 共 新 精 版 印 刷

仙台市日の出町2-4-2  
TEL.36-7181

---

---

